

657-2341



1200501571767

57

34

北の鳥南の鳥

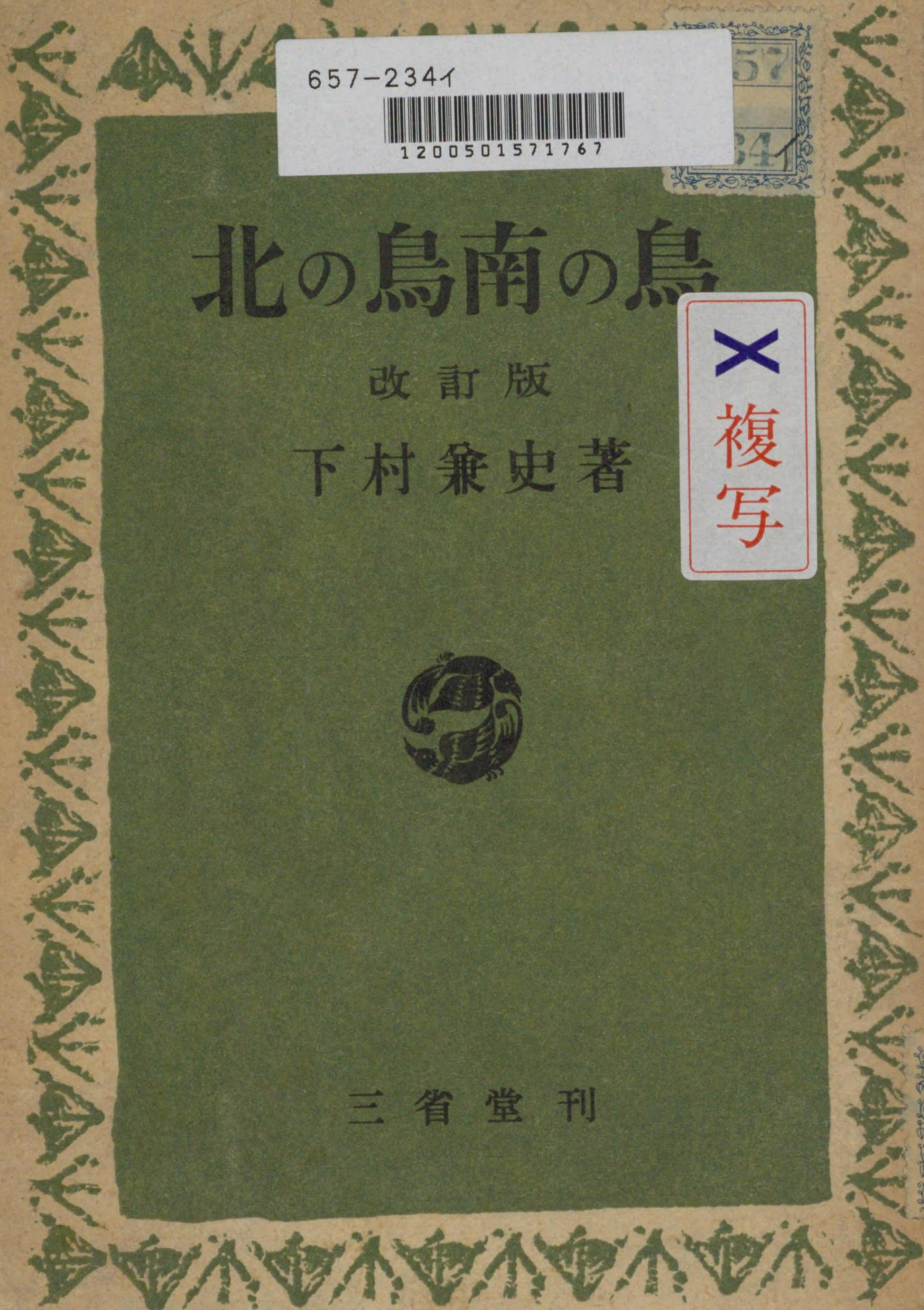
改訂版

下村兼史著

×
複写



三省堂刊



北の鳥 南の鳥

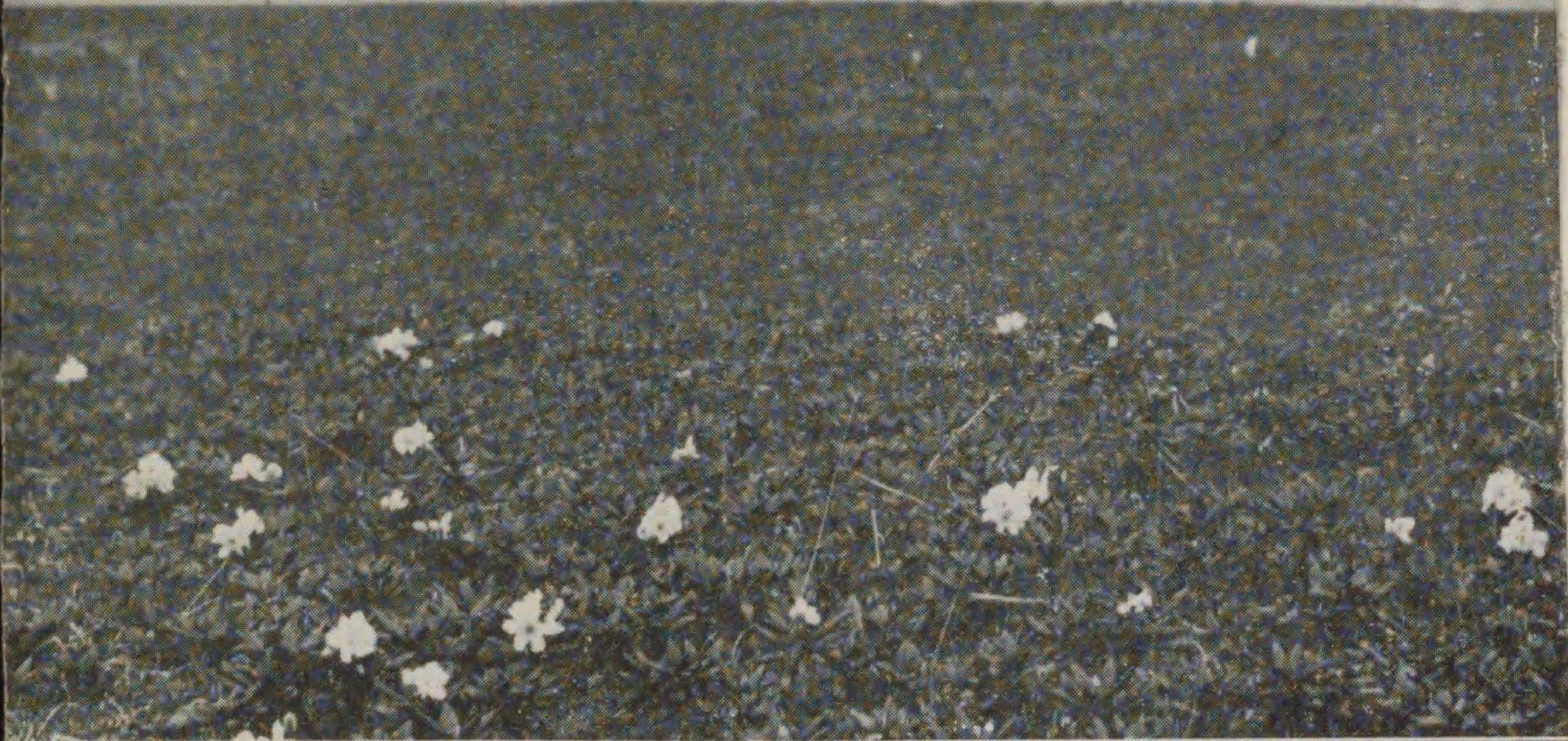


改訂版

下村兼史著

三省堂





北千島の濕原

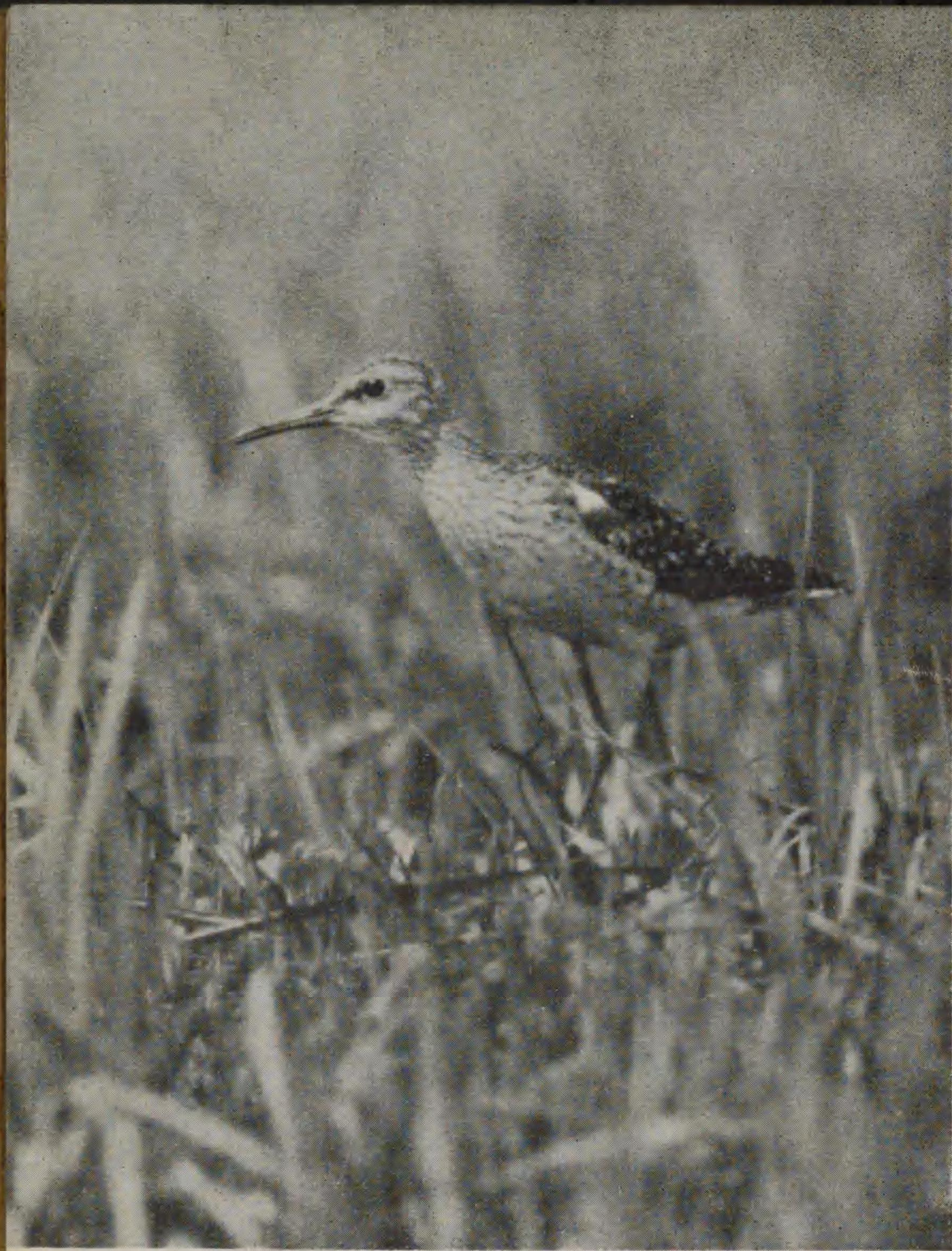


ハマシギの巢と卵



ヒバリシギの巢と卵





タカブシギ



ハマシギの抱卵

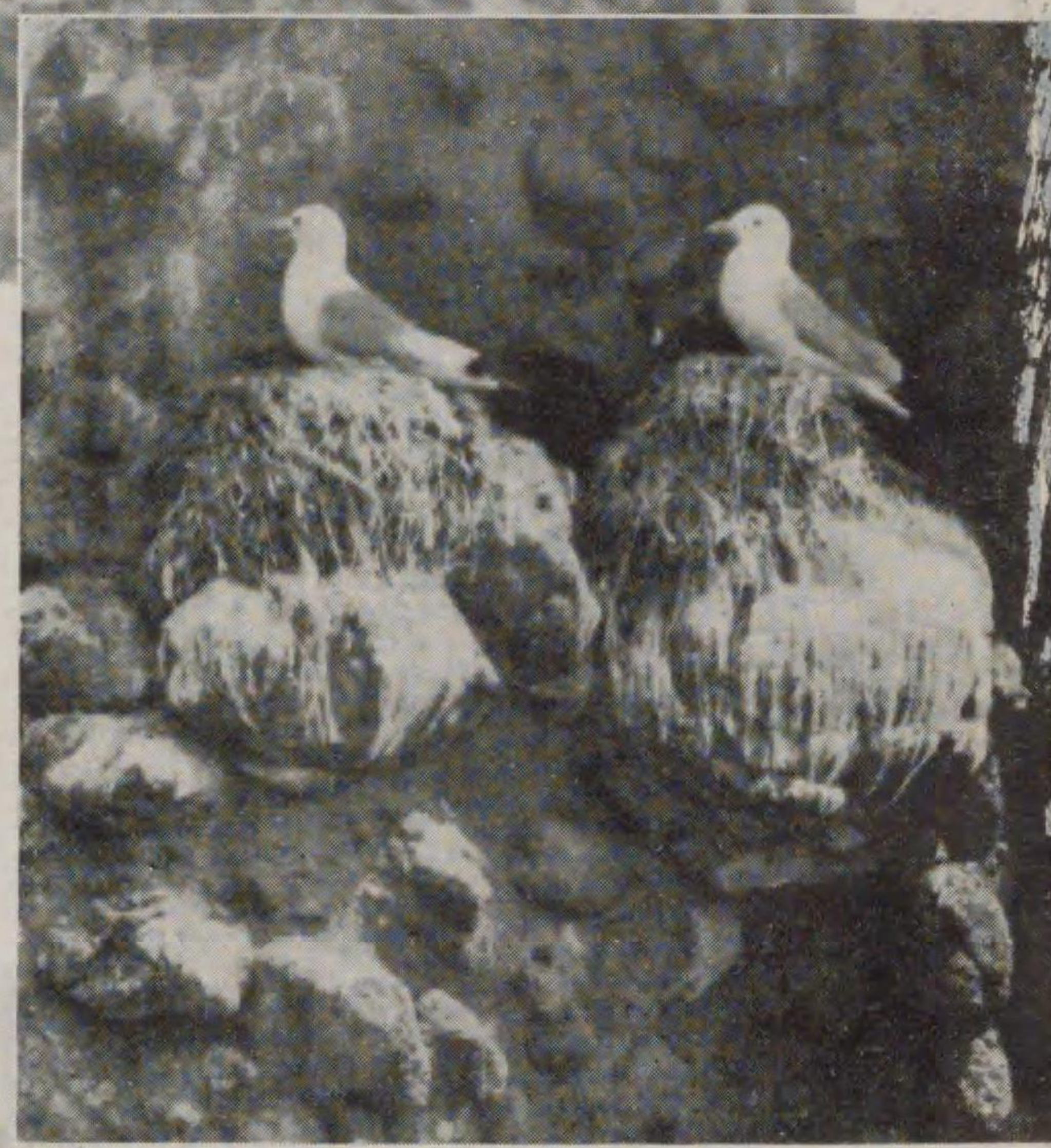
- (上) ハマシギが巣に近づいて来る
- (中) 卵の上を體で被ふ
- (下) 卵を抱くと體は見えなくなる



エトビリカとその巣穴



ヒバリシギの抱卵



北千島の海岸



ミツユビカモ
とその巣穴



ムネアカカタヒバリの育雛

(上) ハマシギが巣に近づいて来る



亞熱帯の林相
—小笠原島—



アビの巣と卵



ルリカケスとその巣穴



シロエリオオハムの巣と卵

657
234A

はしがき

「北の鳥、南の鳥」と題した此書は寧ろ「北の鳥、南の鳥」と云つた方が適當と思はれる位、鳥嶼の鳥に就いて記述したものである。

遠近に關らず島が海に依つて、大陸と本土を距つことは、古來その島に特異な風俗、習慣を残してゐるやうに、動植物に於いても、既に本土には跡を斷つた種屬も未だ守り得てゐることや、本土には全く見られぬ島特有の物が棲息してゐることがある。

種屬に於て以上の通りであるが生態的に觀ても亦種々の差異點が擧げられるのである。

本土に棲む物と同種の物でありながら、島嶼の地勢に従つて、生活環境が異なる爲に、全く意外に異なる生活をしてゐることがある。狭く限られた地域内で、色々な不自由や又反對の自由さを以て生活してゐる爲である。之等は所謂地方色とも云ふべきで、フロラにもファウナにも飽くなき興味であることは改めて云ふ迄もないことである。

本書に登載した島も鳥も數から云ふと僅少で、内容は貧弱なものであるが、觀察に費した年月は數年の長きにわたり、範圍は緯度にして、北緯五〇度から二五度附近に及んでゐる。

はしがき



クロテツの樹上に造つたヲガサハフ
ウグヒスの巢



箒枝に造つたイヒジマメボソの巢



アカココの育雛

但し此を生態調査などと云ふ、しかつめらしい言葉のもとに行つたものではなく、又著者も初めからそれを望んでゐない。往く所々で見た儘、聽いた儘を直ちに平易な文字にして表したのが此書である。

著者は一介のアマチュア、之等の資料を再考し詮議する能力が無い爲に、唯、率直な観察と云ふのを唯一の手段として歩を進めたのであつて、之等の資料が少しでも讀者の御参考になつた時は著者は十分に満足するのである。

長い時期と廣い地域に及ぶので、その間、著者は澤山の人々の御援助に與つたわけである。いち／＼その方々の名を擧げて茲に感謝の意を表はせないのは遺憾であるが、それ等の方々に對しこゝに改めて深謝する。尙、特に御助力を賜つた内田清之助博士、山階侯爵、西出悌二氏、石澤慈鳥氏の諸賢に對し幾重にも感謝する次第である。

昭和十一年五月

著者識す

改訂にあたりて

この書の初版を上梓してから既に五年になつた。その後、今日になつて「北」、「南」の意義は一變して、その範圍は數十倍に擴大されたのである。

元來、本邦産鳥類の夏鳥にあたる鳥の殆ど總てが、フィリピン以南ボルネオ、マレイ、スマトラ、ジャバ、或は濠洲方面で越冬するものが多く、その手近な鳥では燕などが好例である。冬鳥の多くも、北滿、シベリア、カムチャツカ、アリウシャン等の方から來るものが多く、夏鳥も冬鳥も亦旅鳥も云はゞ大東亞共榮圈内を往復してゐるのである。

俄然こゝに大東亞共榮圏の地圖が我々の眼前にくり擴げられ、今迄の候鳥の越冬、越夏の地は我々の身邊のものとなつたことは、何と云ふ愉快なことであらう。

これから我々も大いに見聞を弘めなければならぬ。そして「北の鳥、南の鳥」の第二輯、第三輯と追つて上梓すべきである。それは、この書の著者のみに手に依るものを望むのではなく、讀者の中にも必ずや、その意志のあられんことを切望してやまない次第である。

奄美大島の鳥

| | |
|---------------------|----|
| ウチヤマセンニウ | 二〇 |
| カラスの食事場 | 二二 |
| カンムリウミスズメ | 二三 |
| アマツバメ | 二六 |
| 城 <small>グッ</small> | 二七 |
| 島の鳥と方言 | 二四 |
| ルリカケス | 二五 |
| アカヒゲ | 二五 |
| 山の一夜 | 二五 |
| アマミヤマシギの巢 | 二五 |
| アヲバトの聲 | 二五 |
| 「ヒョーシャ」の撮影 | 二六 |

小笠原島の鳥

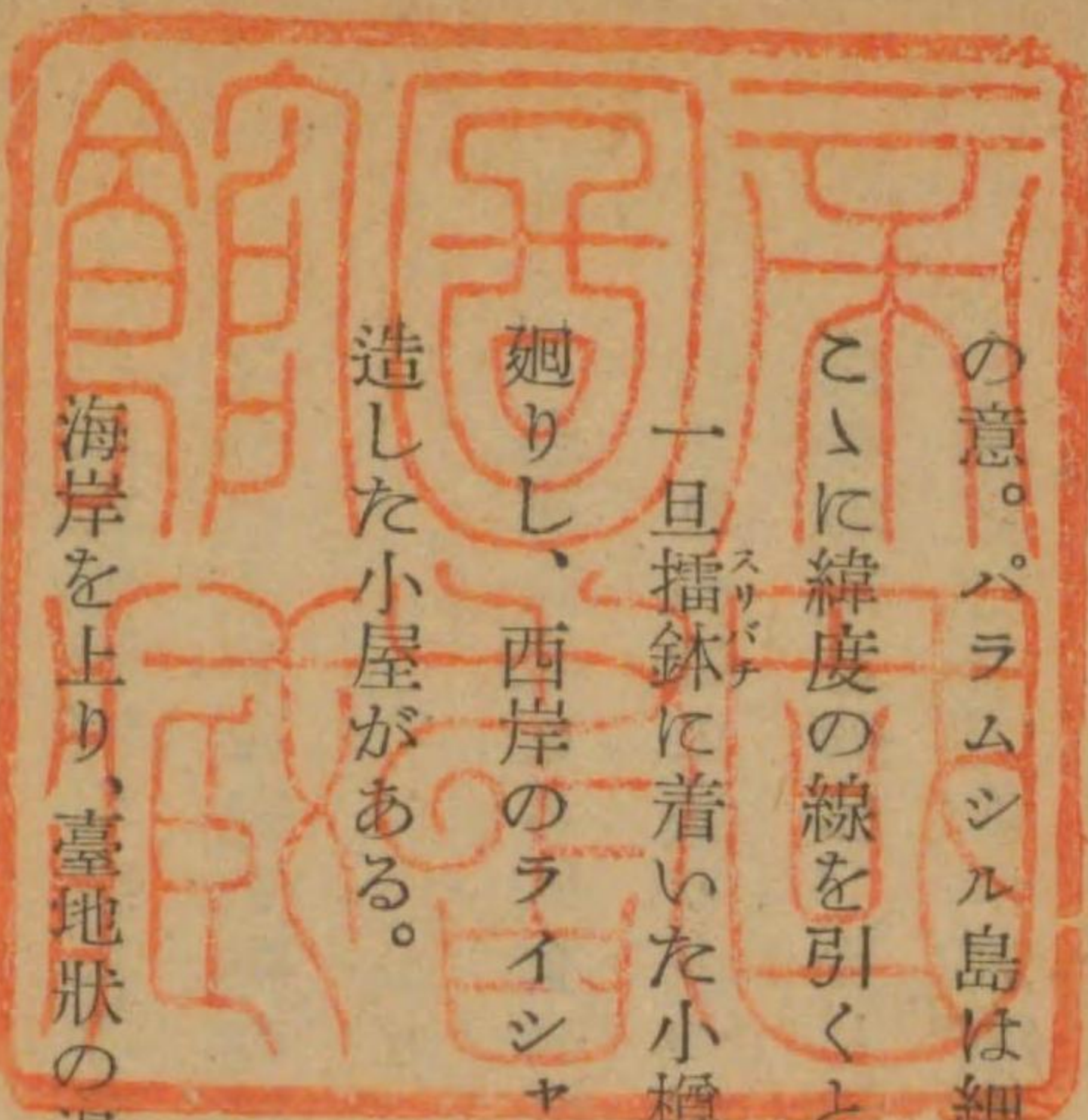
| | |
|---------------|----|
| 小笠原島紀行 | 一七 |
| 小笠原島のメジロとウグヒス | 一八 |
| メグロ | 一八 |
| 海鳥の放飼 | 一九 |
| 西之島のことども | 一九 |
| アハウドリ | 一九 |
| 南島と東島 | 一九 |

北千島の鳥

濕原

パラムシル島に最初の一步を印した場所はラインシャであつた。ラインシャとは先住民の言語で岬の意。パラムシル島は細長く稍斜に北から南へ延びてゐて、その一番南の突端に當る所である。こゝに緯度の線を引くとすれば、北緯五十度はラインシャの稍南を横に走つてゐるであらう。

一旦播鉢スゲに着いた小樽丸から、その翌日迎へに來た西出氏のランチ朝陽丸で送られて岬をひと廻りし、西岸のラインシャに上つたのは六月の半ば、此處には西出氏の漁場があり、又氏が特に急造した小屋がある。



海岸を上り、臺地狀の濕原に出て見た。雪に覆はれた北方の山からその裾は廣々と南へ擴がり、一望涯しなく草原は漸くこのラインシャまで延び、盡きるところはなだらかに海底をさしてゐる。見渡せば悉く蒼黒い草の原、その中に幾つかの沼地が白く、クロームナイフの様な冷たい色に光つてゐる。その先は霧を含んだ空の中に遠山の雪溪だけが稻妻の様に瞭然はつきりと見えた。

強い西風の吹くが儘に、何の避くるところも無い此濕原は、幾百幾千年のさいなみに慣れて、

寒氣と寂寥の裡にちつと耐へ、そこには未だ素朴とか凡庸とか云ふ感情は無く、産れたばかりの姿で犯し難い威嚴をさへ見せてゐる。

唯茫然たることしばし、私はすっかりこの單調な威力に壓せられたのであつた。我身の如何に小なる存在であらう。代々木の原を横切るに蟻程の割にも當るまい。併し此濕原は私の爲に與へられた博物標本室なのだ——と海原に向つて見えをきるドンキホーテのやうな私であつた。此ドンキホーテは槍や楯の代りにカメラと雙眼鏡を持つてゐる。

濕原は生えるに委せて蔓つたガンカウランが地面の殆どすべてを覆ひ盡し、之れ以上の密度は得られぬ位に盛り上つて茂つてゐる。ガンカウランの繁茂が少し薄くなつた所、乾いた場所は蒼白の地衣を纏ひ、少し濕つた所には細い禾本類の緑が見られ、夏がたけると共にこの單調さの中にあまたの山草が四邊を彩つて来る。

六月の初めに咲くものはキバナシヤクナギの黄花である。幹は地下を逼ひ、僅かな枝先を地表に出して、それに寒さにも耐ふる頑丈な葉を付け又花を咲かし、その花色はチューヴから搾り出した儘のペールレモンイエローの繪具を見るやうな、生々しい香の滴るやうな色で、花瓣

は頑丈な莖に比べて薄く弱々しい。

ミヅバセウの花の見られるのもその頃だ。沼からの排く水が流れる溝の縁や沼地の畔に、寒地には相應はしからざる巨大な花である。そしてハマシギやタカブシギがディスプレイを空中に演ずるのもその時分であらう。

日毎にムネアカタバリの歌聲は益々冴えて來た。蒼白の花をもつチンマイチゲ、紫や黄のシラガマ類、ヒヤシンスのやうなウヅラバハクサンチドリ、黄色な花を持つミヤマダイコンサウ、ミヤマキンポウゲ、キンバイサウ等が咲く頃は、餘程夏もたけてゐる。

未だ此島に土人が住んでゐた頃ライシャと云はれた此濕原は今鳴巢平シギスダヒラと呼ぶ。私は此地名に憧れを持つたのである。併しかう命名した人は恐らく、八、九月頃、渡りの時期にこゝへ集まる夥しい鷓を見てもかう名づけたのであらうと思ふ。

鳴巢平には二三の漁場があつた。ライシャの漁場もその一つ、東側には鳴浦シギウラ・野田浦ノダウラ等、ずつと北の末別飛沼シイベツトビの口に東川と云ふ漁場があつた。皆海にのみ關係を持ち陸地には殆ど用の無い人たちが住むので鳴巢平は私以外の人影を見たことは殆どなく、ふた夏を過しても人々に會つたのはやつと二、三回に過ぎなかつた。

初めの年（昭和九年）ライシャで、次の年は野田浦の漁場で御厄介になつたが、いづれも漁場の裏はもう直に濕原のつゞき、間断なくタヒバリの聲を聴かれる場所だつた。

定かならぬ天候はいつも私を悩ました。風、濃霧、時雨、麗かに晴れる日は極めて少なく、晴れたと思ふ直後、必ず襲ひ來る不幸な天候を豫想しなければならなかつた。

六月のうちは未だ寒さも烈しい。夜は攝氏の二、三度、晝間天氣のよい日で、十五、六度に上ることもあるが、大概七、八度の所を水銀は上下してゐた。七月になつても八月になつても、只、快晴の日の暖かさ以外は、身に浸みわたる寒氣が始終漂つてゐるのである。

よく晴れば陽あたりの良い此濕原は、温かさがみなぎり、島中の何處よりも早く雪は消えた。昭和十年はいつになく大雪であつたと云ふときでも、五月の半ば既に雪は見られなかつた。

夏の日の長いこと、之には喜ばなければならぬ時と、倦々するときがあつた。好晴の日は午前二時頃既にほんのりと、そして夜は九時頃迄明るく、八時半と云ふのにスナップで寫眞を撮つたこともある。倦む日は濃霧や雨で外へ出られない日、このときばかりは一日の長きをしみじみと歎きたくなつた。

北千島の濃霧には全くどんな力でも打勝つことは出來ない。雨なら傘でも翳して歩くが、勿論それは出來ない。雨具、こんなものは濃霧の敵ではない。又冷氣と焦躁。

鳴巢平のことを殺人ヶ原と名づけた人がある。此平原で濃霧に遭へば目あてを失つて歩の盡きることを知らず寒氣と飢餓で殞れる人があると云ふ。幾日も濃霧に閉ざされるときは濕原へ出ななくても私は全く自殺したくなるのである。

それだけに晴れた日を迎へた朝の歡喜、なすべきことが何もかも重なり合つて待つてゐて何をすることもどかしく、それツとばかりに辨當も持たないで小屋を飛び出し、後で不味いビスケットに閉口したことも度々あつた。

濕原を歩くには何時も太腿迄のゴム長靴を穿かなければならなかつた。唯見たところでは、あの草の上に寝ころんだらさぞ好い氣持ちだらうと、遠くで見ると苗床のやうな蒼々とした草原だが、一步を踏み込めば、ズブリとぬかり忽ち靴の半ばは水の中であることに氣がつく。表面がどんなに乾いた所でも腰を下ろすことさへ許されないのである。

濕原を横切つて山へ行くときは更に厄介だ。あの不愉快なゴム長を穿くことは到底長く我慢出來るものでなく、やはり別に山靴を背負つて行かなければならない。少し乾いた所へ出ると山靴

に穿き代へ、又湿地に出るとゴム長と云ふやうに、幾度か穿き代へるその煩はしさ、併し私ばかりかと思つてゐたら山を巡視する營林署の人もよくそれを言つてゐた。

今は此の地も夏の装ひ、單調な草原は點綴する數多の山草で彩られ、エゾシロテフは佗びしく翹ばたき、チシマヤチネズミは草上を跳躍し、タヒバリは空に鮮やかなディスプレイを見せ、沼から這ひ出して草間に憩ふサンセウウヲは麗陽を浴びて眠むさうである。

歌ひたいものは歌ふがいゝ、眠いものは眠るがいゝ、北の地も今は夏である。

ハ マ シ ギ

濕原を訪れて數日後、或る水溜りの縁を歩いてゐると、岸近くの小石に一羽の鶺鴒が靜止してゐるのを見た。それはハマシギであつた。内地の冬に見るのは全く異なる羽色、背面と頭の頂は赤褐色で、下腹部には鮮やかな黒斑がある。冬季は灰色をして淡い色の鳥であるが、夏を迎へればかくまで鮮やかな羽色に變ずるものと私はしばし見とれた。

ハマシギの雌雄別は外觀では區別されぬので、それは何れの性であるか分らないが石にとまつ

た儘、しやつくりでもするやうに頭をピョコリ／＼と上下してゐる。そして時折呟くやうに低い聲でデユイ／＼と鳴く。後で識つたことであるが、之はハマシギの警戒をする動作であつた。

ハマシギの巢を發見したのはそれから二日程してからであつた。

先日ハマシギの居た水溜りから稍と離れた沼である。周圍は濕潤であるが水際からなだらかに高くなつてゐて、其處はレモン色のキバナシヤクナギの花が草間を彩つてゐた。何氣なく歩いてゐるとシヤクナギの間から一羽のハマシギが飛び出したのがチラと私の眼に映じた。そこ迄の距離は約三十米程もある。

ハマシギは飛び立つて、幾許も行かぬうちに地上に下りたが、そのときハマシギは兩翼を擴げたまゝ上方へ伸ばせるだけ伸ばして恰も「ホルドアップ」をした人のやうに、ほんの僅かの間であつたがそんな奇妙な恰好をして見せて、その後は如何にも何かに未練があるらしく其場を飛び去つた。

一體鶺鴒類は何れの鳥でも飛翔後地上に降りるとき、その脚が地面に觸れて安定を得る迄は擴げ

た翼を上へ伸ばした儘、疊まないと云ふ通有性がある。常に淺瀬や泥土でぬかるやうな湿地に降りる鳥は立脚の安定を見極める必要上行ふことである。

けれども今見たハマシギの動作はそれとは全く異なるやうに見えた。私には何か秘められた意味があるやうに思はれ、或は之がハマシギの“Display”^{ディスプレイ}ではないかと考へたのである。

私はそのまゝそこへ坐り込んで様子を見ることにした。しばらくして空の方で何か聲がする。重々しく濃霧をふくんだ乳白色の空に先刻のハマシギと思はれる一羽が頻りに飛びながら鳴いてゐる。

ジクザクに稻妻のやうに飛ぶかと思ふと、翼をすぼめて高所から落ちるやうに急降下して、下りる時はヂュクヂュク~~~~と激しく鳴く。それはオホジシギの“Drumming”^{ドラミング}を想ひ出させるものである。オホジシギはやはり上空で翼をすぼめて尾羽を擴げ、凄じい音を立てて落下する。ハマシギのはそれ程凄じい羽音では無いが其仕様も形も良く似てゐる。

そんなことを何回か繰返したハマシギは先程飛び出した所へ又無造作に降りた。チヨ~~~~とシヤクナギの根元を小走りに涉き廻りときん~~~~立ち止つて首を上下させる。こんな遠距離でもやはり見なれぬ私に警戒するらしい。そして「チユーイチユーイ」とつぶやくやうに鳴く。私には

それが何んだか「注意々々」と云つてゐるやうだ。身の底までも浸み透る程の寒氣を感じつゝ、かぢかむ手に雙眼鏡を握りしめながら注意して尙も見つめた。さつきから同じ地點で同じ動作を繰り返してゐる此のハマシギの執拗さを見て、私はきつとその附近に巢があるものと確信したのである。

三十分程してハマシギは一輪のシヤクナギの花の元に身をかがめたかと思ふと草間に入つて見えなくなつてしまつた。

やはり巢のありかはその場所であつた。キバナシヤクナギが地に低く逼り其樹幹は殆ど見え、唯艶やかな葉と黄蝶の翅のやうな黄花を現はした中に、僅かに生じたカリヤスの細葉がこんもり繁り塊つた所である。巢は只、四箇の卵を縦に揃へて、一つの塊りとしただけで巢壁となるものは凹所を周る草の莖である。

卵は極端な圓錐形(37.6×26.2mm)で、尖端を下にして四つ揃へて置いてあると鈍端の頭だけが小さく見えるだけ、その上を被ふ細草で殆ど見分けはつかぬ程である。卵は普通四卵を一腹とするが三卵の例もある。

卵は極端に圓錐形をしたものと、又それ程尖つてゐないものもあり、蒼褐色の地に紫褐色の大きな斑點の描かれた卵である。

卵を取り除いて見ると丁度手の拳が入るくらゐの凹みであつて、底には枯葉が敷いてある。ハマシギは巢を造るときは、ひと株の草の中央に、體と翼で凹みを造り、底部に拾ひ集めた枯葉を敷くものと思はれる。

其後幾日か續けてハマシギばかりを観察してゐるうちいくつかの巢を此邊で見つけたが、それは皆最初に見たやうに、ハマシギが翼を上げてホルドアップをすることを、私はすっかり憶え込んでしまつたから比較的容易に見出された。

あのホルドアップは「さあ此邊に巢があるぞ！」と私に指示するやうなものである。

ある鳥卵の専門書に、「ある日ハマシギ（歐洲産の Dunlin）の巢を見つけ、卵は後で採取するつもりで約一時間程後、其場に来て見ると在つた筈の卵はすっかり無くなつてゐた。之はハマシギの親が巢を發見されたのに危険を感じ、卵をいづれかへ運んだものであらう。」と。

我が國でもむかしからキジやヤマドリが卵の位置を變へると云ふことを云はれてゐるが、私は

幸か不幸かそんなチャンスを得たことも無く、今見るハマシギにも一向そんな氣配は見られなかつた。

併しハマシギの巢は餘程注意してゐないと一旦發見した巢卵の在處は、紛らはしき四邊の状態にすつかり見失ふことがある。私はある一巢を探し出し、その巢の状態を撮影するつもりで一町程歩いて行くうち、すつかり其の巢を見失つてしまつた。變化の尠ない平原であるから目印とする物もなく、おまけに、卵は完全なカムフラージュになつてゐる爲である。一寸見つからないと恰も道に迷つたときのやうに慌てるもので、氣があせればあせる程見出し難くなるのである。約一時間も奮闘した後、辛うじて再び探し出したが、自分の歩いた靴の跡が三つも其の巢の一、二尺の所に印されてゐた。

恐らく前記の書物のは見失つたのか或は外敵に卵を奪取されたものであらうと考へられるが、もう一つ、或る書に、「ハマシギ（歐洲産）は卵を産む迄、澤山の凹みを造る。之は大概雄鳥に依つて造られるのである。その數に於ては他の此種の鳥の十倍も造るであらう。」

此習性はチドリ類にもよく見られる。シロチドリやコチドリは河原の砂上に點々と淺い凹みを造つてゐることがあるが、之は卵を産む迄に色々と場所を吟味するのであらう。又或は無意識に

こんなことをやるのかも知れない。

私もハマシギのそれらしいものを二、三見ることが出来た。初め、これは営巢中のものかと思つて手に觸れることを慮つて大事にし、二、三日後再び見たが一向變化は無かつたので、あの儘見捨てたのだらうと考へたのである。凹みは地面と草を丸く、深く型づけ、巢底に敷いた巢材と云ふ程のものは無かつた。

私は實驗しなかつたが、或る本の中には、抱卵日数は三週間前後と書いてある。私の觀察では抱卵は雌が主にやつてゐるらしいが、雄と思はれる鳥も時折巢の附近に現はれるやうであつた。

私はハマシギを撮影するのに、初め遠くの方から強力な望遠レンズを装備したカメラで撮つてゐたが、後でそんな必要のないことを知つた。

カメラをカムフラージュする迄もなく、私自身が巢の近くに唯じつとして坐つてゐると親鳥は少しの關心も持たぬやうに熱心に抱卵をしてゐた。撮影は全く樂であつたが、困つたことには濕潤な場所であるから坐るのにも非常に困難で、防水シートの上に腰を下ろしたが直きに水が溜つてしまつた。それにどうにもならぬ寒氣である。身動きもならず、ひし／＼と迫る寒氣は手とい

はず足といはず身の隅々迄、眞冬に濕地で鶴や雁の撮影をやつたときも之程寒くは無かつたと思つた。

ハマシギの雛を見たのはそれから間もなくであつた。孵化した直後と見えて巢の底にはダウンを纏うた雛が一塊りになつて蹲まつてゐた。バフ色の地に、背部は濃厚な褐色と黒色の斑、それに混じる白點がダイヤモンドのやうに美しく、私は思はず讚嘆の聲を上げた。此巢はやはり、親鳥のホルドアップに依つて発見したのだが、その時は雌雄の鳥が居たのと、又今迄見なかつたところの「擬傷」をやりだしたのを見て、私は必ず雛が居るのだと思ひついたのであつた。

ハマシギの擬傷は知らない人が見たら何をしてゐるかと思ふ程、拙いものだ。只、身を少しすぼめて、シイ／＼と哀れつばい聲で低く鳴きながら、そこから邊りをチヨロ／＼と鼠のやうに這ひ廻るだけである。

翼を擴げ、身を地面に伏し、バタ／＼と如何にも苦しげにやるイカルチドリや鴨等の巧妙な擬傷とは到底比較にならない。尤も人氣の無い、斯様な土地では之でも差支へ無いだらうと私はそのあどけなき姿を獨りで笑つて見てゐた。

ところが今度は私がハマシギに笑はれる番になつた。それは雛を撮影しようと思つて少し離れたところに置いてあるカメラを取つて来る間に、今迄巢中に在つた雛が悉く見えなくなつてしまつた。それは僅かに二、三分位の間である。先に親鳥の拙ない擬傷を笑つた私もすっかり慌ててしまつた。

併し依然として親たちは頻りに騒ぐ、鳴きながら首を上下して如何にも雛たちに「おいでおいで」をしてゐるやうである。私は又しばし、じつとその場へ坐して様子を見た。

と、草の隙間から細々と幼い聲が聴える、「ピー、ピー、ピー、」鶏の雛の鳴く聲をずつと低くした聲である。その聲がすると親たちが急に慌て出して、「ビール、ビール、」と妙な鳴き方をして、雛の發聲を戒めやうとするやうだ。

私は顔を草に擦りつけるやうにして細い聲を頼つて探すと、雛が草の中に蹲つてゐるのを辛うじて見つけることが出来た。續いて一羽、又一羽、都合四羽を全部回収し得た。之は小屋に持ち歸つて寫生してゐるうち、二時間程もしたら皆動かなくなつてしまつた。寒氣の爲であらう。

内地である夏捕へたシロチドリの雛は飲まず食はずで、三日間も生きてゐた例を知つてゐる。ハマシギの親鳥は幼い雛にいつも保温を氣遣かつてゐるのが解る。ある寒い日の夕方、私の坐す

三米程の箇所に蹲まる雛の上へ来てかばつたことさへあつた。

七月に入ると巢立したハマシギの雛は可成り成長して、ヒバリシギの親位になつてゐるが、未だ體の所々に産毛の名残りが見られる。やがて八月、九月も末頃になれば、既に一羽のハマシギに成つて、冬を越すべく長途の旅につくのである。

ヒバリシギ

別飛沼の山の手に先住民の捨らへた瓢形の穴居跡が幾つとなく、臙げな形を残して並列して居る所がある。その小丘状の凹凸を上つたり下つたりして彼方の山へ向ふとき、軟かな草にみなぎる陽炎の下に一羽のヒバリに似た鳥が死んでゐるのを私は見つけた。餘程日數を経たものかもうコチ／＼に、ミイラになりかけてゐるが少しも腐敗してゐないばかりか、鼻におし當てて見ると幼な子の頭のやうな懐しい香さかほへした。下嘴が半分程缺けてゐる。これが此鳥の致命傷であつたのだらう。

此附近が砂混りの草原であるところから、最初からつきり此鳥はヒバリ(チシマオホヒバリ)

であるときめてかゝつて、私は鳥をその儘リユックサックにしまった。しばらく歩き出してから、ふと先程リユックサックにしまったその鳥の嘴のことを思ひ出した。

半分缺けたあの嘴はどうもヒバリにしては長すぎはしなかつたかと考へたのである。慌てて又リユックサックの中からとり出してよく見ると、嘴も長い、脚も長い、迂濶な話だが之はヒバリンギだつたと初めて見直したのである。それ程ヒバリによく似たヒバリンギである。

ヒバリに似てゐることは形だけではなかつた。それから半月もした頃、トツカリ岬の海岸に添つた苔原で此鳥に出會つた。その時は巢立した雛を伴なつてゐたのであらう、ある一ヶ所を中心にして、その附近を頻りに飛び廻り、見てゐる私を如何にも嫌悪し、又何處かの草間に隠れてゐる筈の雛に警告するやうである。

その動作が又よくヒバリに似てゐるのだ。ヒバリが巢の近くでよくやるやうにヒラ／＼ヒラヒラと飛びつゝチュリリッ、チュリリッと鳴く。ヒバリに比べて翼動は小刻みで、丁度ミスヂテウかなんかが飛ぶやうに、ヒラ／＼と低く飛ぶのである。

中々要心深く、ハマシギの様に容易に雛の所在を教へない。私は此鳥の雛を親の動作に依つて捕へることは常に失敗してゐる。今度こそはと長い間、一ヶ所に頑張つて親鳥の動作を見續けて

ゐるのだが、いつも私の方が根氣負けがして敗退した。

ある時は近くの草間に、ピーピーと微かな雛の鳴き聲さへ聽けるのだが、それさへも探し得ず、鳥は草に化けてゐるのではないかとさへ思つたりした。

その年（昭和九年）はたうとう巢も雛も探し得なかつたが、翌年（昭和十年）はヒバリンギの巢と卵を見る幸運を得た。

元來ヒバリンギの分布は東部西比利亚からカムチャツカ、千島等で蕃殖し、冬季は支那大陸、日本を経て馬來半島から濠洲迄渡る。内地では、やはり渡りの際にトウネン等の群に混じて見られるのであるが、トウネンよりはすつと数は少ない。蕃殖地も前記の如く、コスモポリタンなハマシギ等に比べてヒバリンギのは東方に限られてゐて、北歐には産しない。

此鳥の卵は、昭和三年山階侯爵が派遣された折居氏に依つて採集されたのが最初のものである。侯爵にその採集場所をお尋ねしたが南四ツ岩附近との由、私の考へでは南四ツ岩の稍々北方に擴がる濕地、島を東岸から西岸へ横斷する轟川と西川に沿ふ地帯のことであらうと思はれる。

播鉢スリバチに上陸した翌日（六月二十一日）、昨日見つけておいたタヒバリの巢を朝になつて見に行つ

た。鐘詰工場が立ち並んだ所を外れた少しばかりの湿地で、側に小さな沼が在り、三十米程先には餅を賣る掘立小屋の店がある。

トツカリの濱から播鉢へ通ふ人たちは、山側の残雪を避けて大概此沼の畔を歩くので、可成り人足は繁く、昨日のタヒバリの巢を見てよくこんな場所に營巢したものと感心した位であつた。何氣なくタヒバリの巢の目印しに草の上に置いたバットの空箱へ近づくと、思ひがけなくも右手から一羽の鳥が轉ぶやうに飛び出した。私は此動作を一見しその鳥が如何なる種類かは問はず、その場に巢があるものと断定した。五米も飛んで草間に下りたのは確かにヒバリシギである。

かう云ふ場合、慌ててその場に巢を探し求める不利を私は今迄の経験でよく知つてゐたから、そこから二十米も離れた所へ一旦退いて見守ることにした。巢を出たヒバリシギは、右へ左へさも忙がしさうに草間をすり抜けながら歩き廻つてゐたが、歩みは段々とさつき飛び出した箇所の方へ近づいて来る。

約二十分程してヒバリシギの姿を見失つてしまつた、がそれはヒバリシギが巢に入つたのである。徐々に近づいて見ると果してヒバリシギは又飛び出して、今度は擬傷を演り出した。

之は又ハマシギよりも更に拙い演技である。シイ、シイ、シイと鳴く聲こそは哀れだが身を丸

くして小揺るぎをするのだが、丁度人間の子供が氣に入らない時に體を揺つて駄々をこねるのに似てゐる。そんな恰好をしながらヒバリシギは巢の方から私を離すかのやうに彼方へ彼方へと誘つて行く。此の熱心な擬傷で、巢中には孵化直後の雛か、或は卵にしても孵化に近いものであることが推定されるのであつた。

それから間もなく眼についた巢には四つの卵が入つてゐた。卵はハマシギに比べて形は丸味が多く勿論小形(29.4×22.9mm)、斑點も細密で全體は淡いチョコレート色に見える。巢はハマシギ程の深さは無いが枯草の中に、この卵の色は又完全なカムフラージュであつて恐らく慣れないうちには中々發見も困難であらう。

程良い凹みの中にキチンと四つの卵は一束になつて埋まり、周囲の草は卵をまばらに覆つてゐるが、そのまばらな草の被覆が更にカムフラージュの効果を上げてゐるのである。

直に撮影すべく、急いでカメラを驛遞(宿所)へとりに行く。目印しに何かと思つたが割に人通りの多いのと、ワタリガラス等の空からの掠奪を避けるには餘程吟味する必要がある。それで私は常に巢から可成り離れた所に、目印しをつけて置くのだ。

巢の撮影を終へてからカメラをその儘に立てて置き、私は二十米程離れ、カメラのシャッターから糸を引いて親鳥を撮ることにした。孵化に近い卵に對しては早く親が歸つて來るのを知つてゐたから、私は慌てずにそこへ寝そべつて待つた。

今日は北千島には珍らしい程の快晴で、微かながら陽炎さへ立つてゐる。右手の砂丘でオホヒバリが鳴く、あの鳥の巢も探さなければならぬと思ひながら、やをら起き上つて彼方を見ると、既にヒバリシギは巢に入つて快げに陽光を浴びてゐた。

糸を引くとガチャリと遠くで確かに手應へがある、と同時に巢の中の親鳥が轉がり出た。氣の毒な思ひがするが、こんなことを二、三回繰返して撮影は簡単に終つた。着島二日目、私は行先き幸多いのを喜ばずにはゐられなかつた。

卵は後で採取して見ると、果して可成り抱卵の日數を経たもので内容を出すにはなか／＼困難をした。全體の孵化日數を約三週間位と推定して、その三分の二は経過したものと思へる。巢はほとんど凹みを利用しただけで巢壁を造るには別に巢材を使用しないで、たゞ底部には禾本類の枯草、又小さな潤葉樹の枯葉など可成り敷いてあつた。

ヒバリシギの産卵時期はパラムシル島では五月下旬から六月上旬と見るのが至當であらう。

其後數日、又此邊からトツカリ岬の裏の苔原を探したが、親鳥の態度から推してほとんど巢立してゐるやうに見られ、之から見ると前記の巢は寧ろ晩期の例である。

二種のタヒバリ

此濕原にはタヒバリとムネアカタヒバリの二種が棲んでゐる。タヒバリは内地の山岳で蕃殖するビンズキと従兄同志と云ふくらゐに似てゐて、ビンズキにくらべると全身稍と茶がかつた色である。

其他の動作や習性は殆どおなじだと云つても差支へない位によく似てゐるが、たゞ蕃殖地に大なる距りがある。尤もタヒバリは秋になると人家の庭や畑、水田など案外つまらない(?)場所に現はれるもので、それが丁度麥蒔きの頃、畑をチョコ／＼と歩くので、「麥蒔き鳥」と呼ばれたり、又地味な羽色で田畑を歩いてゐる姿は如何にも見すばらしいと云ふので、九州のある地方では「ゼンモンドリ」、即ち乞食鳥と云ふ意の名がある。

又タヒバリを對照にしてビンズキをキヒバリとも稱される。ある人はタヒバリは餘り樹木にとまらないが、ビンズキ即ちキヒバリはよく樹木にとまると云ふ解釋をしてゐる。何れも餘り樹木

にとまる鳥では無い、地上をあるく鳥で、ことにタヒバリは秋冬の季節に現はれて主に田畑を歩いてばかりゐて、その時季にはあまり樹木にとまる機会が無いのでかう見られてゐるのであらうが、蕃殖地においては決してそんなことは無く、ミヤマハンノキの枝にとまつてゐるのをよく見ろける。

ムネアカタヒバリはタヒバリの兄弟と云へる位によく似た鳥で、僅かに羽色が異ふだけ、此蕃殖地に於ても殆ど區別出来ない程である。

背面は帯緑褐色、下面は淡い緑褐色で、黒い斑點が散在してゐる。之はタヒバリの大體の羽色であるが、夏季になると幾分胸部に赤味が加はる。ムネアカタヒバリはその部分が稍々鮮やかで煉瓦色を呈してゐて一體に地味な色の鳥であるが、濕原の草の中でムネアカを見るときは、つましい美しさをもつ鳥だと私は度々思つた。

私がパラムシル島に上陸し第一に得た標本はムネアカタヒバリであつた。そして又私は概ね此濕原で生活した爲に朝夕タヒバリの聲を聴き暮らしたので、最も印象深い鳥なのである。未明と云つても島の夏季は午前二時頃には既に夜は明けはなたれてゐる。浸々と身に迫る寒氣に假睡の夢は破られ勝ち、と、微かに鳥の聲が聴えて來る。眠いとその聲を聴き捕へようと、夢と現實の

間に闘ひながら努力すれば、段々とはつきりして來る。冴えた聲だ。

チチチチチチチチ　チカチカチカチカチカ

チュイチュイチュイチュイ　ツツツツツツ……

ほそく垂れ下る氷柱をかき鳴らすやうな感。寢ながらにして、あれはムネアカタヒバリの聲だと解る。

轉ずるときは大概飛びながら、ヒバリのやうにして鳴く。思ひ出したやうに、つと地上を離れてヒラ／＼と翼に大きな刻みを見せて斜に上昇する。地上を二米も離れたときチチチ……と唱ひ出す。十五、六米も上りきつたときは歌もクライマックス、稍々テンポを落して、チュイチュイチュイと粘りをもつて唱ひ、それが終ると同時にフィナレヴィバアチェと云ふ工合に翼をすぼめて降下しながらツツツツ……と口早に鳴き、休めた翼を半ばすぼめ↓印のやうな形で、やがて姿は聲と共に草の中へ消えるのだつた。

タヒバリの生活も大體同じやうであるが、此濕原地帯にはムネアカの方が多く、タヒバリは寧ろ乾燥した高原地帯に棲むので、濕原で鳴くムネアカ程の深い印象を得られなかつた。全島としてはタヒバリの方が多し等であるが、此濕原だけは特別にムネアカが多いのである。

營巢の状態もまた殆ど同様、唯、ムネアカはこの地方では比較的濕潤な土地を多く選ぶと云ふ差がある。巢は濕地や草原の草間に、地面の僅かな凹所を利用してつくる。巢材は殆ど全部枯草、それも此邊に多いカリヤスに似た細い草を用ひてゐる。

ヒバリのやうに屋根の無い巢ではない。自から造るのではないが、あたりの草やガンカウランの枝をうまく屋根にあしらつて、一方が巢の入口になつてゐるので巢の全體から云ふと横向きの巢である。卵はチョコレート色の斑のある卵、一腹は五箇か六箇を産む(ムネアカタヒバリ21.3×15.2mm)。(タヒバリ 20.7×14.8mm)。抱卵の方は實驗しなかつたが、育雛は雌雄が交互にやつてゐるのを見ると多少は雄も抱卵すると思はれる。

此地帯ではムネアカもタヒバリも共に蕃殖してゐて、野外にあつては中々兩種を區別し難いのである。前記の如くタヒバリも夏は多少赤味を帯びてゐて、うっかりするとムネアカかと思ふやうなときもある。一方を見て之はムネアカかと思つてゐると、もう一方の配偶は全く赤味を帯びないタヒバリであつたり、しまひには自分の眼に自信が無くなつた程、渾沌としてしまつた。或は兩種は交雜するのではないか等とさへ疑ひを挾んだりした。本當ならばいち／＼採集して比較して見なければ確かなことは言へないと思ふ。

タウゾクカモメ

盜賊鷗、北海の空のギャングに當てられた此名稱は、ふさはしくもあれば又いたましい氣もする。あの惡癖さへなければと、不肖のはらからを持つ身を啣かつにも似た氣持ちで此惡名を嘆くのであるが、和名ばかりでなく、外國の名稱にも之に似た盜賊とか海賊と云ふ意味の名がつけてあるのではどうも已むを得ない。私は初めてパラムシル島で此鳥を見たが、その形態は中々スマー卜なものであつた。

ある夕方、場所は南四ツ岩の漁場で、一羽の見なれぬ鳥が南の方から北へ海添ひに飛び過ぎた。すると、その附近に棲む數多のハクセキレイがけた／＼ましく叫び合つて、その鳥の跡をバラバラと追ひかけ如何にも嫌惡の情を表はすのであつた。

鷹にしてはあまり悠長な翼動。鷹ではない。鷗にしては黒すぎる。背部は黒褐色で腹部は稍々黄味を帯びた白色。尾羽が鋭く尖つて長いところを見るとタウゾクカモメかシロハラタウゾクカモメであらう。寄せ來るハクセキレイの小兵どもには一向氣にもかけぬ風、唯一直線に飛び去つ

てしまひ、そのもちまへの悪癖たるギャンピング振りを見せてくれなかつた。

また氷雨に似た冷雨の降る日、摺鉢すりばちで沖に碇泊する汽船に向ふべく小舟の便をかりて灣内を行くと、七、八羽のミツユビカモメの中に一羽のタウゾクカモメが混じつてゐて、いましもその一團を攪亂してゐるところであつた。最初から目がけた一羽のミツユビカモメをしつこく追ひ廻してゐるがカモメもさるもの、容易に彼の意に任せずしきりに逃れ廻る。併しその執拗さは只事ではない。或は鉤状の鋭い嘴を、又不似合に尖つた爪を向け相手を悩ましてゐる。

ミツユビカモメもつひに耐りかねて、先程波間で獲つた鮭か鱒の肉片であらう淡赤い物を空中に吐出した。するとギャンピングは落石の如く此吐出物に向つてすばやく嘴に挟みとつたのである。中々巧みな仕業をやる鳥であると私は冷雨を浴びつゝ見とれてゐたが、舟は遠慮なく行き過ぎたのでたうとう次ぎのギャンピング振りは見逃がしてしまつた。

盗賊鷗類中タウゾクカモメ、クロタウゾクカモメ、シロハラタウゾクカモメの三種は皆北の鳥であるが、オホタウゾクは南の鳥である。前三種のうちでタウゾクカモメとクロタウゾクカモメの二種は最も普通であるが、シロハラの方は稍々稀である。昭和九年に二回見た鳥は左程目立つ程長い尾羽ではなかつたところから見て、あれはタウゾクカモメであつたと思はれる。

シロハラタウゾクカモメはタウゾクに略々似た鳥であるが尾羽が特に長く、三十糎内外のものを有してゐる。

昭和十年の七月の中旬であつた。嶋集平の南、ライシャから野田浦へ向ふ途中に出會つた盗賊鷗は、今迄嘗て見たことのないシロハラタウゾクカモメで、飛翔中にもその長い尾羽が著しく目立つた。ヒラ／＼と餘り激しくない翼動をしばし続け又滑翔、そしてジクザク状に低くゆく。

その鳥がある濕地に降りたところを、私は草上に腹這ひになつて雙眼鏡で見ると頻りに何か地上で漁つてゐる。丁度チドリのやるやうにチョコ／＼と歩いてはピョコリと頭を下げて啄む。あの濕地に居るものは蜘蛛か小さなカゲロフ位であらうが、此鳥もやはり不斷は蟲を食つてゐるものだと初めて知つた。

ある本で讀んだことであるが、アイスランドで夏期に採集されたタウゾクカモメの嗉嚢や胃の内容物は殆どすべて鴨類の卵であると記されてあつた。此地帯でも五月を中心にして、盛に産卵するクロガモ、ヲナガガモ其他の鴨類が必ずその害を被つてゐるものと思はれる。

又此地帯はタウゾクカモメの營巢に適したところと思はれるので探して見たが、その卵は容易に見當らなかつた。時期としても最早晩い時である。

「吐球」と「置土産」

濕原の平坦な地域の中にも丘陵状の突起箇所が方々にあり、又極く小さなもので高さ二十糎に満たない凸所がある。さういふ突起した箇所の頂上へ行つて見ると、必ず幾つかの吐球が散ばつてゐるのであつた。それは大體母指ぐらゐの太さで、中にはその二倍位の大きいのも見られた。

吐球は鳥の羽毛や骨、又野鼠の毛や骨、それに齒等が、一塊りの紡形に堅められて、よく乾燥してゐるのであつた。之は勿論、肉食をする猛禽類が獲物を食つてゐるときにかまはず嚥下した不消化物をひとまとめにして後で吐出したものである。鷹類に限らず一般に動物質のものを常食する鳥類にはこんな習性が大概あるもので、モズは甲蟲の鞘翅や脚等を丸めて吐き、魚を食ふカハセミは魚骨を丸めて出し、フクロウ類は鷹類と略々同様の吐球を吐く。どういふ生理作用でそんな都合のいゝ藝が出来るものか興味多い問題である。

濕原に落ちてゐる吐球の中に大體二種類あることに気がついた。大別して見ると、鳥類を食つたものと、野鼠を食つて出したものであつて、此二つは確然と差別がつくのである。野鼠の方は、灰黒色の毛が堅まつてゐる中に、小さな骨片や、齒等が混つてゐるが、大體は黒い紡形の塊

りであつて、一見して一匹の鼠が死んでゐるやうに見えることがあつた。

鳥の羽毛で出来た方の吐球は大體白く綺麗に漂らされてゐて、羽軸の附いた儘の羽毛が、之も紡形に丸まつてゐるのだが、恰も糊でも堅めたやうになつてゐる。その中にも小さな骨片が混じつてゐた。ある一つの吐球はその紡形の先に、タヒバリの尾羽らしいのが二、三枚ほぐれてゐて丁度小禽の死體のやうに見えたのがあつた。何れも風雨によく漂らされ、又日光に消毒されてゐて、その儘では決して腐敗することもなく、蟲がわくやうなこともなかつた。

屢々の觀察の結果、之等吐球の主はオホハヤブサとケアシノスリの二種であることが解つた。主として他鳥を捕食してゐるハヤブサは「羽毛の吐球」、野鼠を食ふケアシノスリは「鼠の吐球」を出すのだ。此二種は元來平原に棲む鳥であるから樹枝上にとまることはめつたになく、大概平原中の突起物、岩石、又は杭等に靜止する習性がある。そして鳥の個體に依つて狩獵範圍の繩張りがあり、何處々々の凸所はケアシノスリAのもの、又何處は其Bのもの、或はオホハヤブサのステーションと云ふわけになつてゐる。

こんな風に濕原中の凸所は凡そ其の主と云ふべき鳥も亦その個體も定まつてゐるのであつたが時折は共同のステーションになるやうな所もあつた。そんな場所には前記二種の吐球が散在して

ゐるのである。四邊の平原を一望し得るやうな小高い砂丘等の頂に存在する岩石等は、屈竟なステーションでもありまた見張り臺にもなつて、彼等仲間に重寶がられてゐるやうだつた。

此地方でオホハヤブサが捕食するもので一番多いのは、オホセグロカモメで其他エトピリカ、其他のウミスズメ類、又鴨類もよく食ふやうである。中でもヲナガガモ、クロガモ等が多い方である。

それは濕原中に遺棄されてゐる鷹の食ひ餘しで明かに解るのである。其他鷓類や小禽類も餌食になつてゐることがあらうが、之等の「置土産」は小さいせぬか私は未だ眼に觸れたことが無い。

オホハヤブサは先づ捕へた鳥の内臓を啄んでゐるやうだつた。その次ぎには胸部の肉と云ふ順で、その位食へば大抵満足して、後は「置土産」となつて草中に打捨てられてゐた。その土産を處分するものは鳥では先づケアシノスリ、獸類ではエゾイタチやキツネ等、このへんの野鼠類は主として植物性の物を攝つてゐるやうであるから之にはかゝはらぬらしい。

いづれまたその後をシデムシのやうなイカ物食ひが引受けるだらう。さう言ふ風に散々食はれた跡はまるでスーパのやうに綺麗に骨ばかりになつてゐたが、さすが兩翼と頭部は残つてゐた。しかし之さへどうかすると舐ぶり盡されて、ほんたうに骨と翼ばかりになつてゐることも

ある。

ケアシノスリは斯様にオホハヤブサの「おこぼれ」だけを頂戴してゐるかと云へば、決してさうでは無いことは吐球を見ただけでも解る。それは野鼠である。

此濕原に棲む鼠にはチシマヤチネズミ、ウチダハタネズミ、オリキトガリネズミ等がある。此濕原に來て先づ驚く事の一つとして、それは草地一面足の踏場もなく鼠によつて造られた溝道である。幅は約八種位の溝とトンネルを草原の至る處、縦横無盡に築造して常にその歩道を散歩してゐるのは鼠である。オリキトガリネズミはモグラのやうに、主として地下道だけを利用し、地上にはめつたに姿を見せないが、前二種は此溝道を共同に使用してゐるのである。共に丸々と肥満して毛なみは細かく天鷲絨のやうに滑らかであつて、食物としては濕地に生える草の新芽等を好んで食べてゐるらしいことは採集した胃袋の内容で判断出來た。

鼠は此濕原ばかりでなく全島に蔓つてゐるのであつて、私は歩きながら靴の下におさへて捕へたことが幾度あつたことか。こんなに鼠が殖えたのは極く最近のことださうで、北千島漁業が盛になつた三、四年前から急に島に人が増した(夏期だけ)からだ、と云ふと家鼠でもないのに、と不思議に考へられるが、人間の數が増したのに間接な關係がある。それはとりもなほさず毛皮を

目的とされるキツネやエゾイタチの濫獲が野鼠の激増を促す原因となつたと云ふ遷移関係が見られるのである。

現在この濕原のケアシノスリは斯様に豐澤な食物の中で生活してゐるのだ。草中の凸所にちつとしてゐれば一時間と経たないうちに必ず獲物が見つかるであらう。内地から伴つて來た犬が北千島の鼠の味を覺えるとは何にも食はなくなつてしまつて丸々と肥えると云ふ話もある。

ケアシノスリにしる、オホハヤブサにしる、北千島に於て全く食物の豊富であることは濕原中に見る「吐球」や「置土産」を見てもそれを物語るものがある。そればかりでなく鳥そのものも何となくのんびりとしてゆとりのある態度に見えるのは、あながち氣のせむとばかりは云へないだらう。

チシマオホヒバリ

濕原を海岸に近く寄れば大概その邊は砂丘を成してゐる。その邊はガンカウランは漸くうすく、チシマフウロやエゾオヤマノエンドウの紫花、その中に白いチシマコハマギクなどがちらちらと見える。



偶々晴れて、その砂丘にほのかな陽炎がゆら／＼たち昇ると、よくチシマオホヒバリが鳴いた。上空をヒラ／＼と飛びながら轉つてゐるが、これも氣のせむか聲は普通のヒバリより太いやうに思はれる。歌詞も大體ヒバリに似たものであるが、市街地附近に棲んでゐるヒバリのやうにツバメやスズメの訛が入らない如何にも清澄で純一なものである。

ヒバリは天候の悪い日は決して鳴かなかつた。殊に深い霧、又強い風の日には全く聲を聴くことが出来ない。それ程、此島のヒバリの聲は快晴をシムボルしたものであつたから、一層私は嬉しくその聲を迎へたのである。

播鉢の砂丘はやはり海岸と濕地の中間に擴がるもので、そこへゆくと地面は波のやうな起伏が半米位の高低を以て規則的に續いてゐる。此起伏は積雪の影響で出來たものであるが、地表は可成り新しい灰色の火山灰、その上をまばらにガンカウランが逼つてゐる。火山灰は多分西南方に在る千藏岳チクラダケから吹き散らしたものであらう。

私は此處で雛のゐる二巢を得た。一巢は太郎池に近い場所、可成り成長した四雛が入つて居た。もう一つは、そこからずつと海岸寄りの波狀起伏の中で、私は中食の辨當を食べてゐると、丁度二米程の先に偶然巢が見つかつたのである。共に七月上旬、卵の時期としてはもう遅く、大

概雛に成つてゐるやうである。雛の産毛は全體としてイエローオーカアの色で内地のものに比べると非常に赤つぽく見えた。

親鳥は蟲を啣へて頻りに騒いでゐたが、中々巢には入らなかつた。二時間、三時間と待つても容易に巢の雛にまみえなかつたが、四時間位たつて如何にも疲れたと云ふ様子で巢の雛の上に坐した。それ迄は、枯れたシシウドの梢や、ハンノキの枯枝に止つたり、地面を歩き廻つたりして頻りに迷つてゐた。

雛の上に巢を被ふやうにして坐したのも僅かな間、又落ちつかぬ態でそこらを飛び廻つて騒いでゐたが、かういふ習性は内地のヒバリに比べて多少異なるもののやうに見えた。俗地を遮脱した此地邊で此要心は何を意味するのか私には一寸解し兼ねるものがある。

湖と沼

北千島の沼は濕原と分離出来ない存在で、濕原地帯は必ず數多の沼池を包含してゐるのである。臺地狀の占守島は全島夥しい湖沼群が散在してゐる。火山の多いパラムシル島は少ないが中で最も沼地の多い處はやはりラインヤ地方である。此他に北端部の村上灣附近に、又西側の山中

には霧沼、要田湖等と云ふ火口湖がある。

ラインヤの濕原に散在する小湖沼は皆淺いものばかりで、小さな沼は長いゴム靴を穿いた儘、渡渉される程であるが、何れも清冽身にしむやうな冷水をたゞへてゐる。丁度野田浦とラインヤの濱とを結ぶ一線の上に可成り廣い沼が三ヶ所稍々並んだ形で在る。一番東側のものと西側の沼は滿々と水が溢れるばかりだが、その中間の沼はなだらかな窪地の中央に水が溜り、他の沼に比べて最も廣い水面を保つてゐる。決して水が少ないのでは無いが、本當の岸と思はれるのは、水際から四米程も離れた所であつて、その中間は恰も水田のやうに踝を濡らす程度の水がひたひたにある。

之が私にとつて最も有難い場所で、クロガモやヲナガガモ、又タカブシギ、ハマシギ等が營巢するのだ。又他の小沼にも水面に浮くクロガモやアビ、シロエリオホム等の姿が見られる。南端の湖沼地帯から稍々北へ、ゆるやかな砂丘を上ると又そこらには濕原と湖沼が散在してゐて、南部のものと稍々異なるところは水際近く迄ハヒマツの叢林が生ひ茂り、或る沼はミヤマハンノキの密林に圍まれたりしてゐた。又沼岸に紫赤色のエゾゴザクラサウの密生した様もゆかしく、時々オホセグロカモメの白い姿が青空に浮いて見えた。それもその筈、山手の湖沼中の岩や水岸

には所々に巢を造つてゐる。

ライシャの平地が山の端にかゝる所に大きな湖が二つあつた。一つは東側の末別飛沼と、もう一つは西側の別飛沼である。ライシャの原に在る小湖沼とは成因が異なり共に海跡湖であつて、片方の海から打ち寄せる波に依つて大きな砂丘が出来、それと共に北の山から流れる雪溶けの水が堰かれて大きな湖水を造り上げたのである。

未別飛沼は白煙山のカールから落ちる水を受け、その捌け口となる所は東川である。別飛沼は白煙山の西方の雪溶け水が流れ込み、餘水は湖から海邊へ僅かな距離を九折りにはき出してゐる。併し未別飛沼に比べて總て小規模だ。

之等の湖水附近の砂丘上には先住民の穴居の跡が澤山あつた。皆瓢形の穴で、今は只かすかな形跡を残し、その上はガンカウランが蔓り、又チシマフウロの花も昔と變らぬ色で寂しく咲いてゐる。

ハクセキレイやタヒバリがその附近で巢を造つた。又ケアシノスリが腐れた木片の上に翼を休ませるのが常に見られ、その邊りを赤く鮮やかな夏の装ひを纏ふメダイチドリが歩いてゐることもあつた。

タカブシギ

どうした加減であつたか昭和九年の六月は辛つと一羽此鳥らしい鶴を見ただけで、あまり聲も聴かなかつた。その折、沼近くの濕地を歩いてゐたのをチラと見て私はイソシギかと思つてゐた。又一度、遠くの空で鳴くのを聴き、アヲアシシギの聲を彷彿したが今考へるとあれはタカブシギであつたと推察される。

その位のもので、タカブシギの蕃殖地はその當時一寸想像がつかかねてゐた。嘗て折居氏の採取したタカブシギの一羽、その体内には發育した卵を有してゐたと山階侯爵によつて發表されてゐるから、いづれ島の何處かで蕃殖してゐるに違ひないのであると思ひながら、可成り氣にはかけてゐたが終に確證を得なかつた。

私は此鳥の姿が好きである。クサシギに似て羽色は大體灰色がかつた地味な色であるが、細つそりとした體、長い脚を持ち、如何にもスマートな涉禽類である。越冬の時期はハマシギ程多くの鳥は見られない。クサシギはよく見受けたが九州の方でも餘り出會ふことは少なかつた。或は

澤山居るのかも知れないが私は他の鵲類の中で野外に於ては區別し得なかつたのであらう。歐洲では森中の池畔等に見られるらしく、ジーボオム氏の「サイベリアの鳥」の中にも、タカブシギのことが少し書いてあるが、その棲息地は、「沼の畔、又林中の澤……」と。歐洲ではフルウエー、アイスランド等で蕃殖をするのである。

昭和十年の渡島で、タカブシギについて不思議な思ひをした。去年と殆ど同時期、同場所でも成り多くのタカブシギを見、又巢や雛迄得られたのである。見逃したのだらうと云はれるかも知れないが、此鳥に限つて見逃すことの出来ない顯著な習性が有るのだ。

良く晴れた六月二十三日の朝、私は野田浦の小屋を出て西南方の沼の畔をさまよひ歩いた。聴き慣れぬ聲、ピョッ、ピョッ、ピョッ……。鋭く又冴えて、丁度時計のセカンドを刻む速さで続け様に鳴く。遠く青空にかすれて鳴くときは鋭さが消え、ピョー、ピョー、ピョーと稍々アラアシギに似た聲だが、次第に近づき、終に頭上へ。仰いで見れば、ハマシギ程の大きさの鳥であるが細つそりと、又後方へ伸ばした長い跼蹠が尾羽を越して尖つた尾のやうに見える。タカブシギだと私は直感した。

更に一羽、同じ聲で、同じ動きで、私に迫るやうに頭上で騒ぎ出した。高く低く、小風の如く、頗る賑やかなことである。私は此顯著なデモンストレーションは、必ず何かを語るものがあるものと考へて、その儘草に坐し雙眼鏡を出して靜かに見つめた。ひとしきり騒いだ鳥たちは、坐り込んでしまつた私を認めたらしく、稍々あつて彼方の沼の水際へ降りた。

降りても未だ鳴きつゞけてゐる。痩せた體を又長々と伸ばし、尾部を時々ピョコピョコと上下に揺る。之はアラアシギやクサシギがよくやる仕種。水際を覆ふ水草は未だ伸びかゝりて、去年の枯莖の間に漸く三寸程の若草を出してゐる。草の葉隠れに鳴く鳥の聲は、靜かな空氣に女神の鼓動のやうに響く。

それから約二時間の觀察は此タカブシギは雛を伴つてゐることを知り得た。鳥たちの鳴いてゐる位置が徐々と遠ざかつてゆく、と氣がついて、尙、丹念に視點を集中すると、水田の稻株のやうな水草の間をすり抜け、親鳥の聲に引かれてゆく幾羽かの稚い鳥影を見てとつた。私は雛だと思つてその場へ走つて行つたが例の如く雲がくれ。水中に跪くやうにして探したが雛の姿は草の中にも水の底にも見えなう。

に妙音である。

ピークウ、ピークウ、ピークウ、ピークウ

此二音は三度の音程を繰返へし、鳥はひと所を變な翼動でその歌に合せて上下するのである。その動作も歌聲も恰も陽炎のやうな感だ。此ディスプレイは短かい時間であるが二、三回繰返しを演じて見せてくれた。

大概の鳥は交尾期の初めか又雌の抱卵中にディスプレイをやるのであるが、今の場合はどうもさうらしく思へない。精密に草中を探したが巢は見あたらす、一羽の可成り成長した雛が雌鳥に引かれて此場を逃れゆくのを見たのである。雛は草中をスル／＼と鼠のやうに潜り抜け、又水溜りは巧みに水を泳ぎ逃れて行つた。鳴いたのも此の雛の雄親であつたが、今のディスプレイは求愛の爲でなく、一種の示威的のものであつたらしい。

かういふことは、よくセグロセキレイ等に見られるところである。巢の雛をとられようとするのに對し、騒ぎのさなか思ひ出したやうに雄が雌に向つてディスプレイの仕種をやりだす。羽を立てて尾を擴げ、半開にした翼をピリ／＼と震るはせながらチリ／＼歩きをして、口早に轉ずる

のである。之は全く交尾前の動作と同様であることは既に觀察してゐた。意思を表はすのにその方法の少ない鳥たちは、そんな危険な場合に半分とまどひながら、とつておきの仕種を出して威を示すのであらう。

アビとオホハム

初めライシャに上陸したとき上空を飛ぶ大きな鳥を見たが、その鳥は非常に大きく見えた。鴨のやうに首を長く延ばし重さうな體を小刻みな翼動に乗せて直線に飛んでゐた。丁度私の頭上へ来て「グアイン」と鳴いたので雁かとおもつたが、後でこれがシロエリオホハムであることが解つた。

アビの飛び方も殆ど同様である。たゞ鳴き方が異ふ。嘎れ聲で稍々鼻にかゝり「ガガガガガッ、ガガア、ガッガッ、ガガア、ガッガッ」、併し之は警戒するときの聲である。アビとシロエリオホハムを瀬戸内海の鳥持網代漁で私は見たが、その折は全く静かな鳥で、今見る鳥と同じ種類とは思へぬ位であつた。アビもオホハムも海上に浮んでゐることもあるが、パラムシル島では主にライシャ地方の海上である。

六月下旬、野田浦から未別飛沼に向ふ途中である。此の臺地上に散在する小沼群を見下ろせる小高い砂丘へ出たとき、突然眼の前の沼の中で「グアイ！」と叫ぶアビの聲がした。此沼は餘り大きくは無いが非常に入りくみの多い縁を有し、周囲は湿地で、又その外部をハヒマツが屏風を立てたやうにとり圍んでゐる。

アビは私の姿を見ると同時に飛び去つたが、どうもその様子がおかしいと思つたので、沼縁へ下り、山靴をゴム長靴に穿き代へて、丹念に沼縁を傳ひ歩いて見た。沼畔の湿地の中にオホセグロカモメの巢が二つあつた。卵は既に無い。四、五日前に此邊を通過した人の話で聞いたカモメの巢は多分之二であらうと思ひ出す。

沼は小さいが入りくんだ縁を傳ひ歩くには中々時間がかゝつた。どうも巢らしい物もないと稍と諦めかけて最後に、沼中に突出した半島状の場所を見た。一塊りの草がその儘沼中に小島や岬を造つてゐるのであるが、その上へ乗るとグラ／＼揺れて足元は頗る危い。丁度その岬の先端へ來ると、泥にまみれたやうな見すばらしい巢が眼についた。中には見慣れぬ色をした卵が二つ並んでゐる。之がアビの巢であつた。

圓く凹みをつけただけで、巢底には何も敷かず泥の儘、その中に泥によれた卵が並んでゐる

のは見たばかりで見すばらしい巢だと思ふ。軟い土を洗面器の底でぐいと押して圓い型をつけたやうな巢、直徑三十糎位。水からは三十糎も離れない所で巢はヂュク／＼に濕つてゐる。卵は鳥瓜うりのやうな長細い型で(70.6×44.9mm)、色はオリブ褐色、艶は無く地肌の粗い卵であるが全く此邊の土の色に紛らはしい色である。

只むき出しに露店の品物のやうに、卵を産まなければならぬアビは、此卵の色でこそそれが出来るのであらう。卵の先端は巢の入口の方を向いて並ぶ、餘り地上の歩行を好まない鳥は水面からやつと三十糎足らずをいざるやうにして上り、その儘の向きで産卵をし、又抱卵をしてゐるのである。

此場所は巢に入つた儘四方が見渡せるから此向きで抱卵するのだが、場所に依つては一旦巢に上つてから横向きになつて抱卵し、或は全々反對の水面の方へ向き直つてやることがある。之等は巢の所在する地勢に依つて外敵に對する備へである。

外敵に見られた時、抱卵中の鳥は巢を離れて突然水に飛び込み、大きな沼であればその儘、水中を潜行して遠く離れた箇所へ身を避ける。此巢の在る沼は二十糎程の深さで又狭い。アビは潜らないで直に飛び去つたのである。空にハヤブサ、ノスリ、タウゾクカモメの強敵、地上にイタ

チ、キツネの剽盜、自然の配合は中々複雑である。

第二巢を得たのはそれから約一ヶ月の後、七月の中旬である。ライシャの南部に小さな沼が紺屋の藍甕のやうに並んでゐるその中の一つであつた。併し探しあてる迄、數多い沼をいち／＼巡るのは、又云ひ得ぬ面倒さがあつた。それも僅かな箇所さへ決してゆるがせにして見逃せないの
で私はまるで狐つきかなにかのやうに沼々の周圍を巡廻したのである。

いつも意地悪く最後の沼の最後の箇所で巢にぶつかつた。私が附近をぐる／＼廻つてゐるうちに鳥は既に危険を知つて飛び去つて巢はむろん空である。やはり見すばらしい、まるで泥漬けの巢だ。突堤の尖端、水面から三十糎とは離れず、巢の凹みが在つて鳥が出入をする一方は土が減り、稍と溝状になつてゐる。巢材らしい物は無くたゞ一卵が寂しく横はつてゐた。卵の向きは巢の入口を直角に尖端は右を向き、ひどく端の方に片寄つてゐる。

即ち鳥は水から上り左の陸を向いて産卵し、長い胴體のため産み落されたのは巢の片端である。抱卵もその儘つゞけたらしく、卵の位置の巢底は卵なりに深い凹みが出来てゐる。時期としてはもう晩期、卵の汚れ工合から見ても産卵中とは思へない。詳細に眼を配ると巢底に卵の破片

が散らばつてゐた。一卵は既に破損したのであらう。

現在残る一卵はと見れば之もどうも怪しい、試みに振つて見ると中身はヂョボ／＼と變な音がする。之では到底孵化どころでは無い。併し卵はいまだに抱卵されてゐる證據には、非常に温かい。不審に思つて穿孔して見ると卵は果してひどい腐敗であつた。他の鳥であれば大概腐敗した卵を感知するだけの能力はあるのだが、之程の物を後生大事に抱き温めるアビは、赤ん坊のやうに無經驗な鳥のやうに思はれた。が、又一方「惣領の甚六」と云ふやうな超越ぶり、どこことなく間の抜けた此鳥に私は好意が持てた。そのうち雌雄のアビが空で喧ましく鳴き出した。一羽の雄らしい方は細かな魚を嘴に挟んでゐる。之は抱卵中の連合つれあひに與へる食餌である。

シロエリオホハムの巢は初めの年の六月下旬に別飛沼で發見した。北の山裾に當る所で、沼の一部が川のやうに深く入り込んでゐて、その幅三米程、水岸にはチシマカリヤスが生えてゐた。突然彼岸から飛び出したウミアヒサの雄雌を氣にして、その近くへ歩を進めると、ふと私の眼に映じたものは彼方の水面に描かれた水輪である。

水岸近く、何か大きな物を放り込んだ程の水の動き、何鳥か潜つたことが明かだ。潜つた鳥の行方はと水中を見つめたが姿は見えない。併し逃れるには唯一筋、鳥はこの川を潜つて湖の方へ

出るだらう。湖の出口迄約二十米位、だが到底一呼吸では行けないだらうと思つてゐるが、中々姿を見せない。少し遅れたがタイムを測つて見るつもりで出した時計の秒針が一廻轉してしまふ頃、湖の出口にポカリと浮び上つたのは、シロエリオホハムであつた。

その巢は鳥の潜り込んだ直ぐ上の岸に在つた。橢圓形で、僅かに枯草の葉莖を敷き、卵は二つ。その色は褐色を含んだ濃いオリーブで黒斑點がまばら、粗い地肌にゆかしい艶を見せ、あたかも高價な陶器でも見る感じである(84.1×52.1 mm)。此巢の卵の先端は陸の方を向いてゐる。なるほどさもあらん災厄を未然に避ける鳥の細かい心遣ひには今更感心させられるのである。此巢を利用してオホハムの撮影をやつて見たいと思つたが、餘りに貴重な卵の標本、私は寫眞は斷念して卵だけを持ち歸つた。

その翌年の七月下旬第二巢を發見したが、それは思ひがけない場所であつた。ライシャの沼畔、クロガモ等が營巢する所で、こんな場所にアビ類が營巢するものとは今迄思はなかつた。鴨の巢を探すつもりで、水田のやうな沼畔を歩いた。沼の附近は膝を没する程の濕地であり、水草(禾本科)が一面に密生してゐる。沼の縁は稍々高くなり人の歩ける程の幅に、草の根が盛り上つてゐてヤチネズミの往復が激しい。

幾度か歩き廻つたが鴨の巢は見あたらず漸く身の疲れを覺えた頃、五米程の先からガガアと頓狂な聲と共に一羽の大鳥が水へ逃れた。鴨かと思つてその場へ行つて始めてそれがオホハムの巢であるのに驚いたのであつた。かなりの沖にポカリと浮んだ鳥は正しくシロエリオホハムである。

「グオーイ」と鳴く。低いがよく響く聲である。時をまたず私は五號の散弾を放つた。鳥はバタリと水面に伏した。見事な命中であるが、さて當惑した。どうして之を收容するか、今日は西風が強い、暢氣なやうだが此風で何れかの岸へ流れ着くのを待たう。

巢は直徑約四十糎位の圓形、こんもりと茂る眞菰のやうな草に圍まれ、一方水に面して出入口がある。巢材は自然に生えた草を折り敷いて、巢底は殆ど平坦である。

卵は右に尖端を向けてゐるがずつと片端に寄つてゐる。「卵は巢の眞中に」と云ふ定義は此鳥には全く當を得ないことである。之を見れば卵は尖端から産み出されることは誰が見ても領づかれる。

鳥は岸を上つて、その儘坐せば周圍に生える菰で視界は遮ぎられる、と云つて出入口の方へ向きかへるのは此狹隘な巢中では煩ららしい。それで左に向いて抱卵し、外敵來れば何時でも水へ飛び込める丈の用意があつたと推察される。それにしても珍らしい場所に營巢したものである。

こんなのは外国にも餘り例が無いであらうと思ふ。

之で二種の「潜り」の巢を各々二例づつ比較することが出来たのだ。アビは巢材を殆ど用ひないこと、それにくらべてシロエリオホハムは多量の巢材を敷くと云ふ異ひがある。

オホハムは可成り臆病で中々人を近寄せないが、それに比べるとアビは思ひがけない程の親しさを示すことがある。併し鳥持網代のことを思ふと、場合によつてはオホハムも非常に慣れやすい鳥とも云へる。

ある日、沼の畔に坐してタカブシギを見てゐるとき、餘り蚊が多いので豫て用意してあつた白い寒冷紗のヴェールを出して帽子の上から被つた。しばらくして、ふと後方の沼を見ると三、四羽のアビがずらりと列んで私を見物してゐる。私が體を動かしても一向逃げようとしなないで、好奇らしく首を立てて私に近づいて來た。之は面白いと思つて私もすつかり落着いて、カメラを出して続けさまに撮つた。アトム形のちっぽけなカメラであつたが相當の大きさに撮れてゐたから餘程その距離は近かつた筈だ。

クロガモ

ライシャ地方の湖沼に浮ぶ水禽で、恐らく一番眼に觸れるものはクロガモであらう。クロガモは一番つがひになつたり、二十羽位の群を作つたり、湖の真中に、沼の岸に、又空に、常に定かならぬ姿であるがライシャの小湖沼群中のいづれかに見えぬまみことは無い。

雄の姿、隙間の無い漆黒の體に、嘴のオレンジイエローだけが調子を破つてつよく目立つ。雌の色はやはり淡く、黒褐色、頬のあたりが灰褐色にうすれてゐる。幼鳥の體色も大體雌に似たものである。六月から七月にかけて、五六羽から成る雌ばかりの小群によく出會ふと思つてゐると、後で之等はクロガモの幼鳥であつたことを知つた。

飛ぶ姿は茄子に翼をつけて飛ばしたやうな恰好だが、決して滑稽な感じではない。エゾコザクラやキバナシヤクナギの咲き揃つた丘陵を沼から沼へ飛びゆく姿は中々風情あるもので、私はよく古い西洋畫でも見る氣持でその後姿を見送つた。

時々鳴き聲を聞いた。雌雄のものや小群を作つた鳥たちが私の近づくのに氣がついて、その中の雄鳥が聲を上げる。それはうっかりすると聴き逃がすやうな細い聲であるが、又鳴の聲とは考

へられない位、優しい聲である。微かな力でピッコロでも吹いてゐるやうだが、それはたつた二音だけ、ピー、フイツ。ピー、フイツ。と鳴く。

昭和九年は此鴨の巢は全く見當がつかなくつたが、後で色々と研究して見ると、營巢地はライシャの湖沼地帯であるらしかつた。専門書を繙くと、

「淡水の畔、即ち湖水等の岸、又はその中の小島等……」、又「沼畔のツンドラ地帯や水流の岸の斜面で、カンバの林やヤナギの茂み等の中に隠匿されてゐる……」。

前者の地帯とすればライシャの南部の濕原中の小沼畔、後者とすればライシャの北方高原地帯に存在する小沼、又ツンドラ状の地域に概當する。

折居氏は昭和三年の七月二十九日に生後十五日くらゐの雛、八月八日に又數羽、その後岡田喜一氏は占守島において八月五日、雛を數羽採集されたとのことを山階侯爵が發表されてをられる。

以上の記録に依り、此七月上、中旬に孵化したのから推せば六月中、下旬が産卵時期とかんがへられる。私は今年こそはクロガモの巢を得たいものだと思つて昭和九年はひそかに期待するところがあつた。

六月下旬早速ライシャの沼畔をその目的で歩いて見た。今年は例年になく大雪の爲か、湖畔の水草の發育は遅れてゐて、辛つと十糧位の新芽が出てゐる。その場所はタカブシギの多い所で、前述の如く恰も水田状をした濕地である。又ある水岸はミヅガンハや水苔が密生し、辛うじてその上を歩けるが、身體の重みでブク／＼と沈下するやうな所もあつた。

氣をつけて見てゐると水田状をした中の枯草の株に、恰もクヒナの巢のやうな水禽の古巢があつた。一ヶ所ではなくその邊一帯に十ヶ所に近い數であつた。古巢は僅かに巢形を残してゐるだけであるが、大きさから見ても之は鴨の巢であることは明かに推察された。巢材としては草株に生えてゐる草をその儘曲げ、内部には細かい穂のやうな物を敷いてゐて、他にダウン(綿毛)の残つてゐるのが無かつたので、いづれの鴨がその主であるとは確實に云へないが、今迄の觀察から得た考へでは恐らくクロガモだと思はれたのである。

巢は水田状の箇所ばかりで無く、水際の水苔の上にも在つたが、それは少し苔が盛り上つて高くなつてゐる所に凹所を造り、その中に敷いた物はやはり前記の巢材である。併し之も巢形は崩れてゐて氣をつけて見なければ鴨の巢とは考へられないものである。疑問とされるのは之等が果して何時のものであるか……。

前記の記録から考へ六月以後に造られたものとすれば、今年のものでなく當然去年の古巢と見なければならぬ。と言ふのは、叢生した草を折り曲げて圓く囲みを造つてゐる巢材、その一本を引張つて伸ばして見ると約三十糎位成長した眞菰のやうな禾本科植物である。此附近の草がその位に伸びるのは六月下旬以後、七月中旬頃なのだ。

ところで之等を去年のものとは假定して見て、どうして去年のものが此儘、今年迄巢形を保つてゐたかと云ふのも多少疑問であるが、私の解釋では夏以外は積雪に覆はれる地帯では有り得ることであらうと思はれた。兎に角、草が成長する時季まで待つて見れば解決がつく筈である。

再び此濕原を訪れたのは七月の半ばも少し過ぎた頃、沼畔の草は全く伸びきつたとは云へないが、既に二十糎を越し四邊は青々と、植ゑ着けを終へた初夏の水田を見るやうであつた。早速、鴨の巢はと探して見て私は忽ち落膽した。それは前回見た儘と何等變ることなく、いづれの巢も空しかつたのである。やはり先に見た古巢は去年のものでなく、今年の極く早期のものであることが解つた。

此濕原の雪が大體消えるのは、五月の中頃ださうで、丁度其頃がクロガモの營巢する時期であ

らうと考へられる。クロガモは去年伸びた儘、雪を覆つてゐた枯草が何處よりも早く地表に現はれるこの池畔で草株や水苔上に營巢するのである。今年のものとしては、空巢の中にダウンが一つも見られなかつたのは風の強い此地帯であるから無理からぬことと云へよう。

此時季に、湖沼地帯を歩いてゐるとクロガモの一團が一塊りになつて池に浮ぶのを見る。それがよく雌ばかりのやうに見えたのは、既に成長しきつた今年の幼鳥であることが解る。前記、山階侯爵の記録は極く晩期の例と思はれ、卵期としては五月中が通例であらう。

蕃殖を終へたクロガモは幼鳥を伴ふのは少なく、未だによく雌雄の鳥が一組になり、晝間は沼の縁に眠つてゐる姿がよく見られた。ある日何氣なくその跡へ行つて見ると、思ひがけなく卵が落ちてゐた。鶏卵によく似てゐるので初めは、誰か漁夫でも捨てて行つた鶏卵の殻かと思ひ拾つて見ると、新鮮なもので全く鶏卵とは異つてゐた。續いて二、三箇を方々から拾ふことが出来た。(65.2×45.5 mm)。

ある一卵には都合よくも、卵殻に黒いダウンが附着してゐたので之はクロガモの卵であることが確實に推定された。他の鴨のものは未だ發見しないが、こゝで拾つたのはクロガモの卵だけである。恐らく之等は蕃殖後に産まれた無精卵であらう。

ヲナガガモ

七月の中旬、沼の畔を歩く折、鼻先きから一羽のヲナガガモが飛び立つた。後に気がかりらしい態度で少し飛んだ。今度は草中で盛に擬傷をやりだした。鶴類に比べると中々素晴らしい演技である。突然草を離れて水へ入り、水面をバタ／＼と兩翼でたゞいて、「バタフライ泳法」と云ふ形である。

私はそんなことに關はらず、鴨の飛んで来た方へ歩を向けると、そこには今迄鴨が雛を抱いてゐたらしい假巢があつた。草中に徑二十五糎程の圓い凹所を造り、巢材と云ふ程のものは無く、自然の儘の枯草を押しならしたのが巢底になつてゐる。他にダウンも見えず、此處で雛が孵化した模様も察せられず、どう見てもそれは假巢であつた。

雛はと、あたりに氣を配つたときは既に遅かつた。私が假巢に見とれてゐる間に草を潜り抜けて水に入る所であつた。一羽二羽……五羽六羽。一塊りになつて沼を横ぎり向ふ岸へ歩いて行くところだ。此雛たちは孵化後約四、五日位のものである。

ヲナガガモの雄鳥は、このライシャ附近では殆ど見たことが無い。播鉢の太郎池では時々少數

ながら雌雄の鳥を見たことがある。雌鳥には其後二、三回出會ひ、又あれから數日たつて、今度は可成り成長した雛を五、六羽伴つたのを間近く見た。總て雌鳥が雛を伴つたものばかりである。之は恐らく雛が孵化して他所から移動して来たのでは無いかと考へられた。私のかんがへではライシャの北部、高原地帯に在る小沼の畔に茂るミヤマハンノキ等の茂みの下に營巢するので無いかと思ふ。之は唯慢然と考へたのでは無く、よく此地帯でヲナガガモの雛を見受けたのである。

其他の鴨類

コガモ

餘り多くは見なかつた。ライシャ地方の低い地帯の湖沼には一度も見なかつたが、播鉢の太郎池で幾組かのひと番が浮んでゐた。陽は既に落ちた夕方、と云つても晝間の長い此島では既に夜の八時半頃。池に浮んだ小群中の一羽の雄鴨が、頻りにディスプレイをやつてゐる。體を浮かし氣味にしたかとおもふと、首を上へ、伸ばせるだけ伸ばし、その首のやり場にこまつたやうな風をするとたん、ガクリと仰向けに首を倒す。倒す拍子に、「アッ、アヲナ！」と錆びた妙な聲を出

した。

此熱演を數回、続けさまに演じてゐたが相手の鴨たちは、見たところ一向に感動する模様もなく、靜かに水面を遊いでゐた。時期は六月中旬、丁度産卵を終へた頃と思はれる時期であるが、此邊には適當であると推測されるやうな營巢場は無かつた。

折居氏は六月二十六日に産毛の雛五羽と、卵を八箇採集されたことが山階侯爵の報告にあるが、卵の方の採集日が明記されていないのはつきりしないが、恐らく五月下旬から六月上旬頃のものでは無いかと思ふ。

コホリガモ

此鴨は大體コガモを少し大きくした位の鴨で、雌の尾長六六・五耗は體に相當した長さであるが、雄は二三三耗と云ふ長い尾である。此長い尾をピンと斜に立てて水に浮游してゐる姿は可成り遠い所から認め得る。

冬季、本邦では北海道、東北地方の海に渡つて來るが、蕃殖地はずつと北で歐洲に於ては北極圏内が主な蕃殖地、太平洋方面ではアリウシャン群島である。歐洲では秋冬以外、北緯五十度附

近には殆ど見られぬさうであるが、北千島に少數ながら夏季に見られるのはやはり寒流の關係であらう。私は播鉢の太郎池、又南部のライシヤの沼で數回コホリガモに出合つたが、勿論雄は立派な夏羽を装つてゐた。

私は恐らく少數、この島で蕃殖をするのでは無いかと考へる。若し蕃殖するとすれば眞に面白いことで、此後の問題として私は期待してゐる。青森縣地方では此鴨のことを「アヲナ」と稱するが、鳴き聲がさう聽えるさうである。私は此時期には聲を聽かなかつたが、「アヲナ」と鳴く聲を聽いたのは前記コガモのディスプレイの鳴き聲であつた。

其他スズガモ、ビロウドキンクロ、ウミアヒサ等を見たが餘り豊かな觀察記録を有しないから省くことにする。

ハヒイロウミツバメ

出發する前から此鳥の採集を一つの希望にしてゐた。コシジロウミツバメはざらに見られるのであるが、ハヒイロウミツバメの方は今日迄標本さへ見たことがなかつた。ところがどう云ふ神の導きか知らないが、私はそんな珍品を何等手も出さずにと拾ふとは夢にもおもはないことだ

つた。

ある日、アビヤオホハムの巢を探すつもりで周囲一里餘の別飛沼の水際をとぼ／＼と歩いてゐる時だつた。一向獲物もなく横から吹きつける強風に逆ひつゝ、全身に疲労を感じて唯無意識に足を運んでゐた。沿岸は不斷の波で浸蝕され、水際の土は凹凸がはげしく、洞穴のやうに深く穿たれた所がある。こんな烈しい風の日には、クロガモがよくこの凹みに身をひそめてゐた。

風に音を消される爲か、私の足音にも氣づかず惰眠を貪つてゐた鳥が足の下から飛び立つて、共にびつくりすることさへあつた。丁度一つがひの鴨が飛び立つたあと、ふと一羽の死鳥が地面に横はつてゐるのを見た。それが思ひがけなくハヒイロウミツバメであつたのだ。羽毛は稍々みだれて可成り日は経てゐるものらしいが、一向嫌な死臭は無く、海鳥特有のかすかな潮の香がした。

恰も全島は大きな冷蔵庫であるかのやうにかう云ふ生物の死體は一、二ケ月中殆ど腐敗することがなく、どうかすると死んだまゝカラ／＼に乾燥してミイラになつてゐることさへある。いくら珍稀なものでも腐つてしまつて、蛆がわいてゐるのではどうも手を出しかねるのであるが此島ではその心配がなく、いつも私を喜ばすことである。

ハヒイロウミツバメはその名の如く全身軟かな灰色の羽毛をまといつてゐる。上等のファーを見

るやうに極めて滑らかなもの、「灰色の婦人」と云ふ感である。大方ある日暴風にうたれて、終に此池の汀を己の死場所に選んだのであらうが、如何にもその名に相應しき極みである。餘程ひどい災厄をうけたのであらう、胸のあたりを指先であたつて見るとゲツソリと肉は落ち、胸骨に觸るのも傷ましい。最早黙した鳥は曾ての生活を物語るべくもなく、私は無言の鳥を無言の儘、リヌックサックの底にひそめた。

溪流

溪流の奥は必ずカールがある。南部では白煙山のカールが雄大で、そこから弓なりに曲つて流れる雪代ユキシロは可成りの急流をなして末別飛沼へ注ぎ込んでゐる。

此溪流は幅六米程で北千島でも大きい方である。溪谷のうちには岩に堰かれて流れてゐるが、少し沼に近づくと淺瀬になつてサラ／＼と流れたり、又深く濶んで物凄い淵になつたりして餘り長い距離でもないが曲り曲つて湖に注いでゐる。

山にかゝらんとする邊は、七月頃でもすばらしい雪の壁が水岸を作り、又水流の上を覆つて水はその下をボコ／＼と氣味悪い音を立てて流れてゐた。雪溶けの時期で、何だかその上をあるく

のは危険でたまらない。此カールを溯ると白煙山はもう鼻の先にあつたが、雪壁の爲にたうとう断念したことが二度もある。兩岸にはビッシリとミヤマハンノキやミヤマナカマドが茂り、地面はオニシモツケや其他の草が密生してゐる。さういふところではオホムシクヒの聲が聴かれた。少し下流の兩岸の水際には、オニシモツケが蒼々と葉を重ねてゐて、その邊を歩いてゐると草の中からシマセンニウがバラ／＼と飛び出す。此鳥の営巣場として代表的な場所であらう。又鴨類も営巣するやうである。

私はある日梅木川を溯つて見た。名前は大きいが辛うじて三米位の川幅、兩岸は高く、底部は凹字状になつてゐて大きなカールの跡を想像させる。此川も、川口からいくらかも行かないうちに残雪が覆つてゐて、所々の切れ目にはその下を矢のやうに走つてゐる流水が見られた。シノリガモやウミアヒサは多分此川岸に営巣するらしい。時々草間から飛び出したが巢は既に見あたらないかつた。

川口の貧弱な景に比して上流の雄大さにすつかり心をとられた私は、そこを去り兼ねるのだつた。もう川は雪溪の下になつて見えないが、廣々とした大きなカールは之から山の奥迄續いてゐ

る。オホムシクヒやオホノゴマが頻りに鳴いた。川岸の草間にタヒバリの巢があり、中には孵化したばかりの裸の雛が寒むさうに蹲まつてゐた。またその側には高さ十糎位のクロユリが、紫黒色の、莖に似ず大きな花を重さうに垂れてゐた。

パラムシル島の溪流と漁業とは大切な関係をもつてゐる。唯飲料のみではない。流れ込む水は魚群に色々の影響があるさうで、北海道廳でやかましく山の樹木の伐採を禁じてゐるのも此の爲であらう。

梅木川の川口は五月の末迄は雪に覆はれてゐて、二羽のシジフガラガンがいつも遊んでゐたさうである。向ふ岸の氷の上に晝寝をしてゐて、ときたま流水に遊ぶ。そのときは岸の斜面を僅かな間であるが滑つて下りてゐたと漁夫の一人が話した。六月になつてもう見えなくなつたが之等は渡りの途中であつたかも知れない。

シマセンニウ

その棲域は、主に溪流の畔の濕原、丈高い草が密生した中である。その中を歩いてゐると、野良犬の背中を這ひまはる蚤のやうにバラ／＼と、幾つとなくシマセンニウが飛び出す。梅木川の

上流、雪溪を一つ越して平らかな草地へ出ると、そこはシマセンニウの棲家である。多分巢はこの草中の大きな枝につくられてゐるだらうと思つて、私は半日を探し廻つたが、どうしても知れなかつた。

又此鳥は高原地帯にも棲んでゐる。私が一番初めに見たのは高原の、ハイマツの茂みの中であつた。それは丁度この北千島へ来る一ヶ月前に伊豆の三宅島で見たウチャマセンニウと同じ様な鳥が居るので不思議に思つたのである。

鳥はハイマツの茂みから飛び上り、ヒラ／＼翼うつ中に、

ピョツ、ピョツ、ピー チョイ、チョイ、チョイ、チョイ

チチチチチ チョピ、チョピ、チョピ……

口早に囀るのが、ウチャマセンニウの

チュル、チュル、チュル、チュル チカ、チカ、チカ、チカ……

に良く似た聲である。

その時に直感した鳥の聲を、その儘その場で文字にしたのだから各々文字は異つてゐるが、此

二種の聲を同時に耳に入れたら或は同じものが出来たのかも知れない。又あの飛びながら鳴くしぐさも全く異なるところが無い。異ふところはたゞ棲む所なのだ。

昭和九年の六月末、ひどい風の吹いた後、ライシャの小屋に一羽の鳥が飛び込んだ。多分、昨日の晩のうちに風を避けて何處かの隙間から潜り込んだのであらう。捕へて見るとシマセンニウだつた。一見したところでは殆どウチャマセンニウと異なるところが見られない位によく似てゐる。兩種の記載をしらべても、體色も大きさも殆ど同様で、ウチャマセンニウの方が僅かに嘴と跗蹠が長し。

六月中、折がある度に此鳥の巢を詮議したがたうとう出會はなかつた。折居氏は七月四日に一巢を得てゐられるから、いづれ此時期を中心にした頃なのであらう。

又その翌年の七月二十三日に占守島の杜川^{モリカハ}へ上陸した。彼方の丘下を流れる小川の畔は、短かい夏の間にも少しも大きくならうと云ふやうに、草といふ草は茂れるだけ茂り地面の現はれる所は全く無い位。快い夕陽を浴びて草に坐すと、四邊は賑やかである。

ジャツ、ジャツ、ジイツ、ジイツと、方々で掛合ひに鳴くのはシマセンニウである。オホノゴマも見える。鳥たちは皆嘴に餌を啣へてゐた。時間が無いのでゆつくり探すことも出来なかつた

が、一齊に雛が出揃つたのであらう。

シノリガモ

シノリガモは海岸の岩陰や、崖下の波を除ける所によく見られる。澱んだ黒い水、浮ぶ鴨の色は又黒ずんだ褐紫黒色で、餘程氣をつけないと見逃がす位であるが、之を少し近くで見ると鮮やかな模様が花のやうに暗い波間に閃くのだつた。

英名で云ふ Harlequin duck (道化鴨) の意は、此鳥が決して道化的の舉動を見せるので云ふのではなからう。恐らくあの美衣が、ハアレキンの著る派手な段段模様の着物に似てゐる爲か、

又此鴨の顔の隈取りがマスクを被つたハアレキンを想像させるものであらう。重く濃霧のたちこめた朝は波も静かで、こんな時には陸岸近く、海面に浮ぶシノリガモが十羽二十羽と小群を作つてゐる。併しさういふ場所は大概溪流の注いでゐる所で、その上流は蕃殖場であるらしい。

溪流の少ないライシャ地方には餘りシノリガモは見られなかつたが、梅木川の漁場へ來たら澤山この鴨が居た。

私が此漁場へ來た日は七月二日であつたが、三日前に溪流を下つて來て漁場の舟の下に隠れてゐたと云ふシノリガモの雛二羽を貰つた。未だ幼いもので、卵を出てから四、五日も経たない位の雛であつたが、捕へてから二日目に死んださうである。バフ色のダウンに黒い縞が有り、顔のところは多少模様の下地を作つてゐた。

其後、何回となく溪流を溯上して此鴨の巢を探したが、もう時期は既に遅かつたらしく、一巢も見當らなかつた。水際に茂つた草の中や、崖下の雪溜りの隙からよく雌雄の鴨が飛び出した。又そんな場所にはウミアヒサもよく居た。飛び立つた跡を調べて見ても、やはり巢らしいものは無かつた。

七月中、下旬に、此漁場附近の海上を巢立ちした雛が親に伴はれて浮游するのを見うける。之等の中にはオホセグロカモメやミツユビカモメの犠牲になるものが可成りあるらしい。ある書物には、水面に浮ぶ雛鴨は又海中から魚にパクリとやられることがあると云ふ事も書いてあつた。

灌木林

氣温から云ふと、パラムシル全島が既に内地の高山灌木帯に相當する。ハヒマツとミヤマハンノ

キの林は海岸から直に山の上迄續いてゐて、平地にも斜面にも、亦崖地にもきつといづれかの樹木の林で占められてゐた。

樹木は風の強く當る所では斜に逼ひ、谷間、山陰等稍々風力のそがれる場所はヒョロ／＼と直立してゐるが、皆堅固な樹幹にガッシリと枝を交へてゐる。陸地の散歩者にとつて、此叢林は何と云つても大なる障害物である。潜るに低く、乗り越すに高く、私は常に之以上の悩みは無いと歎いたものである。罨さへ此叢林を嫌つた。罨は全く見透しのきかぬ密林でも、よくその手薄な所を感知してうまく潜りぬけ、近路さへ知つてゐた。

それで罨の跡をさへたどれば決して困難がない、と云はれてゐたが一度私もそれらしい跡を往つて、とても抜けられぬ廣い林と思つたのが、丁度瓢形にくびれた箇所を通つてゐることを知つて感心したことがあつた。

ミヤマハンノキの林なら苦心すればどうにか歩けるのだが、ハヒマツの密生した林ときては到底我々を寄せつけるものではない。二三度、勇を鼓して乗り越しを試みたが失敗した。失敗したばかりでなく、手の甲は掠れ傷だらけになり、枝に引っかけて、リニククの紐を切つたり、腰のナイフを落したり等散々な被害であつた。

オホカハラヒワはハンノキの林で鳴いた。又オホノゴマ、オホムシクヒも見られ、高原地帯のハヒマツの中ではシマセンニウやギンザンマシコ等が棲んでゐた。

西海岸の鯨灣クヂラから加熊別カクマヅへかけてハンノキの林が殊によく生育し、谷間等には直立した大樹もあつた。ある日、私がオホアカハラトドヨキのうつくしい囀りをきいたのは、加熊別附近のハンノキ林中であつた。

島で一番大きな川、轟トドヨキ川を溯つて末藻寄シモモロへ通ずる谷間のコースは島中でも最も大樹の繁茂したところで、私は未だ行つて見る機会を得られないが、珍鳥ミユビゲラ等の居るのは恐らく此地帯であらうと推察される。併し之は單なる推察ばかりでは無かつた。島の主と云はれるある人からこのあたりには啄木鳥が居ると聞かされた。ベニヒワやクロジが蕃殖するのも多分この地帯であらう。

オホカハラヒワ

南四ツ岩で、漁舎の炊事場近くに溢こぼれたお米を拾ひに來たオホカハラヒワを九號の小粒散弾で撃つた。そこへ行つて見ると確かに落ちたはずの鳥が何處へ行つてしまつたか、いくら探しても

見えなくなつた。翌日その鳥が炊事小屋の側に置いてある、米の空俵の下へもぐり込んで死んでゐた。

島ではオホカハラヒワがよく漁場を訪れた。人の住む所にはどうしても此鳥たちの好む食物が多いのであらう。ライシャは平原で、カハラヒワの棲みさうな灌木林は無かつたがよく現はれた。之等は一里程奥の高原から態々餌を拾ひに来るのだつた。ハヒマツの密林中にも見られたが、ハシノキの林に居ることが多かつた。

北千島では終にオホカハラヒワの巢を見る機會が無かつたが、嘗てエトロフ島での経験から此島でもミヤマハンノキやハヒマツの枝に營巢するものと思ふ。その時の巢はミヤマハンノキの地上一米半位の所、幹が三つ又に分れた間に營んでゐた。枯草や細い樹根のやうな物を主材にして、内部には繊維や枯草、又カモメの羽毛等を敷いてゐたやうに記憶してゐる。

その巢を發見したときは丁度營巢を終へたところだつたので、翌日はきつと卵が見られるものと樂みにして行つて見たら、巢は既に夜霧に濡れて空しかつた。營巢中に手を觸れたので見捨てたのだらう。それ程用心深い鳥であるから營巢するにも餘程うまい場所を選ばらしく、可成り詮議して見たがパラムシル島では發見出来なかつた。

折居氏は一巢二卵を採集されてゐて、之は七月二十三日であるが、普通の産卵期は六月中旬を中心にした時期と思はれる。七月上旬にはもう巢立して可成り成長した雛が、喧ましく親鳥に餌をせがんでゐるのを見ることがある。

オホカハラヒワは内地には冬季にだけ現はれ、蕃殖地はカムチャツカ、千島等である。コカハラヒワにくらべて羽色は殆ど同様、翼長は八三耗に對し八八耗、僅かに大きいと云ふ差である。鳴き聲は極めて口早に、

キリキリキリキリキリキリ、ジューイ。

此轉りも、コカハラヒワと異なるところが無い。

オホノゴマ

千島の山に棲む鳥で最も美しい鳥である。喉下の朱赤色の所を野外で見るときは眼も覺めるばかり。又あの姿で玲瓏と轉ぶるのだから、千島の山を歩く人の心を魅するは無理も無い。私は一年前に樺太でノゴマの歌を初めて聞いたのであるが、又こゝで久々に耳にするその妙音、忘れてゐたジャスミンの香でもかぐやうな、うつとりとした氣分になつた。

併し随分むづかしい歌である。多少金属性をもつ音で、チッピ、チッピ……と弾くやうに轉ぶるかと思ふと、チリリリ……と滑らかなツリラのキャテンザを入れる。全體の歌詞はたうとう擱めないで文字に表はせないのは遺憾である。

營巢するのは皆地上である。卵の色は淡青色。七月の下旬、加熊別へ行くと海岸の絶壁上によくノゴマの姿を見た。丁度雛が巢立する時期なので餌を啣へた親鳥が殊に多く頻りと騒ぐ。

「ペイリー ペイリー」

と細い聲で、一寸キビタキを想はせる鳴き方である。

巢立した一羽の雛を見た。親には似ず、黒褐色に黄褐色の斑点のある見すばらしい色の雛であるが、大體コマドリやコルリの雛を見る感である。此雛を撮影しようとしてゐるうちにオニシモツケの密生した中に逃げ込んで見えなくなつてしまつた。

夏も更けて秋も間近、その時分は藪たきノゴマの歌は漁場近くのところまで聴くことが出来た。ノゴマは漁場の腐肉にわく蠅の蛆を求めて來るのである。内地への御土産にと蛆を餌にして捕へた「日の丸」(ノゴマの方言)は、千島に居るうちは元氣だが、段々暑さに近づくのと、餌の加減で大概船中で落ちてしまふさうだ。

オホムシクヒ

山地の灌木林に常棲する鳥である。内地の山岳地方に居るメボソ、又内地の冬を訪れるコムシクヒ等と極く近い亜種で、メボソに比べると少し大型で腹部はメボソより白っぽい色である。コムシクヒとは僅かに翼長の差位で殆ど同型の鳥である。

生態もメボソと何等異なるところがなく、私はコムシクヒの夏季の生態を知らないが之とも恐らく同様のものと思へる。パラムシル島に於けるオホムシクヒはミヤマハンノキの叢林であれば殆どどんな所でも棲息してゐるのである。

鳴き聲もメボソに少しの異ひも見出し得ない。

シチチリ シチチリ シチチリ シチチリ……

メボソと同時に比較することは出来ないが聲量も大體同程度のものであらう。

營巢はメボソから推察すると、灌木林中の草地の上か、土手状の土壁等と思はれるが、不幸にして私は此鳥の巢は未だ實見しない。又他に記録もなく、蕃殖に關しては之以上記述出来ないのは残念である。

高原と山地

此島では平地と高原を區別するのに、唯僅かな高低の差による以外には何等の區別點がない。海岸から直に草原、灌木林が續き、山裾の臺地狀の所が形ばかりの高原を造り、又見る者にはやはり高原に來たと云ふ感を與へぬでもなかつた。山も同様である。ずつと標高が高まれば、多少生物相も變つて居る筈だが、唯此邊に並ぶ山地は残雪を増し、岩を増し、險阻な平地と云ふ感である。チシマライテウはそんなに高い山へ登らずとも中腹以下、高原地帯に棲んでゐる。私はチシマホシガラスには遂に出會はなかつたが之はきつと中腹以上の灌木林に居るものと考へられる。

北千島の山は中々單獨では登高を許さない。私も二三度試みたが、中止の已むなきを知つた。巖を怖れるのでは無い、險しさに拒まれたのでも無い、唯恐ろしいのは濃霧と寒氣である。氣輕なハイキングをやるつもりでは少し手強い敵だと思ふ。

チシマライテウ

ハヒマツとミヤマハンノキの茂つた中に、少し廣い芝生のやうな草の空地、エゾコザクラサウ

が一面に咲いてゐる所だつた。出し抜けに飛び出して來た一羽のライテウは私の前で「ゴァーゴァー」と妙な聲で鳴き出して私をびつくりさせたがライテウは間もなく飛び去つた。そのライテウの姿は眞白だつた。

殆ど全體が冬羽で、漸く翼の一部や背部の方に多少夏羽が見えるだけである。動作は内地のアールプス地方で見るライテウと大差なき感ではあるが、あの異様な聲は私は未だ聽いたことがなかつた。近づく私を避けて茂みから廣場へ飛び出し、首を長く伸ばしてゴァー　ゴァーと鳴くのに私は又びつくりしたのだつた。

その音は木造の齒車を入れた竹筒をグル／＼廻すとギイ／＼と異様な音の出る玩具があつたが、あの音を大きくした聲である。又何處かアザラシの叫ぶ聲にも似た所があつて、どうしても鳥が出す聲とは思へなかつた。

翌日そこから少し上へ登つた、やはりミヤマハンノキが繁茂して、地面は蒲團を重ねたやうにブク／＼と、ガンカウランが重り合つて生えてゐる所である。稍々大きなミヤマハンノキ一本、今その根元にライテウはとまつてゐたものと見え、換羽で脱落した白い羽毛が飛散し、澤山の糞もあつた。

抜けた白い羽毛はひと冬を越したもので、大分羽摺れがしてゐて、又純白であるべき羽も、みすぼらしく淡汚れになつてゐた。ライテウは此處へ靜かにとまり、冬の装ひが新しい夏羽に生え換はるのをひたすら待ち侘びてゐたものであらう。

近くには多分雌が巢に入つて抱卵してゐるものと私は推察して、長い間探し廻つたが容易に見當らなかつた。抱卵中の此種の鳥は、人がその直ぐ近く一、二尺の箇所へ來るまでは巢に蹲まつてゐるから、そのポイントをさがし當てないかぎり巢卵を發見するのは不可能にちかひことであらう。

私はライテウを幾枚かのフィルムにをさめた後銃をとつた。二十米程先のガンカウランの塊りの上に居る相手を銃の照星に乗せる。一向動かない。ゆつくり狙つて放つた。

パッと白い姿が地面に伏したのを急いで近づき、押へると鳥は僅かに身をもだへたのに、バラバラと惜げもなく白い羽毛が脱け散つた。ほてるやうに温かさを持つ鳥體を両手に押へて抱へ上げると、もうダラリと垂れた首のあたりから紅玉のやうな血が滴たり落ちて私の手の甲を傳つた。かねぐ血液の多い鳥であると聞いてゐたことを想ひ出して、全く本當だと思つた。

白い尾羽はすつかり脱けてしまひ、その他の背面や腹部の白い羽毛も澤山脱けた。その跡を見

ると生白い肌の際に、メギの枯葉程の茶色をした夏羽が生えかゝつてゐるのが見える。もう十日餘りもすればすつかり夏の装ひに變ることが明かに解る。眼の上部、丁度眉に當る箇所は肉質で、其色は又鮮やかなオレンジレッドで恰も金仙花の花弁を着けたやうに美しい。此ライテウは雄であつた。

羽毛の脱け細つた鳥は見るからに慘めなものだ。いたましくさへ感じた。到底之を剝皮して標本にするのは困難であるから、思ひきつて試食することにした。頭骨をとる爲に頭部と又後日、食性を調べる爲に嚙嚢はアルコール漬けにして肉はバター焼きにしてもらつた。此頃にこの新鮮な生肉は又殊に喜ばしき珍味。ライテウはハヒマツの新芽を食ふから松脂臭いと不斷聞いてゐたが、一向そんな臭氣は無くある風味を伴ふ美味さで食べることが出來た。

海 岸

南北に細長い島の中央に重疊する山々は分水嶺となつて東西に水を流す。その流れは大概溪流、の儘海岸に現はれ、細やかながらも何々川と名がつけてある。東海岸の漁場は殆どそれらの川口に在つて、漁場の名も川の名のまゝで呼ばれてゐるのがある。東川、梅木川、速毛川等。

島の南端、ラインヤ地方以外は大概の海岸は崖である。殊に南四ツ岩附近のものは物凄い。僅かな砂濱が波打ち際にあるだけで、海岸は巨人の鑿で削りとられたやうな百米に近い絶壁がそり立つてゐる。此崖にはワタリガラスやケアシノスリが営巣する。オホハヤブサも営巣場は大概海岸の崖を選ぶのである。

昭和十年は雪が多いと聞いてゐたが、此高い崖は根雪に被はれて去年あつたワタリガラスの巢は雪壁の下になつてゐるのに驚いた。六十米以上の積雪なのだ。

海岸には又蠟燭岩が散在してゐる。それは島とは云へぬ小さなもので、海蝕作用で崖の一部が海中にとり残されたもので、その上部だけに草が生え、下部は又海蝕で上より細く括れてゐるので、俗に蠟燭岩と稱されるのである。

之等は海鳥の蕃殖に又とない好適な場所で、オホセグロカモメ、ミツユビカモメ、又ヒメウ、エトピリカ等が僅かなスペースをも巢で埋め盡してゐる。又蠟燭岩の他に平たい岩礁も多く、南端の獵虎岩や北部の鳥島等は最も代表的なものであらう。少し高い岩になるとオホセグロカモメやヒメウの棲家となるが、俗に云ふ「波被り」と云つた低い岩礁は、アザランヤトド等の憩ひ場である。

内地と異なることは潮の干満で、此島では一日唯一回だけの干満である。私には餘り關係の無いことであるが、之も單調さ一つで何となく寂しいものであつた。大潮時の干潮には、廣々とした海藻の原が現れる。そこをゴム長を穿いて歩くのも興味あることだつた。ダイシヤクシギやキアシシギ、赤い夏羽になつたトウネン、コラブシギ等が見られた。又八月過ぎには北から歸つて來るチンマンギも多分こんな場所へ現れるであらう。

海岸の漁場附近はカモメ類の良き採餌場である。漁舎の海邊には解體された鮭、鱒、又鱈の臟腑が山をなしてゐる。鷗たちはそれを直接採るだけの勇氣はなく、波に浮んだ臟腑を飛びながら啄み取るのである。オホセグロカモメが最も多く、その群の中にミツユビカモメも混つてゐる。又六月のうちはハシボソミツナギドリトキタキの群が時偶漁場近くの海邊へ集つた。海上ではあれ程船を怖れた此鳥たちも飢えてゐるときは、四邊に何物も無き迄に慣れ／＼しく、池に浮んだ鷺アヒルを見るやうである。

溪流の注ぎ込む邊りはよくシノリガモの小群が浮游してゐた。遠くで見ると唯黒い鴨であるが、少し近くで見るとあの鮮やかな顔の隈取りが見られる。

千島附近の海の色は全く黒い。墨汁を溶かしたと云ふ形容も左程誇張にならない位である。好

く晴れた日、船の上からちつと海面を見ると水中には埃のやうな浮游生物の漂つてゐるのが肉眼にさへ見える。之が鮭や鱒、鱈の食物になるのだらう。

どう云ふ関係であるかはつきり解らないが、鳴巢平シキスダヒラ（ライシャ地方）に鶴の多いときは、鮭、鱒の大漁だと云ふことを此附近の漁業家は云つてゐる。之は氣温の影響で兩者の食物の發生に異變があるのではなからうかと考へられるが面白い話だと思ふ。

海岸の斷崖は東と西は多少景觀は異なるやうで、一概に云ふと西海岸の方が險阻である。之は西側に多く高い山がある爲でもあり、又樹木も多生してゐることは明かな相異である。面白く思つたことは、東側には殆ど見られないところのハギマシコが、西海岸の斷崖には可成り多く居て蕃殖してゐること、やはり山が多く又海岸に近い爲であらうと考へられる。

カモメ

カモメをカゴメと云ひ、カゴメをゴメと略し、又ゴメがゴミとなつて呼ばれる。之は北海道地方の話であるが、北千島は凡そ北海道の人達で占められてゐるのでカモメ類は、オホセグロでも

ミツユビでも皆ゴメ又はゴミで通つてゐる。海の塵芥ごみを拾つて食ふからゴミと云ふのかとある人に聞かれたことがあるが、それ程、カモメ類は可成りの悪食をやつてゐるのである。

千島では河口、灣、漁場附近の海岸等が主な採餌場であつて、それ等の水面に浮ぶ物を飛びながら啄み拾ふと云へば、大概どんな物を食べてゐるか見當がつく筈である。漁場等で鮭、鱒の臍物のうち捨てられたのが海岸にうづ高く積まれてゐるが、永い間には打寄せる波が、幾らかづつ攫つて行く。

如何に寒冷な北千島でも大概は腐敗してゐるか、又はそれに近いのであるが、波間に浮ぶそんな物を鷗は拾つてゐるのである。魚腹からとりたてのものでも拾へばいゝのだが、それを避けて態々そんな物を食つてゐる。磯波のかへるさにチラと見える物を、器用に飛びながら拾ふのだが、それはよく赤い筋子等が見られる。又夏の頃は川から下りて來て海に浮ぶ、シノリガモやクロガモ其他の鴨の幼鳥が居る。オホセグロカモメは之を空から掠めるさうである。

パラムシル島に棲む鷗はオホセグロカモメとミツユビカモメである。ユリカモメは未だパラムシル島では採集されてゐないが、私は一度南四ツ岩の海岸で死鳥を拾つた。すつかり夏羽で頭部は黒褐色になつてゐて、嘴と脚は濃い紅色であつた。カムチャツカが蕃殖地であるから、恐らく

渡りの途中で落ちたのであらう。

オホセグロカモメはウミネコを大きくした形で、翼長四三〇糎内外と云ふ大きさである。疊んだ翼の上面が灰黒色であるから、背黒の名があり、脚は肉色、嘴は黄色でその一部に赤い斑がある。千島では南部、中部、北部へかけて海岸の至るところに多棲してゐて漁場にはつきものの鳥である。

営巣する場所は海岸近くの小島、岩礁、斷崖、湖水中の岩石等で、どうかすると草原や、湖畔の平坦な地上に産卵することがある。

漁場近くの小島等に営巣した鳥は全く災難である。漁夫達は毎日續く鮭や鱒、又鱈等魚肉ばかりの副食物にすっかり倦きてゐるから、此鳥の卵は、「ゴメの卵！ ゴメの卵！」と歓迎されるのである。初めどうして食べるのかとある一人に聞いたたら、「煮て食ふのだ」と云つた。煮ると云ふから羹か煎り卵にでもするのかと思つてゐたら、皆茹でゝ食べてゐた。茹でることは北東の言葉で煮ると云ふことを初めて知つた。

私も試みに煮た卵を一つ貫つて食べて見たが、少しゼラチン質が多くて卵白が稍々半透明になつてゐるだけで中々味は良く、多少磯臭いところもあつたが、之では漁夫たちが珍重するはずだ

と思つた。

漁の方が少し暇になると、最寄の「ゴメ島」へ磯舟を漕ぎ出して卵を採りに行く。一度に三、四十箇の卵をもち歸るが、カモメ類は非常に蕃殖力が強い鳥であるから、採られても直に産み揃へる。又それを採りに行く。かう云ふ工合に一と夏中繰返してゐるうちに秋が来て、つひに雛の顔を見ないで終るカモメも澤山あるやうだ。

南四ツ岩のある蠟燭岩には頂から長いロープがブラ下つてゐるので、何だらうと思つて聞くと、日を定めてはゴメの卵を採りに行くので、ロープをちやんと備へ附けにしてあるのだと云ふ。カモメたちこそ良い迷惑である。併しそれ程、掠奪されてゐながら巢を他に移さうとしないカモメである。中には中止して他へ行くのもあらうが、その後には代りのものが又をさまると云ふ風である。

巢は崖の岩棚や、大きな岩石の上、又平坦な地上等に在り、枯草を主材として産座には徑二十糎餘の凹みをつけてある。卵(75.5×53.7mm)はオリブ色地で褐色をしたものや紫褐色斑紋のあるもの、又、淡青色地、淡緑青色、オリブ青色等色々の變種がある。

一腹三、四箇の卵を産むのだが、完全に卵の揃つたのを私は殆ど見たことが無いと云ふのは漁

夫の掠奪の爲である。孵化した雛は灰白色の産毛に包まれ可愛い姿である。少し成長すると岩を攀ぢ又水に泳ぐことが出来る。

ミツユビカモメはオホセグロカモメに比べると形はずつと小形で、白っぽい色をしてゐる。飛んでゐるとき、白い翼の先に黒い斑紋のあるのが特徴で、黒い脚と黄色な嘴が目立つ。鷗類の鳴き聲は大概「海猫」の形容が當るもので、體の大小に依つて聲の大小がある位、他は殆ど同様な聲である。オホセグロカモメの鳴き方は「クアー クアー」と聽かれるが、ミツユビカモメのはずつと優しい聲、「クイー クイー」と鳴く。

昭和十三年の夏、私はミツユビカモメを澤山見たに拘らず、蕃殖場所が解らなかつた。一體に海鳥は、一箇所に集團を作つて營巢する通性があるので、餘程適當な場所が無い以上、さう矢鱈に方々へ營巢しないものである。ミツユビカモメに對して、南四ツ岩附近は屈強な營巢地と我々には思はれたが、此處で營巢するものは一羽も無かつた。

翌年私は南四ツ岩をずつと北へ行つたところの、やはり四ツ岩（北の四ツ岩）と云ふ漁場へ行くと、偶然、此鳥の蕃殖地に出會つたのである。それは海岸近くの蠟燭岩だつた。地形から蠟燭

岩の状態に至る迄、地名が似てゐるやうに、總ての點で北と南の兩所は似てゐるのであるが、南四ツ岩では營巢しなかつたのはどう云ふ譯であらうか。

島を去るに望んで、私は船でパラムシル島と占守島の周圍を一週して見たが、ミツユビカモメの蕃殖場と思はれるのが、柏原、壘山附近にも二三見られた。

ミツユビカモメの卵は今迄、樺太の海豹島で採集されたものを黒田博士が所藏されてゐるだけで日本では未だ無かつた。Kitiwakeと稱するミツユビカモメに非常に近い種類が歐洲には多産するので、卵や巢は左程珍しいとは云はれないが……。今迄採集し難かつたと云ふのは、前述の如くその場所が極限されてゐることと、巢はオホセグロカモメと異なつて、皆嶮しい崖の中途などこにあるせいだらう。

四ツ岩での營巢状態は、海中に散在する蠟燭岩の斷壁、海底から十米から二十米位の所である。岩は崩壊し易い火成岩で、その壁に澤山、風蝕で出來た突起があり、それが巢臺に成つてゐた。巢は枯草を多量に使用し、毎年同じ巢を利用するものと見え、上へくと新しい巢材を足して、中には非常に長大な巢もある。

卵は淡青い地色に褐色乃至褐紫色の細かな斑點があり、オホセグロカモメの卵に比べて、丸味

多く趣の異つた卵(57.6×45.5mm)である。之も一腹三箇が普通であるやうに聞いてゐたが、私が行つたときも掠奪の後と見え、非常に採り難い場所は別として、攀ち登つて何とか手の届く所は、大概一箇か二箇であつた。

エトピリカ と ツノメドリ

エトピリカは日本産の鳥であつて、日本語らしくない名であるが、これはアイヌ語である。アイヌ語で美しいことを「ピリカ」と云ふが、私の考へではエトピリカとは「美しい嘴」とか「美しい鴨」とでも云ふ意味のものでは無からうかと思ふ。

千島では「花魁鴨」とか「花魁鳥」と呼ばれてゐるのも、やはりこの鳥の美しい嘴や、眼縁を隈取る紅色、眼上に金糸のやうな總狀の飾り毛などが因をなしてゐるのである。體は全體に艶の無い褐黒色であるが夏は顔のところは白色になる。太い嘴は濃厚な赤紅色、まるで珊瑚を見るやうで、その基部にはまた黄綠色の飾りが附いてゐる。これは我々が見たところでは殊更に飾りと云ふ程の物に感じないが、蕃殖時期にだけ出来る物であるから鳥としてはやはり裝飾の一つであらう。

脚は又赤い。嘴と脚の赤い色が全體の黒色に對して、非常にあくどい感がある。冬は夏に比べれば見すばらしい色だ。顔の白色部も金色の總も又嘴の基部の飾りも消失する。又標本として採集した鳥は死後は段々と美しい嘴の色は褪せてしまふので、本當に美しい色のエトピリカはどうしても蕃殖地でなければ見られないのである。

航海中、北海道の地域を離れて半日もすれば南千島に近づくが、その邊の海上にはもうぼつぼつエトピリカの姿が見られる。海中に潜つてしきりに魚を食べてゐるものもある。又丸く肥つた體でたどたどしく飛んでゐるものも見られる。飛ぶのを見ると直線的であるが、蹠の附いた脚を後方へ伸ばし尾の様に擴げてゐるが、之が飛翔中の方向舵の用をなすらしい。

私は數年前の南千島旅行以來、此鳥とは可成り親しくなつてゐるのであるが、一度も鳴き聲を聞いたことが無い。併し全然鳴かないとは考へられない。北歐に産する Puffin はツノメドリに似た鳥で、又エトピリカにも近い鳥であるが、ある書物には「夜に鳴くそれは恰も猫のやうである」と書いてあつた。多分蕃殖時期の初め頃に集合したときにでも鳴くのであらう。

巢は蠟燭岩や海岸の斷崖上の草地等、又岩石の下や間隙に造る。草地ではその斜面に横穴を自

分で穿つ。徑二十糎ばかりで、深さは半米から一米位、その奥に眞白な卵を一つ産む。之は必ず一箇に限る。一體海雀類は皆一卵を産むのが特徴である。

草の斜面に寝そべつて、その穴に片手をぐつと伸ばして突込むと、辛つと指先に卵が觸れる。之は私が経験から得た採卵法である。漁夫達もさすがそこ迄研究しないと見えて、エトピリカの卵は漁夫達の掠奪から辛うじて逃れてゐる。

試みにエトピリカの卵を茹でて見たら、卵白は餘程ゼラチン質が多いと見え、いくら茹でてでも固らないでユラ／＼とゼリーのやうになつてゐた。漁夫達も之には辟易して、一人も手を出さなかつた。

巢穴を掘るのはあの堅固な嘴と、脚の力で掘りあけるのである。エトピリカの嘴の力は又素晴らしいもので、前述の採卵法をうっかりやつて、巢穴の奥に抱卵してゐる鳥に手をいやと云ふ程噛まれたこともあつた。

本來は草の斜面に穴を穿つて營巢するのであるが、さう云ふ適當な土地の無い時は、岩石の間や下に卵を産む。巢材としては僅かな枯草を敷いてゐるだけである。六月を中心にした時期が産卵の最も盛な時で、七月中旬頃は孵化した雛が見られる。眞黒なダウンの雛、しばらく穴中で親

の哺育を受けてゐる。雛に與へるべく親鳥は小魚を嘴に、四、五匹列べて啣へて来る。嘴の魚を見たと丁度目刺しにした小鱈の一束を見るやうである。

南四ツ岩の蠟燭岩でエトピリカの巢を物色してゐて、ある一巢の中から採り出した卵はエトピリカの卵とは異つてゐることに気がついた。大きさはエトピリカ卵の平均 72×48 糎に比して 71.3×44.3 糎、一見しても前者より細長い形である。エトピリカのは白色で、極く淡い褐色の斑紋が僅かに附いてゐて、大體地肌は粗く艶は勿論無い卵であるが、此の卵は殆ど斑紋が無く、地肌も滑らかであつた。之はツノメドリの卵と思はれる。

その巢の親鳥を確認したわけではなく、後でエトピリカの卵の中から発見したのではつきりは言へないが、南四ツ岩附近では極く少數ながらエトピリカに混じてツノメドリが棲息してゐることは明かである。現に水中で漁網にかゝつて溺死した死鳥を此處で拾つたこともある。

ツノメドリの羽色がエトピリカに異なるところは、夏羽に於ては胸、腹部が白色であること、又眼の上の總狀の飾りの代りに、角質の留針狀の物がついてゐるので、ツノメドリの名稱の因は明かである。ほんたうの蕃殖地は千島より更に北部、カムチャツカ、アリューシャン、アラスカ方面にかけてである。

ヒメウ

船が千島列島の入口、色丹島沖にかゝると海上にはヒメウの姿が日増に多くなつて來るのに氣がつく。その邊では三、四羽が低く波とすれ／＼に飛んでゐるが、首の短いエトピリカに比べて眞に好いコントラストである。その恰好は、首の長い一升詰の酒瓶が翼を生やして飛んでゐるやうな形で、あわたゞしい翼づかひに飛ぶ。此時側腹の白いところが黒い羽毛の中に殊に目立つて見える。

ヒメウの棲家は海岸の絶壁、それも二百米を超す程の一枚岩から成つてゐる壁面の棚状のところだが最も好まれる場所である。又蠟燭岩もよく利用される。岩棚は人がロープで岩壁の頂上から下りたら、辛つと立てるか立てない位の幅で、そこへヒメウは首を長くしてズラリと並び立つてゐる様は、之も酒のことになるが、丁度ビアのスタンドの奥に並んでゐるあまたの酒瓶を見る感である。

其處等はヒメウ等の糞の爲に白々と白聖化してゐるので、鳥の姿の眼に入らぬ程の遠距離からでも、それだけが白く見えてヒメウの棲家であることが解る。

巢は岩棚や崖壁の凸所等に在り、趣はミツユビカモメに似た物である。幾年となく同じ巢を利用するものと見え、枯草を主材として造られた巢の外部は、糞ですつかり堅められて一箇の白い塊りになつてゐる。

卵(60.8×39.4mm)は青味を帯びた細長い物で、形が小さいだけでカハウの卵と同じもので、大概二箇三箇が巢内に横つてゐる。海鳥の常として適當な場所であれば、數十組もの巢が一箇所にかたまつて一團を成してゐる。

ワタリガラス

南四ツ岩の漁場へ來て一日の好晴もなく、毎日梅雨のやうな雨が降つた。漁舎の硝子戸越しに、彼方の海に面した斷崖の中途に在るワタリガラスの巢が見える。もう雛が大きくなつて雙眼鏡で見ると、殆ど親鳥に變らない位に見える。

三十分おき位に親鳥が餌を運んで、巢に入つてゐるやうだ。時々ボカンボカンと云ふやうな頓狂な聲で鳴く。此崖は百米近くもあるだらう。巢は崖下からその三分の二位の箇所で、少し凹んだ所に造られてゐるが餘程古くから毎年利用してゐるのであらう、それは人間が充分に乗れる位

の大ききで堅固である。

「明日天氣だつたら、此奥の鷺の巢(ヲジロワシ?)へ行つて見ませんか、若い者を二人ばかりつけてやりますデ……」親切な船頭の福井さんがかう勧めてくれたが又雨。福井さんは氣毒がつて雨の合間を見て、ワタリガラスの雛をおろしてくれることにした。

この魚場も未だ本當に漁がなく、暇で退屈がつてゐる漁夫達は喜んで此崖をロープで下りてくれた。四人ばかりの若者が崖の上に杭をうち、頑丈なロープを二本かけ、上の人が綱を降ろすと、下ではブル／＼と崖をすり下りてゆく。見たばかりでも恐ろしいやうな崖、氣輕にやつてくれる若者達にさすが私も感謝と共に多少あきれ氣味だつた。

崖上を少し離れた所に小さな溪流がある。此溪流の中に一塊りになつてゐる岩がワタリガラスの「食事場」で、そこにはオホセグロカモメの卵殻が散らばつてゐる。そこらあたりに多産するカモメの卵は、カラスにとつては良い育雛餌料である。併しカラスが盗んで來た卵を常に溪流の水中で破るのはどんなわけだらう。又若者達は卵の中の胎雛を水で洗つてから食べるのだと云つてゐるが、果してそれ程の考へがあるだらうか甚だ疑はしい。

夏が終り漸く秋に近づいて、溪流を溯上して産卵に向ふ鱒や鮭の數は夥しい。狭い水流を揉み合ひながら多大な努力を費やした後、辛うじて産卵の目的を遂げたものは、もはや遊ぶ氣力も無き迄に疲れはてた慘めな姿となる。ワタリガラスはそれを盛に襲撃する。ひとの虚をつくとは甚だ卑怯なやうだが之も自然の配合で致し方がない。

初めのうち、カラスたちは半死の魚の肉を貪り食ふが、終にはすつかり贅澤になつて、魚肉等はかへりみないで魚の眼肉ばかりを狙ふやうになるさうである。人間でも鳥でも贅澤になれば結局そんなことになるのだらう。

人が巢に近づいたので雌雄のワタリガラスは騒ぎ出した。それも唯の騒ぎぶりではなく、そもそも鳥が獍猛に出來てゐるのだから物凄いはかりに逆襲をやる。先づ、突っかけて來る。そして鳴き叫ぶ。又爪をむいて飛びかゝつて來る。それでも倦きたらぬと今度は中空から錐揉みきまもをやり出す。之は中々壯觀だ。高い所から翼をすぼめて落下するのだが、その間に凄い勢で二、三回旋回をして、敵に嘴を向けて落ちかゝるので、之でやられたら相當の傷を被るだらうと思つた。降ろしてもらつた雛は可成り成長してゐたが、まだ飛び得ぬ程度であつた。他のカラスと同

様、例の如く口中は紅色をしてゐる。撮影の後、雛は又元へ返してもらつた。後は一向變りなく親鳥の哺育をうけてゐるのが雨中に見える。巢立するのもしづれ間近いことであらう。

コヲバシギ

風が止み麗らかな夕陽が西空を彩つたが、もはや本式に出かける時刻でもない。私は四十番の小銃を肩にして、餘り行つたことのない鳴浦シキウの海岸へ出て見た。千島の海岸はいつも歩く度に何となく荒廢した感じがして、丁度冬の濱邊を歩いてゐるやうな気がする。

冷やかな風、粗い磯の香、と云ふより漁場近くを歩けば鱒、鱒、鮭の腐肉の臭ひ、全く鼻もちのならぬ臭氣を餘儀なく感じさせられる。雲は低い、あれは雲にはまだ成りきれぬ、重い濃霧の一端であらう。又暗い波、うら淋しい極みだ。

干潮に現れた荒磯のほとり、先程から居たのを私はどうして気が付かなかつたのだらう、つい眼の先に鵜が一羽たゞずんでゐて時々ピョコリ／＼とお辭儀をするやうに頭を動かしてゐた。ハマシギの約二倍位でヲバシギにしては小さく餘り見なれぬ鵜である。そして美しい夏羽を装ひ、顔から喉、首から胸へかけて晩秋の柿の實を見るやうに赤い。

肩の銃をとつてすばやく九號の小粒を放つた。音もなく水際に鳥は伏して、羽のすきから滲む紅い血は水にかすかな雲形を描き、美しい胸毛の色が水に溶けるのではないかとさへ思はれた。生温るい死鳥を手にとつて見るとコヲバシギの成鳥であつた。

此鳥は餘り多くない鳥で、内地では時偶、他の鵜に混じてゐるのを僅かに捕獲されただけで比較的珍らしい鳥である。折居氏が採集せられたのは八月中旬、その折十羽餘の標本を得られたことがある。主として幼鳥で之等は蕃殖地から南下する途中偶々捕獲されたものらしい。

私のは六月中旬、之から北上して蕃殖地に向ふ途中なのか或は何かの支障で渡り遅れたのかも知れない。いまごろ獲れたからと云つても、此地で蕃殖するのではないかと推定するのは早計であらう。

ハクセキレイ

冬は内地の鳥、海岸に、河口に、田畑によく見られるが、セグロセキレイよりも低い地帯、主として海岸や河口の干潟に多い鳥である。セグロセキレイに體色も似てゐて、うっかりすると混同されやすいが、よく観察すればはつきりした異ひが見られる。顔面部はセグロより白い部分が

多いのと、殊に冬は背部が淡く、灰色である。併しそれよりもまだはつきりした點は鳴き聲、セグロは飛ぶときに、「ジェー、ジェー」と鳴くがハクセキレイは、「チュチュン、チュチュン」とキセキレイの聲を少し太くした聲で鳴くことである。

蕃殖地は本州北部から、北海道、南千島、中部千島、北千島、カムチャツカ、樺太方面に亘る。蕃殖時期でも海岸地帯が棲息地となつてゐて、營巢もその附近でやる。パラムシル島では殆ど漁場のある海岸でのみ生活してゐると云つてよい位、漁場には附きものの鳥である。

ハクセキレイが捕食してゐるのを見てゐると、漁舎で鮭、鱒の捨てられる臟腑に生じた蠅とその幼蟲が主食物である。なるほど之では漁場から離れ得ぬわけである。その他、水流や沼池に生ずるカゲロウの類や、濕原に居る蜘蛛類であらう。

營巢場所はそんな所の崖地が最も多く、又漁舎の屋根、中には人家を遠く離れて、草原地帯に營巢する風流好みの鳥もある。海岸の崖地には必ずオニシモツケ等が密生してゐるのであるが、巢はそんな植物の茂つた中の地上に造る。又漁場の假小屋、殊に筵で張りつめた小屋の屋根や隙間に多く、又魚を詰める木箱を積み上げた隙に營巢をする。

巢材は枯草が主材、内部には細かい物を敷いてゐるが、よくカモメ類の羽毛を使用したものが

見られる。ある巢には漁場の漁夫たちが、刈り落した頭髮を澤山集めてあるのを見たことがある。卵は五、六箇を一巢に産む。其他大した特徴は無いが、人の多い環境に生活しながら、案外に用心深いことで、巢を利用しての寫眞の撮影には豫想外に困難であつた。

ハシボソミヅナギドリ

北半球の冬は南半球の夏、態々さう云ふ遠隔地の夏を求めて、濠洲、タスマニア等で蕃殖する鳥である。日本の近海に現れるのは春も餘程たけた頃、それから追々と北海の夏を目がけて終に北千島へ現れる。強大な飛翔力と、生來の漂泊性とで、はるく之等の遠隔地の往復で一年を過ごすのである。

昭和九年は偶然にも此鳥に縁が多かつた。それは五月半、三宅島へ向ふ途中、新島附近でハシボソミヅナギドリの大群が海上に浮游するのに出會つた。蕃殖を終へ丁度之から越夏の地へおもむく途中であつたのだらう。そして六月下旬にパラムシル島へ行つて見ると、一ヶ月程前に出會つたばかりの此鳥に又出會つたのである。その時は島の南部の海上をランチで航海してゐる時

で、手にとるやうに近々とその様を見た。

此鳥は身が軽いのか、丁度燈籠流しの鳥型のボンボリのやうに軽々と水に浮いてゐて、その邊一面は海上を覆ひつくす程の大群であつた。船が近づいても中々逃げず、艦が體に觸れる程になつてから初めてバタ／＼と水を蹴つて滑走しながら飛び立つが、それさへ如何にも懶い形で、又直ぐに遠からぬ海上に降りるのである。餘り島から遠く離れた海上に見ないのは、やはり漁場から流れ出る物を海上で拾つてゐる爲であらうと思はれる。

昭和十年の六月、或る夕方野田浦の漁舎近く、それも鱈場の人が、がや／＼働いてゐる近くへ數十羽の一群が現れて、波打際に浮く魚の臍物を拾ふのに餘念がなかつた。私は近くの岸から悠悠撮影してゐたが一向平氣で、こんなのはカモメにも見られぬ親しさである。漁場の人も珍らしがつてゐた。

十二枚と十四枚

ライシャ附近の海岸や湖畔の砂丘に所々、奇妙な穴がある。先住民の穴居跡にしては新しく、又小規模である。穴は砂丘の頂を二米ばかり掘り下げて中を板で圍ひ、上は又板を張り、一方だけ

を開けて他の三方と上は砂を被せてある。その中に人が入つて立つと、丁度顔だけが窓状の入口から覗かれると云ふ造りで、戦場のトウチカを見るやうなものである。

ある日、永年ライシャに越年をっねん（冬季を過すこと）してゐるH氏に會つたら、あれは自分が拵へたのだと云つてゐた。つまり、そこで十二枚と十四枚を鐵砲で打つのださうで、冬季カムチャツカ方面から渡つて来る鷺類が砂丘に靜止したところを待ち打ちにするのださうだ。

十二枚とはラジロワンのこと、十四枚とはオホワシを指すので、その語原は之等の鳥の尾羽の數である。どうして尾羽にだけ關心を持つところの名稱があるかと云ふと、之は全くその鳥の尾羽のみが目的とされてゐるからである。此二種の鷺の尾は矢羽根として相當高價に賣買されるのだ。尾羽は二種共白色であるが、勿論十四枚のオホワシの方が高値である。永年の越年で世間に疎かつたH氏は初めは隨分安値で取引してゐたらしかつたが、偶々此地に採集に來たO氏に教へられて、今では相當の値で賣つてゐるさうである。

品質にも依るであらうが、十四枚の方は三十圓乃至八十圓位、十二枚になるとずつと安價である。一月下旬から二月中旬頃がその獵期で、私の考へでは南地からカムチャツカ、又ベーリングの方面へ渡るオホワシと、北千島からカムチャツカ方面で蕃殖するラジロワシの渡つて来る途中

であらうと思はれる。國後島の安渡移矢岬の燈臺では、十一月から一月にかけて多獲すると云ふから北千島より丁度一ヶ月程早く通過するのである。此處では一時期に二、三百の鷺を捕ると云ふことを聞いてゐる。

ヲジロワシの方は眞白な尾羽を持つ老鳥のもの程高價であるが、十四枚のオホワシは、幼期のものが喜ばれる、と云ふのは、幼鳥の尾羽には淡いながらも様々な模様がついてゐるので、その趣を嗜好されるのである。矢羽根に「つまぐろ」とか「おほとり」等と稱されるのは恐らく此オホワシの幼期のものであらう。

H氏に、眞夏でも此寒さだから吹きさらしの海邊で、冬の獵はさぞ寒いことだらうと聞いたら、あの穴の中に火鉢を持ち込んで温まつてゐると家の中に居るより温かいと云つてゐた。

溺死鳥

島で生活してゐるうち、よく溺死した鳥を貰つて食べた。鳥が溺死するとは一寸をかしいが、之等は皆ダイビングをする鳥で、海中に潜つて魚を追つてゐるうち、漁場の建網たてあみに首を突込んだまゝ溺死するのである。

中にもウミガラスが一番多いやうである。パラムシル島に棲むウミガラスは主としてハンプトウミガラスと云ふ種類であるが、いづれにしてもこの鳥の蕃殖場が見あたらないのを不審に思つてゐる。あれ程居るのだから何處かに群集し産卵してゐる筈であるが、今迄のところ見當がつかない。パラムシル島以外の、中部千島か或は北方のカムチャツカ沿岸であるかも知れない。試みにその肉を食べて見たが美味とは云へないが、食べられる程度であつた。

その次はエトピリカであるが、ウミガラスに比べると數はずつと尠くなる。肉は大體ウミガラスに似た程度であるが氣のせぬか少し不味いやうに思はれ、いづれも極めて大味だ。海鳥ばかりと思つたら鴨類や、アビ、オホハム等が時々かゝつた。アビもオホハムも前二種の海鳥よりは、ずつと味はよくなるが、ある日獲れたクロガモをすき焼きにしたのは最も美味で、北千島の味覺の一つとして私の記憶に残つてゐる。其他溺死鳥ではないが、オホセグロカモも照焼きにして食べて見たが之も中々良好、魚肉に食べ倦きてゐる時のことで、殊更に賞味することが出来た。然し何と云つてもあのチンマライテウの肉の味は、忘れることの出来ないものであつたが、之は餘り上品すぎて却つて娑婆の味を想ひ出し、里心がついて歸りたくなつたから、寧ろ北千島では大味の海鳥類でも食べてゐる方が相應しいやうに思はれる。

三宅島の鳥

鳥界の縮圖

船は昨日の正午頃東京を出て新島^{ニホシマ}へ向ひ、途中利島^{トシマ}に寸時立ち寄つたのは今朝の夜明け頃、私は眠くて、ものうく船室の窓から船着場の白濱を一見しただけであつた。烈しい風の吹くことの多い此頃の海は静かなもので、たゞ船の僅かな動搖の他には間斷なくエンジンのバイブレーション^{バイブレーション}が快く響いた。

海は静かであるが海鳥の姿は餘り見られなかつた。時折、海面をバラ／＼と、ミヂンコのやうに飛び散る黒い鳥の群はハンボソミヅナギドリである。此鳥は冬期濠洲方面で蕃殖を終へ、之から北へ北へと越夏の地へ向ふ途中なのだ。他の鳥類は皆之から蕃殖期に入らうとするのに此鳥は全くその反面を歩んでゐるのである。その他オホミヅナギドリの白い姿がチラホラと見える時分はもう三宅島は鼻の先に近づいてゐた。

船は初め神着^{カミツキ}と云ふ所に停船した。島の一番北寄りの船着場で、灣と云ふ程のものでなく、北西風のある時は相當の波を受けさうな場所である。船が出る迄、多少時間があつたので私たちは船を下りて大久保と云ふ村迄行つて見た。

このとき、初めて耳にした鳥の聲は、山手の崖際で鳴くイヒジマメボソの鳴聲であつた。船が伊ヶ谷に着いたのは正午を少し過ぎる頃、きはどく山が海に迫つてゐて、上は曇つてゐてはつきりしないが、此奥には雄山が見える筈である。山巒がその儘谷を造り、伊ヶ谷を挟んで海岸からずつと可成り上の山上迄續いて、又その間を石疊と石段が敷きつめてある。

船から下ろした荷は別に頼むまでもなく、女の人が出て来ていち／＼頭へ乗せて私たちの先へ立つて石段を上り、谷向ふの小さな宿へ入つた。その家は船屋と云つた。

宿の海向きの窓邊へ立たなくても、坐した儘西側は紺碧の海が廣々と眼下に開いて見える。くねり曲つて生えた幾本かの松の樹の間からイソヒヨがチチーピョ／＼と鳴いた。

宿を出れば、海へ行くか、山へ行くか二途の外にゆくてが無い。

九折につづく石段の道も人家の群を過ぎるとあとは岨路と代る。ある一筋の路へ従ふとヤシヤブシの密林へ入つた。榛に似た樹で幹は細くヒヨ／＼とした樹であるが、密に生えてゐるので梢は互にからみ合ふ程に茂つてゐる。又ヤシヤブシの林には定つて、その下部に紫陽花が暗々と茂つてゐる。蒼々とした大きい厚い葉ばかりのやうな紫陽花、今は開花期ではないが之が一齊に

咲き出したら一體どんなことになるだらうとさへ思はれる程の密生である。

アカコッコはこんな茂みで鳴いてゐたり、又巢を造るのが多かつた。

山の斜面は竹藪が繁茂してゐた。イヒジマウグヒスヤシチトウメジロ、イヒジマメボソ等はよくこの中で見られた。谷添ひの、椎が暗々と茂るところにはオーストンヤマガラの赤い姿が見られ、又谷の奥ではタネコマが朗々と轉つてゐた。

併しそれは決して山を深く入つたところではない。海邊から始まる坂の石段を、少し上りつめた所から既に此有様が私たちの眼前に開けたのだ。如何に島は狭いとは云へ、之程、鳥類の棲域が壓縮されてゐるとは想像されなかつた。此處では低地も、山地もほとんど區別出来ないのである。海岸から直ちに山になり、その山には草原の鳥も、森林の鳥も、山の鳥も、擧つて生活をしてゐるのである。

島は水が尠く、飲用水も大概天水を貯藏したもので、場所に依つては山巒に集まる出水を一箇所に貯める水槽もあるが、それは極めて稀だ。人が水に不自由することく、山では鳥もやはり水には不足してゐるらしい。

島の全面は、もえるやうな陽炎に包まれ、天氣のいゝ日等は谷間の川床にお椀で掬つたら二掬

ひも無い位な小さな水溜りに、ヤマガラやヒヨドリが大事さうにその水を飲み、又體を濡らしてゐるのも亦いぢらしい思ひがする。

吹き上げる海風は、折しもたわゝに花を盛る梓あつきの馥郁とした香を送り、谷むかふで桑を摘む乙女の唱ふなごやかな歌、濃艶な色彩をもつたツマグロヘウモン蝶の舞は如何にも暖國にある想ひを深くして、この牧歌的氣分に富んだ島の庭で、私たちは十數日を隣り間に過したのである。

島は東京を去る××湊、約一日の航程であるが、太平洋の南から激しく北上して來る黒潮に洗はれ、亞熱帶的の植物や動物が豊かである。又此地方の島嶼に特産する鳥類もアカコッコを初め、シチトウメジロ、イヒジマメボソ、オーストンヤマガラ、ウチヤマセンニウ、カンムリウミスズメ等と云ふ鳥たちが棲息してゐるのである。

イヒジマメボソ

船を下りて一步を島の地に觸れたとき先づ耳に入るのはイヒジマメボソの聲である。海邊間近く迫つてゐる山の端、樹々が蒼々と茂る裡にその聲は秋蟲のやうに四邊に漲つてゐた。何だか聽

き憶えのある聲だと思つて耳をすますと、

チーブ チーブ チーブ

センダイムシクヒに似た鳴きである。然し最後に「ジー」と長く引くことをしない。又一方では稍々異なる聲がする。

チブル チブル チブル チブル

之は又高山で聽くメボソ其儘。其中には、

ピツ ピーツ ピーツ

とシジフガラかと思ふやうな鳴き方をする個體もある。燦々と陽のそゞろ潤葉樹の林面に此聲を初めてきいて私は何とも云ひ難い清々しい感がしたが、又一面當惑に似た氣持がしたのである。海近くできく此山の鳥の聲、やはり島でなければ得られぬ現象であらう。

島の人は此鳥の名を餘りよく知らないやうであるが、ある人は「アヲガラ」と稱してゐたが如何にも好適な名稱であると思つた。此鳥がどんな場所に營巢するかと云ふことは私たちには全く不明である。センダイムシクヒもメボソも普通、地上に營巢するものでそこから推察しても此鳥の巢はやはり地上に在ると考へたのであつた。

一日、二日と此鳥の巢を地上に探したが容易に得られないので、未だ時季が早いのだらう等と云ひ合つた。ある時、暗い谷間で杉の下枝に丸く枯葉を集めて、地上三米位の高さ、見たところ何かの巢のやうだが多分之はリスの巢だらうなどと私たちは云つて探つて見ると、思ひがけなくそれがイヒジマメボソの巢であつたことが後になつて解つた。

續いて見つけたのは立ち揃つた高いヤシヤブシの林中、一本の梢に在つた。此巢は地上六米程もある。其後に得た巢は一―三米位のものが普通で、選ばれる樹はヤシヤブシ、竹、杉等であつた。之でイヒジマメボソの巢は主として樹上に在ると云ふ新しい確證を得たのである。巢は球形で入口は横の一方に在つて、鳥體に比べて尨大なものであるが、内部の産座は鳥體が辛うじて横になれる位の廣さである。卵はセンダイムシクヒの卵と同じく眞白で艶があるが、一腹の卵數は一―三箇で、四―六箇を産むセンダイムシクヒに比べるとどうしたものか數が少ない。

高山のメボソに於てはその例は知らないが、センダイムシクヒは地勢によつて地上ばかりでなく低い樹木の枝葉の上に營巢することがある。私が富士山麓で見た一例は地上二米半ばかりの箇所樹の枝が何かの工合で下へ垂れた儘葉が茂り、巢は丁度その上に置いたやうに造られてゐた。普通は土手や斜面の少し掘れた凹みの中に營巢するのだが、此時の營巢状態は恰も今見るイ

ヒジマメボソの巢のやうに丸い屋根まで出来てゐた。

こんな例から考へると、鳥と云ふものは環境次第で色々の適應性を現はすことが明かである。

初めは地上に營巢したものであつたが、此島では高い樹上の方が安全性が多いのか又何か餘儀ない事情で皆高所を選ぶやうになつたのかも知れない。そのことを裏書きする事實は、此鳥はそんな高い樹上以外には營巢出来ないかと云へばさうではなく、低い竹の生え揃つた藪中では地上一米位の箇所を營巢し、山地では地上に、恰もメボソやセンダイムシクヒと同じ状態に習性の先祖返りをしてゐる鳥もあつたのである。

要するに斯様な狹隘な島嶼では色々と不自由な事情がある爲に、鳥も亦自然と異なる状態に應じた生活をしてそれが一つの固定した習性となるものであらう。之も亦島の鳥の興味多いところである。

又面白いことは此鳥の渡るコースである。普通日本で蕃殖する鳥は、渡るコースは大概北と南を指してゐるのであるが、イヒジマメボソは殆ど眞西にあたる種ヶ島、屋久島、琉球方面に向けて渡り、そこで越冬し又更に南支那へ渡るものもある。之は後で述べるタネコマと同様な習性の一端で、他には餘り類例のない渡り方である。

イヒジマウグヒス

伊豆七島に産するウグヒスの亞種をイヒジマウグヒスと稱する。形態上の僅かな差であつて、見たところ内地産のものと變りなく、習性も亦同様である。私たちが行つた五月は既に轉づりの盛りを稍と過ぎてゐて法華經の聲もまばらであつた。

巢はやはり笹藪の中に多い。五月九日に見た一巢は地上一米程、巢中には四卵あつたがもう孵化に近いものらしく、親鳥は頗る熱心に抱卵をしてゐた。ブラインドも立てず巢から一米半程の所でカメラを持つて待つてゐると平氣で巢に出入する親鳥であつた。

タネコマドリ

「コマドリの巢が海岸からいくらかも離れない山の岨道の側に在りますよ」と聞いたのは島へ來てから三日目だつた。山はヤシヤブシの密林、岨道と云ふのは伊ヶ谷の村からある炭焼き小屋へ向ふ細い路で、山腹を斜に走る道の山寄りの片側は削られた土壁で、高さ一米半乃至二米、苔や羊齒が垂れ下つて生えてゐる。土壁の所々に凹凸があるのは土中の石が出ばつたり、又下へ落ち

その跡が凹みになつてゐるので、タネコマは此凹みに巢を造つてゐた。然も偶々其處を選んだと云ふのではなく、數組の鳥は永年こゝを營巢場としてゐるやうで、恰もオホルリでも營巢しさうな所である。

炭焼きが、一巢には先日卵があつたと云つてゐたが、見ると巢は空しくなつてゐた。もう一巢はその少し上で稍と四邊は小暗く、巢は前のより高い箇所にあつた。孵化して間もない雛が五羽ばかり靄のやうな産毛の中に蠢いてゐる。

雌雄の親鳥はしきりと騒ぐ。その警戒の聲、

ピッ ピッツルツー、ピッ ピッツルツー

頗るリズムカルな鳴きである。

雄親は時々多忙な折にも、ついつかり口ばしるかのやうに美しい聲で囀り出す。

ピン ツルルル……

何となく遠慮してゐるやうに、稍としのび音、尾羽を扇のやうにサツとひらいてゆるく煽つて見せる。

三十分程したら雌雄で盛に餌を運び出した。啣へて來る物は大概綠色をした幼蟲である。撮影

には少し暗いと思つたが續け様にカメラに納めた。けれども之等は悉く失敗に近く、返へらぬ悔を残したのである。

タネコマドリは前記の如く、冬季は西へ飛び、種ヶ島、屋久島へ渡り、更に未だ南方へ渡るものもある。コマドリと比較すれば稍々胸部と腹部の色は浅いが野外で見た眼には一向變つた感じは得られなかつた。

オーストンヤマガラ

北部の寒い所に棲む鳥と、南の温かな地帯に棲む鳥は同じ鳥の亞種でも、南になる程濃色になるか又黒味勝ちになるものである。北海道に産するキタアカゲラと本州に棲むアカゲラは亞種であるが、色には非常な差異があつて、その胸腹部の色は南にな程る茶がかつてゐる。フクロウも東北地方や信州産のものに比べて、九州に居るキウシウフクロウは之でも亞種であらうかと思ふほど褐色が濃く。

三宅島のオーストンヤマガラは暖地色の鳥として好いサンプルであらう。東京邊の鳥屋では此鳥を飼つてゐるのを餘り見ないが、私は島へ来て見て初めその濃色なのに異様な感じさへした。

ヤマガラがお酒を飲んで酔ばらつた様な色と云つても未だ物足りない、濃い朱色にさへ見え、恰で鬱蒼と茂る椎の葉隠れに赤い花でも見るやうである。大きさも大きいから従つて鳴き方はヤマガラより大きいが、地鳴きはやはり「ツツピーピー」と粘りをもつ聲であるが轉鳴は可なり的美聲で「ピーピーツツピーツツチーチー」と張りのある鳴き方だ。

丁度之から産卵期に入るところで、或る溪谷の岸から斜に枝を出した椎の大木の節穴へ、頻繁に巢材を運んでゐるのを見たのは五月十四日であつた。卵もヤマガラより一ひとまは周り大きく、白地に赤褐色の細かい斑點がまばらにある卵である。

アカコッコ

アカハラに近い種類であるが野外で一見したところ之も全く異つた感じのする鳥である。體の大きさはアカハラと殆ど同大の鳥で、羽色はアカハラより濃色であると云へばそれ迄だが、その濃色なるものがひどく異なつた感じを與へるものである。先づ最も目立つところの胸腹部の色が深い煉瓦色を呈してゐるだけでも野外で見た眼には既に赤い鳥と云ふ印象を受ける。頸部から頭上へ黒々と、頭布を被つたやう、又、下部の赤い色に強い調和を見せてゐる。方言で云ふアカコ

ツコと云ふ意味は赤いツグミ、即ちコッコとはツグミのことを云ふのである。

此鳥には嘗て八丈島で二回程相見え^{まみ}てゐるので、全くの初めてではなかつたが先年、八丈島で初めて見たときは随分赤い鳥もあるものだと思つたのである。

英國にも亦米國にも Robin と稱する鳥が居る。英國のは日本のコマドリに似た種類であるが、米國のは異ふ。それは英國から移住した農民どもが、偶々此地に産する腹部の赤い色をした鳥にロビンと勝手に名稱を與へたのがその儘になつたので、米國のロビンなるものはアカハラに近似の鳥である。私の考へるところ、又繪等を見てどうも此アカコッコによく似た鳥ではないかと考へられるのである。

鳴き方は、大體のテーマがアカハラに類似するものであるが一寸聴くと全く異つたものに聴かれるかもしれない。

チュリー チリー ツイー

と、一音づつは極めて細かいツリラから成り、音階で云ふと一度半位づつに調子を上げて三聲に別けて鳴く。早く云へば内地のマミジロの「チヨボイツイー」と云ふ鳴きのテムポを長く伸ばしたものと考へられる。私たちが島に居る時は囀鳴期を少し過ぎたときで、餘り聴かれなかつた

が、ある日、谷を挾んで向ふの林で鳴いたアカコッコの聲は、うち振るふ銀鈴のやうで、しばし私たちは歩みを止めてきゝほれたのであつた。

巢はよく竹藪の中の笹枝に在つた。又ヤシヤブシの林の中の紫陽花の枝にも營んだ。普通はアカハラのやうに地上二米程のものが多かつたが、どうかすると地上にその儘營巢したのもあつて私たちを驚かした。樹に不自由する筈もないのに時折地面を選んで營巢する。だがそれは平坦な地表にヒバリのやうに造るのではない。谷や掘り通しの山路の崖と云つても下から二米程だが、その軒のやうに突出した所へ懸けるのである。道路や谷間から見ると二米かそれ以上もあるが、崖上の方から云へば全くの平地である。どう云ふものかアカコッコはよくそんな場所を選んで營巢した。巢の形や卵はアカハラによく似たもので、巢の外部は苔、樹根、蔓等を使用し、卵は青地に褐色の斑點が在る。

アカコッコの寫眞を撮るのが今回の目的の一つであつたけれども、中々に利用すべき適當な巢が見あたらないで困つた。

山の急斜面で、竹とヤシヤブシが枝を交叉したその中間に造られた巢には卵が三つあつたので、此の巢を利用し親鳥の來るのを待つて見たが、終に空しく一日を費やした儘駄目だつた。中

中現はれて来ないアカコッコの代りに、シチトウメジロの一羽が物見だかい眼つきでアカコッコの巢の縁にとまつて中の卵を見詰めたりなどした。まさか之を撮るわけにもゆかないので却つて私を焦々させた。

最後に、ウチャマセンニウの巢を探すときに、ついでに得た海岸の竹藪中に在る巢を利用して之で撮れなければもう断念する外はないとさへ決心した。

竹藪の中で、清棲伯と私は二つのカメラを据ゑアカコッコの来るのを待つた。うら／＼と輝く初夏の陽にすつかり睡気を催し、やゝもすれば親鳥の来るのも見逃しさうだつた。幾度か續けて失敗したがその中で一、二枚は辛うじて鳥の姿を得たやうである。

思つたより親鳥は臆病であつた。又あの色はとてもパンクロのエマルション以外には出せないと思つたが、果して此時得た二枚は赤い胸毛も、黒い頭布も皆一様に黒く撮れてしまつて物足りなかつたが、私としてはその折の苦心を思ふと又獨り愉快的想ひ出を語る寫眞である。

ウチャマセンニウ

海岸の草原にウチャマセンニウの棲息してゐることを確め得たことも此旅で忘れ得ない想ひ出

である。ウチャマセンニウが此島で蕃殖すると云ふことが知られたのはつい近頃になつてからである。今まで確認された此島の蕃殖地は朝鮮南部の孤島、七發島シチハツタウであるが、その以前偶々此島に採集された不明の鳥の卵と云ふのが、はからずもウチャマセンニウの卵であつたことを鳥卵學の權威石澤慈鳥氏が發見された。山階侯爵が去年の冬季此地方の鳥類の採集を試みられたが、それは冬季だつたので未だ渡來してゐる時期でなく、この時はウチャマセンニウの棲息地ははつきりしなかつたのである。

このことは出發前に石澤氏から注意されてゐたので、私はある人に頼り、その人の遠い記憶をたどつて見るとどうも山地でなく海濱の叢林のやうであつた。その日は清棲伯と手分けする考へで清棲伯は山へ、私は海岸の牧場へ行つた。

よく晴れた日であつたが、なまぬるい南風が烈しく吹いてゐた。牧場と云ふのは伊ヶ谷から大久保へ向ふ途中の海岸で、島としては珍らしい草原が少し續いた所である。海寄りの草原と山手の耕地の間は細い女竹の密生した藪になつてゐて、それがウチャマセンニウの棲家だつた。案内の人の記憶では數年前に見たセンニウの巢はこんな所ではなく、今は耕作地になつてゐる所の竹

と雑木の茂つた中だつたと云つてゐた。

私が初め此の地帯へ出ると、他の場所には見られなかつたコヨシキリのやうな鳥が居るのに氣がついて、直に之がウチャマセンニウであると覺つた。竹藪の近くの草原に寝そべつて様子を見てゐると、ウチャマセンニウは時折空へ飛び上つて囀り出す。それは突然茂みの中からヒラヒラと性急な翼づかひで上昇し、十米位の一箇所に陽炎のやうに揺らぎつゝ、之亦如何にも多忙らしく囀るのである。

チュル チュル チュル チュル チュカ チュカ チュカ チュカ

聲も大へんコヨシキリに似たものであるが、もう少し澄んだ聲だ。一くさりと云つてもほんの僅か、囀ると又消えるやうに竹藪へ潜り込んでしまふ。

私は巢は無いかと竹藪の中へ入つて見た。竹は常に強風で鍛へられてゐるので細かい割に中強剛な女竹、私の侵入を根強く遮る。又竹にからみついた蔓や茨いばらで自由を更に奪はれた。非常な困難をして探したが巢は見えなかつた。

翌日は皆が總出で探して見たがたうとう巢はなかつた、未だ少し時期が早いのである。此鳥の産卵期は五月下旬から六月中、下旬とされてゐる。

手負ひになつた一羽が、中々落ちないで竹藪の隙を飛び廻つてゐたのでチリ／＼と近づき、手負ひではあるが先づ生きた姿のウチャマセンニウをカメラに入れた。巢は勿論、此處では此の竹藪の中に笹葉で、ヨシキリの巢に似て更にながしりとした厚い巢を造る。卵は白地に褐紫色の條斑のあるものが普通で、中にはピンズキのやうな細かな斑點のある形もある。

此鳥の蕃殖地として知られてゐるのは三宅島、新島以外は朝鮮の南の一部と九州北部の小部分で、他は今のところ明確でない。恐らく未だ他に蕃殖地とする地方がある筈と思はれるが、此鳥の體色が餘り鮮やかでないので又ヨシキリやコヨシキリ等も混同される場合も多いことで、世人の見外に在る爲めではなからうかと考へられる。冬季は南支那、南洋方面へ渡つて越冬するのである。

カラスの食事場

私は或る谷間でカラスの「食事場」を見た。伊ヶ谷から阿古アゴへ行く途中のある深い谷間にカラスの巢があると云ふので、發見した男に案内をされて行つて見た。山道を海邊の方へ下りるとささやかな溪流があり、「巢はこの奥です」と云はれたときに、ふと斜面の一箇所に捨てられた夥し

い鶏卵の殻、附近には人家も無いので人間が捨てたのではないことは直に解る。卵殻は皆普通、人間が割るやうに半分破つてあるのでは無く、恰も半熟にした卵をコックとたたいて茶匙の入る位に穴を穿つてあるものばかりである。

之はカラスの仕業であると云ふことを知つた。と云ふのは此島へ着いた早々、伊ヶ谷の人里で鶏舎を襲つてゐるカラスを見たことがあつたからだ。

崖上の人家でケケッ コッコ コケッコとけたましい鶏の叫び聲の後から、鶏舎の竹垣をヒラリと飛び出して側の蜜柑の樹にとまつた一羽のカラスは、嘴に大きな丸い白い物を啣へてゐた。随分圖々しいカラスもあるものだとその時思つてゐたが、その次の日も亦同じ掠奪をやる様を見、又その後も異つた場所で見ると、此島のカラスは一般にかう云ふ悪癖のあることを知つたのである。抱卵中の卵を強奪するの、それとも産み捨ててある卵を掠め去るのかはつきりしないが、この「食事場」の卵殻を見ると皆抱卵前の物ばかりで、やはり産み捨ててある卵を掠めて来たものと断定された。一見したところでその数は約二十近く、併しそれは「食事場」に在つたものばかりだが、附近の水流の中に所々うち捨てられてゐるのを合すれば可成りの数になるだらう。

私は先年千島でワタリガラスの「食事場」を見たことがある。之も亦巢の近くにある谷川であつたが此場合は流れの岸でなく水流中のある一箇所の岩の上であつた。ワタリガラスが集めた卵は鶏卵より大きいオホセグロカモメの卵であつた。新鮮なもの他、抱卵中のものや又殆ど孵化しかゝつた卵もあるやうで、之は中味が見られるわけではないが捨てられた卵殻内に残る血線の程度で推察されるのである。

カラスたちにとつては他鳥の卵が育雛には最も適當な餌料であらうが、相手の鳥にはまつたく災難である。

高山に棲むホンガラスにも「食事場」を定める習性がある。ホンガラスは他鳥の卵を掠めるのではなく之は専らハヒマツの毬果である。ハヒマツ帯の展望のきく箇所を定めて、毎日ここへ毬果を啣へて来ては啄んで中の實を食ふ。その折、敵が近づいて食ひかけの毬果を其儘に飛び去つて、後でその毬果から一齊に發芽することがあると云ふ。之は武田久吉博士が觀察された話である。前にも述べたがカラス類の他、鷹類にも此習性が殊に著るしく、私は此頃になつて「食事場」を見たばかりでその主の鳥が何であるか確定し得る迄になつた。たゞし之は千島の濕原に於てである。

カムリウミスズメ

來航の時に船が三宅島に近くなつた頃、島から稍、離れた海上に日本アルプスの小槍をその儘ここへ持つて來て波上に浮べたやうに尖つた岩礁が在るのが見えた。多分之が私たちの目ざす三本岳ボンダク（又は三本槍）であらうと思つて船員にたづねて見ると、やはりさうだと云つた。あの岩まで行けるだらうかと聞くと、三宅島から雇船して行けば行けるだらうが上陸されるかどうか解らないと云つた。

此小島には今度の旅の第一の目的とするカムリウミスズメが棲んでゐるのである。態々行つて上ることが出来ないやうだつたら随分口惜しいことだらう等と私は氣がかりだつた。島へ行つてからも先づ、雇船のことや又上陸可能かどうか色々の人にきいたが、船は發動機船を雇へば三時間位で行けるが、餘程良い風の日でなければたうてい上陸は不可能だらうと云ふ。甚だ心細い話だ。

よく晴れた朝を迎へた五月十一日、海も青々と澄むやうに見えた。今日なら何とか成るだらうと云ふので、三本岳へ向ふことにして、不斷はトビウヲの漁をしてゐると云ふ小さな發動機船に

乗つた。陸上からあれ程靜かに見えた海面も船を走らせるとそんなに滑らかなものではない。殊に潮時で激しい潮流が島の縁を洗ひ、約一時間もして「黒瀨の鼻」とか云ふ所に出たときは、益益潮流は險しく、海面は三角波を巻き起して怒つてゐた。此鼻を過ぎると後は大きなうねりを乗り切るだけで約三時間程して三本岳は間近になつた。

近づいて見ると遠く眺めたものより更にグロテスクな岩山である。偉大な玄武岩の塊りから成り、槍の鋒先のやうな鋭峰を高々と上空に突出し、頂から根元迄その儘の傾線を海中に落してゐるが、僅かに北側の一部に崩壞箇所があつて、砂混りの急斜面には蒼い草さへも見えてゐる。その下部にあたる所は未だ草の覆ふ迄に至らず、岩石は崩壞した儘磊々と危なげな形で轉がつてゐて、そこに何神がおはすか小さな鳥居の在るのが見えた。此處がカムリウミスズメの營巢場となつてゐるのである。カムリウミスズメは岩石の下や間隙に一卵を産み、抱卵をしてそれが孵へると未だ産毛の雛を伴つて直ちに海に入つて、その後は殆ど上陸することもなく専ら海上生活をするのである。

島では此ウミスズメのことを「チンチク」と呼んでゐる。どう云ふ意味であるか私には解釋出來ないが、とにかく「チンチク」と云ふより他に名稱がない。元來ウミスズメ類は北方の鳥であ

るが、此カンムリウミスズメだけは暖帯、亞熱帯の海上で蕃殖する變つたウミスズメで、本邦特有の種類である。蕃殖地は伊豆七島が主な場所であるが、大島では未だ蕃殖したことはきいたことがなく大體、神津島、新島、三宅島で最南は鳥島である。相模、駿河灣、また九州、對馬、朝鮮の海面にも浮游するのが見られるから、或は伊豆七島以外にも蕃殖地はあるかも知れない。又蕃殖時期を過ぎると北海道、樺太方面に迄渡ることがある。

羽毛の色は北海に多い普通のウミスズメによく似てゐるが、頭部の黒冠狀の羽毛が長く、又顔から體側にかけて黒い部分がある。最高部の鳥島では四月頃が最も蕃殖の盛な時で五月にはすでに終るらしい。北部の方でも、その最盛とされる時期はやはり四月を中心にした頃で、五月の中旬は時期から云へば既に盛りを過ぎてゐるわけである。

「チンチク」の雛は孵化後間もなく海上生活をするのであるから、此近海にも親に伴はれたその姿が見られる筈と思つたが、どうも海上には見られなかつたのは最早や北の方へ移動してゐたのであらうと後で考へられた。

故石井重美氏の著「自然と科學」の中で伊豆七島の觀察記に少しカンムリウミスズメのことが出てゐる。又その文中、元東大理學部教授、故波江元吉氏の文を引用してある。それを又原文の

儘で、「予神津島到着の日(明治廿四年四月廿七日)膳部に卵の羹あり、之を喫するに少しく臭氣を帯び其味鶏卵に劣るを以て之を尋ねしに、ギアバと稱する海鳥の卵なりと答ふ、其形狀等を問ふに大島、新島に於て未だ見聞せざる所なり、依つて其卵數個を購ひ、尙母鳥を得んことを望む、翌朝兒童數羽を捕へ來る之を視るに乃ち此ウミスズメなりし、其場所を尋ねるに此島當時生殖期に際するを以て該島沿岸の岩礁中に於いて卵を翼抱す故に夜中其翼伏せるものを直に捕へ來るなりと云ふ」。

今眼前に屹立する海上アルプスは目ざすカンムリウミスズメの棲家、遙々訪れた私たちは何とか上陸してその片影でも見たいものだと思ひふける。船を止めた所は附近の岩礁でいくらか波を遮り大體靜かであるが、間を置いて押寄せる大きなうねりがある。此うねりが頗る厄介だ。傳馬船に乗り移つたがうまく船を着ける所もなく、此處より他に上る所は無いと云はれた場所は、うねりの餘波を辛うじて避け得た一つの丸い岩であつた。波が傳馬を持ち上げたその瞬間を見て、一人一人が岩に飛び着いて舟を離れた。丁度大きく碎けた波の塊りが飛沫になつて、私は上るなり潮の洗禮を頭からザツと浴びた。

あれ程期待したチンチクはやはり時期を過ぎ、辛つと見出された物は、岩間に残されてゐる二三の巢と卵。巢は岩と岩の隙間に深く一米程の所に枯草を少し敷き、唯一箇の卵を産み置いてある。時期は既に過ぎた今は此等の卵は皆、抱卵を中止したものか、抱卵中に卵殻が傷ついて腐敗したものである。抱卵中は、夜間のみ巢に入り、夜明けと共に巢を出て海へ去ると一般に云はれてゐるが、之は誤りで、抱卵中は晝夜を問はず巢に居るもので、たゞ交尾期には晝間は海上に在り、夜間のみ島に上り騒々しく鳴き合ふのである。

兎に角時期は既に過ぎ、此島の上にも、亦附近の海上にもカンムリウミスズメの影だに見ることは出来ないと言ふ寂寥さであつた。崩壊部の少し上、砂の急斜面に草が茂つてゐる所はオホミヅナギドリの營巢場所、所々に巢穴が掘り開けてあるが之は未だ時期早く、穴は皆去年の古巢である。此島の産卵時期は六月からであつて、此附近では三宅島の南部十湮ばかりの所にある御藏島クラジマが主な蕃殖場である。

カンムリウミスズメの卵の他、孵化して間もなく斃死した雛の乾枯びたのも二三見ることが出来た。こまかい産毛の儘、背は灰黒色で腹部は白く、嘴や脚も親鳥の面影を微かながらそなへてゐる。

巢の状態を撮影したり、辨當を食べたりして約二時間を費した。風が少し出て来たやうだと、船頭が心配氣に云ひ出したときは、先刻から見ると海面には白い波頭が餘程増してゐて、島の縁は湧き立つてゐる。もう上陸した岩は到底、利用出来ないとして左手の凹みはと、波際迄行つたがどうも駄目らしい。岩に立つ足は波に洗はれるかと思ふと波が引いた直後、水面ははるかの下に落ち込んでゐる。そこへ舟がはまれば必ず覆へるだらう、人が落ちれば身は岩間に消えるだらう。迎ひの傳馬と陸で相呼應しつゝ、舟着き場を詮議したが中々思ふやうに適當な所がない。幾度か場所を變へ歩いてゐるうち、これはもう今日からいく日は疊の上で寝ることが出来ないだらう、と半分諦めの氣持ちさへ生じた。

それでも辛うじて舟へ飛び移る瞬時を僅かに得られた。三つ目位におし寄せる大きな波を避けて舟が浮び上ると同時に立つてゐる岩を蹴つて小さな傳馬に飛び込んだのである。「あんな顔は眞蒼ですよ」と私に云はれる清棲伯の顔も血の氣の無い顔だつた。七人の人が次ぎ／＼と舟に乗り込んで初めてほつとした氣持ちになり、島を一周して見る。

此主島の他に二つの熔岩の島が在る。之等を合せて三本岳と云ふのであるが、他の二つは赤い熔岩をその儘、全くの赤裸で海中に怪しい姿で並立してゐる。附近では餘り海鳥の影は見られな

かつた。岩山の頂にとまつてゐたミサゴは多分何處かに巢を持つてゐるらしい。ウミウの巢も在るらしい。

歸路は波間に浮んだ四、五羽連れのカンムリウミスズメを二、三回見た。其他小さな姿で波上を木の葉のやうに軽くゆくアカエリヒレアシシギが二三。

アマツバメ

夕食を待ちつゝ宿の二階で寛いでゐると、空の方で「チリチリチリチリ」と騒がしく鳴き合ふ聲がする。出て見ると、よく晴れた夕空に二、三十羽のアマツバメの群が渦を巻きつゝ鳴き合つてゐるのである。丁度子供等が鬼ごっこでもしてゐるやうに、後のものが先になり、重なり合ひ、又ほぐれて群は圓を描く。可成りの上空、鳥の大きさは蚊位に見え、静かな水面を滑べり廻るミズスマシを想像させる。初め何をやつてゐるのだから一寸見當がつかないで、やはり蕃殖時期にやるディスプレイではなからうかと私は考へた。然し之をその後よく観察してゐたら飛翔中に交尾をしてゐることが明らかになつた。

三宅島では大久保や阿古の海邊の斷崖に澤山營巢してゐるが、どうにもその現場迄は登ること

も降りることも出来ない。アマツバメは飛んで来て崖の隙間へスポンと飛び込む、巢はその奥に在る筈だ。他の例に依ると巢材は藁に似た海岸の枯草を、ゼラチンのやうな唾液で固めてある。卵は眞白で二箇を産むのが普通である。

此鳥の翼は非常に發達して開けば三日月形になるが、脚は至つて貧弱なもの、しかしアマツバメの脚は歩行の爲のものではなく、とまることのみ用ひる脚で寧ろとまると云ふより、垂直な場所にしがつくのである。アマツバメは若し地上に下りたら殆ど飛びあがる事が出来ないと言ふのは、脚が短い代りに翼が長すぎて地上では思ふやうに翼を動かせぬからであらう。それで休むときは垂直な所にしがみつくやうにしてとまり、いざ飛ぶと云ふ場合は、その場から落下してその瞬間に翼を使ふのである。

私達が歸航の折、船が新島に停泊した、その時に、船から見える砂丘で二、三人の子供が細い釣竿をてんでに持つて、恰もトンボを釣るやうにしてアマツバメを釣つてゐるのを見た。竿に付けた餘り長くない糸の末端に、魚を釣るときのやうに、釣針に白い紙を着けて竿を振る。偶々砂丘上を低く飛び切るアマツバメは飛びつゝ此釣針の紙を蟲と思つてかゝるのだ。

古い書物で見たのだから現今ではどうか判らないが、歐洲のセントキルダールと云ふ孤島では、こゝに多棲するプツフィン（ツノメドリの種類）、ギルモット（ウミガラスの種類）を釣ると云ふ。之は山の斜面にとまる之等の鳥に徐々と近づき、長い竿の先に細紐の括りをつけたのを鳥の首に引っかけて捕へるので、釣ると云ふより引っかけるのである。之に比べると此アマツバメ釣りは本當の釣りで私は珍らしいと思つた。しかし之は子供等の徒然をなぐさめるいたづらであつて、捕へても別に何か目的のあるものではないやうである。

奄美大島の鳥

四月十一日の夕方、落陽に送られて船は鹿兒島を出て一路南下した。船は大坂商船の首里丸、沖繩航路の途中名瀬ナセ（奄美大島）へ寄港する定期船である。翌四月十二日、天氣は稍々良好であるが、海上は潮流の加減か妙なうねりがあつて船は大きくゆれる。夜明けと共に甲板へ出て見ると、最早大島は間近く迫つてゐた。海上には餘り鳥影は見えない。正午近くなつて、波間を鋭く横切る一羽のクロアシアハウドリを見て初めて大洋に在る我身を省られた。

正午、名瀬の港へ入る。思つた程氣温は高くなかつた。小笠原島へ行つたときの經驗から此頃だと餘程の暑さだらうと思つてゐたが、昨日出た九州の南と大した差は無いやうに思はれた。緯度から見ると八丈島よりずつと南、寧ろ小笠原島に近いのであるが、今感じる氣温も景觀も丁度八丈島位のものである。今更ながら黒潮の影響の差が大きいことを知つたのである。

町を歩いて見ると、家々の庭に蘇鐵が茂り、小さいながらもパパヤの木が見られ、モンキアゲハやミカドアゲハ等が飛び、ある商店には色々形の異なつた熱帯産の貝等を賣るのがあつたりしてさすがに南の國の感覺だ。

名瀬は島の中心地點からずつと北に在るが、此處から、少し大きな言ひ方だが中央山脈を斜に横切つて南側の海岸に出た所は丁度住用村に當る。名瀬へ上陸して第一に得た印象は餘り期待した程のものではなかつたが、山脈を横斷して南海岸へ出たらきつと面白いに違ひないと思つたのである。更に南の古仁屋方面へ行つても亦興味あるものと推定されるが、住用村から稍々南方へ進んだ邊から古仁屋一帶は要塞地帯に入るので、私、初めから此地方は避けて住用村中の城と云ふ僻村を選んだのである。

午後二時頃から古仁屋へ向ふ定期の乗合自動車に乗つた。ひどいがたフォードだつた。

自動車が山地へ入ると景觀は一變して如何にも熱帯のジャングルを見るやうである。椎、タブ、ユスと云つた常緑樹が山林の大部分を占め、谷間には巨大なヘゴノギが暗々と茂つてゐる。樹梢を縫つて飛ぶ大きなツマベニテウの白い姿が眼につき、里の人家附近にはモンキアゲハや、ナガサキアゲハ、アケボノテウ等が見られた。自動車の行く手を横切つて、谷間へ隠れる鳥の姿は黒かつたが、之はきつとルリカケスに違ひないと思つた。

幾つかの坂を越して人里を過ぎ、ある峠にかゝると、眼下に青い海だ。之が住用村の入口である。坂を下りると芭蕉畑や、甘蔗畑の續く人里へ出た。

城だと教へられた所は坂を下りきつて海に面した寒村である。海寄りの路端にはアダンの林が恰も堤防のやうに高く長く續いて、自然の防風林を築いてゐる。インガキテウが淡紙をちぎつて飛ばすやうに軽く風に浮き、又その邊を子供等が大きなポンポンを出して尺八のやうな甘蔗を嚙つてゐた。所々に田舎の神社で見る繪馬堂のやうな萱葺の小屋があつて、中では大勢の娘たちの紬を織る機の音が和かに聴かれた。

勿論宿屋と云ふものは無い。商店と云へば赤い「たばこ」の看板が一つかゝつた通りの家で、そこは食料品から衣類に至る迄倉庫のやうに品物が置かれて商つてゐるのが一軒ある位、初めて來た私はその宿所に當惑した。訝かしい眼で見られながら駐在所の人に頼んである一軒の家へ泊めてもらふことになつた。

城での十日にわたる生活は余り樂なものではなかつた。夜毎に蚊と蚤の鄭重な歓迎、又雨の多い所だとは聞いてゐたが、なるほど雨にのみ明け暮れる。小笠原島等で見ると爽やかな勢のいい驟雨ではなく、しと／＼と氣長く降りつゞく雨である。出るにも出られず、唯ぼんやりと限りない雨垂れを見つめた儘日を暮すことが多かつた。

雨の日に限らず、夜に入ると静寂は又一入。植付けを終へた水田で鳴く蛙の聲は、自然の沈黙

を僅に點綴してゐる。夜が更けると定つて、隣家で蛇皮線の音が聽えて來た。哀調に滿つ琉球の歌、鈍重ではあるが詠歎的でメロデラスなもの、私が此旅で忘れ得ぬ印象である。

城へ着いた日の翌日(四月十三日)徳さんと云ふ青年の案内者を得て山へ行つて見た。

出發前から氣がかりだつたものゝ一つ、それはハブだ。此處へ來たら「それ程でもないですよ」と云つてくれるかと思つてゐたら、決して少くないと皆口を揃へて云ふばかりか、丁度之からが出盛りだと重ねて嚇かされた。

此蛇は里と云はず山と云はず何處にでも現はれて、殊に薄暗い山林では氣を付けなければ危険だと注意された。山で出會つた際、先方が先に當方を見つけたら既に遅い、又どぐるを卷いたらもう噛まれたものと思へ等と、之から山へ入る私を萎縮させる言のみである。蛇ばかり氣にしてゐると折角の鳥の方がお留守になり、初め二、三時間程のうちには山林を跋涉するのにひどく骨が折れた。然しそれも慣れると共に、ハブのことは私の頭から段々薄れて、しまひには内地の山林を歩くのとちつとも變りがなくなつた。

ヒョーシャ(ルリカケス)は城の村はづれの山路へさしかゝると直に出會つた。少し山の奥に入るとアカヒゲが、鈴を振り鳴すやうな聲で迎へてくれた。その他アマミヒヨドリ、オーストンゲ

ラ、リウキウサンコウテウ、リウキウサンセウクヒ、アマミシジフカラ等、次ぎ／＼に現はれて私を喜ばしてくれた。山は密林で極めて險阻、殊に羊齒類の種類の多いこと、又その巨大なものが多く眼につき、中でも七、八米の高さで並び立つたヘゴノキの林等を見ると熱帶的氣分が多い。

此島特産の珍らしいアマミノクロウサギの穴や、通路は山の所々で見られた。又巨大な鼠、ケナガネズミの穴等も山林の中で見ることが出來た。ある暗い椎林へ出たときに、ドドドッとひどい足音を残して、リウキウキノシンが轉ぶやうに駆け去つたこともあつた。

汗ばんだ身を樹陰に憩へば、金粉のやうに光りかがやく太陽を浴びて、ツマベニテウやアサギマダラ等がゆるやかな風に乗じて浮び出て來たりして私をちつとも落着かしてくれなかつた。

島の鳥と方言

リウキウハシブトカラスIIカラス

住用村海岸地方の人里に可成り多く見た。本種はハシブトカラスの亞種で、形態も習性も殆ど同様である。

ルリカケスIIヒョーシャ

方言でヒョーシャと呼ぶ。その意味はよく解らないが、島では一般にヒョーシャでなければ通用しない。詳細は他に記述する。

コムクドリ

村落附近で多数見た。渡りの途中であらう。(四月中旬)

スズメリスズメ

此鳥はカラスと共に、どこでも標準和名で通用してゐる。島では至る所、人里に多く、藁葺きの屋根が主な営巣場である。

キセキレイケチャブリ

ケチャブリとは尻振りのこと。此時期に、島では餘り多くないが少数は繁殖してゐる。セグロ

セキレイは見なかつた。

リウキウメジロハハナツユ、オクシャモ、オイモン

方言の中の、ハナツユは花蜜を吸ふ此鳥の名に相應はしい。九州の南、霧島山麓地方では「ハナツユ」と稱するが、之も前者に稍々似た名稱で「はなす花吸ひ」の意であらう。オクシャモ、オイモンに至つては一寸解釋がつかぬ。此鳥は全島、山林には極く普通である。

アマミシジフカラマンヌスド、オンマン

島では蜘蛛のことをマンと云ふ。それでマンヌスドとは蜘蛛盗人と云ふ意味になる。樹々を巡つて蟲を捕つてゐる此鳥の習性がよく現はれてゐる。オンマンとはよく解らないが、やはり蜘蛛に關した名稱である。形態は小形で、體色は内地産に比して淡色、又脇に葡萄色が無い。習性も大體同様で産卵は四月から五月中である。

アマミヤマガラチャチャグリ

方言の意味はどうもはつきりしないが、やはり生態的に表はした名であるらしい。鳥は山林中に見られるが餘り多くない。内地産に比して稍々濃厚な色彩であるが、三宅島のオーストンヤマガラ程ではない。

アマミヒヨドリヒウス

方言の意は不明。普通山林で蕃殖してゐるが、巢は發見し得なかつた。體色は黒味が多いだけで他は内地産に異ならない。

リウキウサンセウクヒ

内地産のサンセウクヒに大體似てゐるが、黒色部多く一見セグロセキレイを見るやうである。

島の人は此鳥の名稱を知らない、と云ふのは此鳥はゾナガ(リウキウサンコウテウ)の雌と思つてゐるからである。山地の密林中によくその聲をきく。本種は琉球から西表島、種ヶ島、また南九州等に分布し、著者は冬季にも南九州で見たことがある。

リウキウサンコウテウゾナガ

方言は尾長の意である。内地産のものに比して著しく黒味が多い。山林中に普通で、島人は此鳥の鳴きを「ヒツチャ、グイグイ」と譯してゐる。又ある木樵は「あの鳥は山師(木樵)の變化である。木を伐るに日が足りず、常に『月日 欲し〜』と鳴く」と。

アマミキビタキ

此鳥には不幸にして出會はなかつたが、本種はキビタキの亞種で更に鮮美である。

リウキウウグヒスニマシユキヨジャ

此方言はウグヒスが冬季笹鳴きをしてゐる時期に稱される名であるが意味は不明。ホーホケキヨと鳴く時季には勿論ウグヒスで通るらしい。形態は内地産と略々同様である。

セツカニガヤドリ

方言は萱鳥の意。住用村の見里附近の湿地草原によく見た。

オホトラツグミニツツ、シツ

方言の意味ははつきりしない。此鳥は奄美大島にだけ特産する珍しい種類である。羽色は大體内地産のトラツグミに似てゐるが、大きさは非常に大きく、翼長は一六四—一六八耗である(トラツグミの翼長一三三—一四〇耗)。詳細は他に記す。

アカハラニタハトリ

住用村の人里近く、ある茂みの中で漿果を啄む一羽を見た。本種は島で蕃殖するものと思へない。丁度蕃殖地本州へ向ふ途中であつたらう(四月中旬)。方言の意は不明。

アカヒゲニアカヒゲ

ルリカケスに次ぐ特産の鳥で、奄美大島とその隣の徳之島と、少し北方の種ヶ島に産する。琉球地方にはホントウアカヒゲといふのを産し、沖繩より南にはウスアカヒゲが棲息する。共にアカヒゲの亞種であつて、本當のアカヒゲは奄美大島産のものである。詳細は他に記す。

リウキウツバメニツバメ

住用村地方には餘り大きな建物が無いので、殆ど見られなかつたが名瀬地方、殊に名瀬の町には非常に多かつた。四月中旬頃は漸く營巢の時期に入つた時で、寺の玄關の軒に營巢中の二、三

組を見た。内地産のツバメに比べて體の下面は汚れたやうな灰白色で、一見北九州の工場地、八幡附近に見る煤けた雀のやうな感がした。燕尾も切込みが少く尾羽は短い。

イソヒヨロイソビス

海岸の崖地に普通に見られた。方言は磯の鳥とでも云ふ意味であらう。

リウキウカハセミルカンドリ

方言は神鳥かみとりの意である。此鳥が家のなかに飛び込むと不幸があると稱してゐる。水田地帯に多く見る。

リウキウアカセウビンルグツカル

内地のアカセウビンを更に濃色にした羽色で、背面は紫色光澤を帯びた赤栗色、下面の色も赤味多く、上腰部の青い羽毛も殊に鮮かである。冬季は南方へ去り、四月下旬頃から島に現はれる。私は四月十九日城グスクから見里ミヤトへ通ずる山道の側の崖下、こんもりと茂つた林の中に一羽此鳥のたゞずむのを見た。アマガヘルを捕食してゐるらしいが、未だその鳴きは聴かれなかつた。

グツカルの名はこの鳥の鳴き聲から出たものらしい。内地のアカセウビンとは多少鳴きは異なるものと想像されるがつひに聴かれなかつた。グツカルに特に關心を持つたある一人の獵師は、

この日見たグツカルはおそらく今年最初のものだらうと云つてゐた。巢は内地とはことなり、赤土の崖の壁面にカハセミの如く穴を穿つ。海岸に沿ふ山腹の道端に數箇所その巢穴を見ることが出来た。

オーストンゲラ

山中で一度観察し得た。大體オホアカゲラに似たものであるが、腹部は恰も赤土の濁水で水浴したのかと思はれるやうな汚れた色をしてゐる。

アマミコゲラ

一度その聲を聴いただけで姿は見られなかつた。

リウキウコノハヅクルユシキヨ

住用村の山奥に棲息してゐる。その聲を態々聴きに山へ入つて見たことがある。他章に詳しく記述した。

アヲバヅクルフクロウ

山中で夜間其聲を聴いた。

ミサゴ

住用村附近の入江に二三度見た。

サンバIIホエクサ

方言の意不明。島には少くない。

アマサギ

見里の湿地で一羽見た。山林中で蕃殖するらしい。(四月十三日)

カラスバトIIウシドリ

此方言は他所でもよく耳にする。全く其鳴き聲である。山中で *Moo n. Moo n.* と間を置して二聲づつ鳴く。知らない者には鳩の聲とは思はれない位である。

リウキウアヲバトIIオーバト

方言のオーバトは大鳩の意では無い。之も鳴き聲から出た名稱であらう。

リウキウキジバト

山地で多数見た。

アマミヤマシギIIシーギヤ

方言はシギの訛つたものであらう。本種は奄美大島特産の珍種である。ヤマシギに比して非常

に大きく、従つて卵も大きい。詳細は他章に記す。

ベニアジサンIIイキヨン

住用村から西南に在る岬の突堤に此蕃殖地がある。他所にも必ず多産してゐる筈である。方言の意は不明。或はその鳴き聲から出たものか。

リウキウヒクヒナIIクイナモンジャ

見里の湿地に多い。鳴きは未だ聽かれなかつた。

バンIIコメラ

前種と同じ。方言の意は不明。

ミフウヅラ

海岸の草地等に營巢産卵するさうであるが、此地方では隣の喜界ヶ島が主な蕃殖地である。不幸にして私は親しく之を見ることが出来ないで残念に思ふ。

其他「タハ」と云ふ水禽が居ると云ふ。之は又一名「チッピー」とも云ふさうである。舊の十月頃から翌年の一月迄の間に大群をなして見里の入江に現はれると云ふ。丁度其頃「タハガニ」と稱する蟹が澤山出現し、之は天から來た蟹と人々は稱してゐる。

又「タハ」は水面を常に飛び廻つてゐるが、漸く舞ひ呆け疲れて體が脹れ上り、その鳥は終にブクロウに變ると云ふ言傳へもある。海鳥と思はれるが何れの鳥であるかはつきり見當がつかない。エリグロアヂサシか又は他のミヅナギドリの群をなして越冬に現はれるのではないかと私は想像する。又前述タハトリ(アカハラ)とは全く異なるものだと言ふ。

ルリカケス

名瀬から住用村へ向ふ道すがら、ルリカケスは道路に面した崖縁等によく見られたので、思つたより多棲する鳥だとその時思つた。城に着いて車を下りるなり、彼方の山の端でギャーツギャーツと鳴く聲さへ聴えた。山へ一步足を踏み入れると此聲は四邊から聴えて、初めのうちは珍らしく眺めてゐたが、しまひにはすつかり飽きてしまふ程になつた。

此島ではルリカケスのことをヒョーシャとよんだ。ヒョーシャは深山よりも寧ろ人里近くの山に棲み、營巢も山の奥より却つて人里近くの方を多く選ぶやうである。之は全く此鳥の食性によるものでヒョーシャの最も好む甘藷の爲めであると斷定されるのである。其他の食物では此島の主な樹木とも云へる椎で、此の實は甘藷に次ぐ嗜好物、然し之は成熟期は秋だけだから、一年中休

みなく山畑に豊富な甘藷はやはりヒョーシャの主食物と云つてもいゝ位である。

まだ他に昆蟲類や小爬蟲類も捕食し、又椎以外の樹木の實も勿論食べるのである。だが何と云つてもヒョーシャは甘藷畑から離れ得ぬ深い關係を持つてゐるのだ。人影が見えなければ一羽又一羽と畑に集り、一羽が藪蔓を啣へ兩脚を張りズル／＼と引く、一羽は土の表面に現はれる若い寧ろ未熟の甘藷を引張り出し、後はサク／＼と美味さうな音を立てて皆で啄み合ふ。

リウキウキノシジモやはり甘藷の敵であるが、これは方法に依つては何とか防げるものだが、空から降つて來る此剽盜にはどうにも手がつけられないと村人は怨嗟の聲をあげてゐる。案山子や其他の威嚇にはもう何の關心もなく、隙さへあれば藪掘りに餘念がないので、ある場所では違犯と知りつゝも手製のトラップで捕獲する人もあるやうだつた。

此鳥が世界の珍種として學界に紹介されたのは可成り古いことであるが、當の日本で大事がられたのは左程古い話でもない。一八五〇年、偶々來船したボナパアト氏によつて初めて學界に出されたが、此時は産地は明かでなく、唯日本産と云ふだけであつた。其後明治卅七年になり、アランオーストン氏の採集に依つて永い間の疑問にされてゐた産地も明かになつたのである。

其後と云ふものはヒョーシャにとつては全く不遇な時代に見舞はれた。肉は食べても決して美

味ではないが、その羽色の鮮美さが禍し、又此島以外の場所には棲息しないと云ふ世界的の珍鳥と云ふ名聲がヒョーシャにとつては有難迷惑な話である。輸出入の盛であつた歐洲戦亂のはじまる大正四年頃迄、捕獲して海外に出された数は夥しいものであつたらう。多いときは一年間に三千羽以上であつたと云ふ話だけでも程度が知られる。此情勢が此儘續いたなら必ずヒョーシャは地球上から姿を消したに違ひない。

大正八年の狩獵法の改正で保護鳥となり、又更に大正十一年、天然記念物に指定されたので危かつたヒョーシャの運命は辛うじて此時助かり、以後十五年間、その保護のもとに大島はヒョーシャの時代と變つたのである。之は八丈島のアカコッコと同じもので、大島のヒョーシャも確かに今は生産過剰と云へよう。全く此邊の關係は中々難しいものであると思つた。

形態は内地産のカケスより稍々大きいだけで大體タイプも似たものであるが、其羽色に至つては似ても似つかぬ色である。頭部、尾羽、翼の一部は濃厚な紫紺色で、背面から胸部、腹部は鮮やかな栗赤色、色の配合から云つても此二色は殊に鮮美さがある。幼鳥は大體成鳥を黒つぽくした色であるが、尾羽や翼の先端には白斑がなく、之は野外に於いての明かな比較點である。

蕃殖時季は十二月の末頃からぼつ／＼始まり、翌年の二月上旬から三月迄が最盛期である。然

し異例として、四月又は五月頃、未だ新鮮な卵のあつた例も澤山ある。

内地のカケスは懸巢と書くが、その巢は決してメジロの巢のやうに懸垂したものではなくて樹の横枝を利用して造つた皿形の巢である。此ヒョーシャはすべて樹の洞穴を利用する。樹洞であるから高低はまち／＼であつて、高いのは十米位から、低いのはほとんど地面の上のものもある。

樹木は椎とユスが選ばれるのは、此島に此樹が多いばかりでなく、洞穴をもつ古樹としては此樹以外餘り無いからであらう。面白いことには巢の出入口の外に又非常口とも云ふべき穴が大概別にあること、之は鳥が穿ち開けるのではなく、初めからさう云ふ所をつとめて選ぶらしい。

樹洞の深いになると、出入口から底まで二米もあるやうな例もあり、ある例では樹洞と云へないやうな枯幹が辛うじて日光の直射を防いでゐる程度のももある。何れにしても洞穴を利用してゐながら、その儘樹枝上に懸けてもよささうに思へるくらゐ産座はちやんとした皿形に出来てゐる。細枝や蔓を巢臺にし、外部は主として苔類、又樹根等を混ぜ、内部は樹の繊維、殊にヘゴノキの繊維等を多く使用してゐる。

私が來島したときは既に最盛期を過ぎた、四月の中旬であつた爲め餘り澤山の例を見ることが

出来なかつた。

- (1) 人里より可成り遠く離れた山中、斜面に在るユスの古木の空洞に営巢中、洞穴は下底迄二米以上もあるが、巢はその途中の棚状の箇所になつた。
- (2) 道路に面した崖から突出してゐるユスの樹、地上五米の古木で、巢は入口から一米半くらゐ下の底部、之も営巢中であるが殆ど完成に近かつた。
- (3) 第2例の場所から餘り離れぬ所の椎の古木、洞穴と云ふより寧ろ朽木の樹幹である。地上半米、殆ど完成して産卵するばかりである。
- (4) 人家附近の急斜面、椎の大木、地上二米位の所に入口があり、巢底は約一米程下、三月十日三卵あつた由、今は廢巢。

巢の大きさを平均すれば大體、内徑十五糎、深さ九糎、外徑は樹洞に應じて洞内一杯にするが之も平均して三十糎内外と云へよう。

卵は一腹三―四箇産むのが普通で、時折五箇、又ある例では七箇と云ふのが有るが之は異例であらう。既に卵期は過ぎてゐたので終に卵を見ることが出来なかつたが、標本に依ると、色は淡い青色で、稀に淡褐色の條斑のある卵があつて、大きさは $33mm \times 24mm$ でカケスの卵より稍々

大きい。

ある木樵がヒョーシャを呼んで見せると云つて、ススキに似た草の莖を三寸ばかりとつて二つに折り、曲り角の内側に葉で小さなリードを作つて一方を糸でしばつた。さうして口に當ててフツと吹けばピーツと云ふ破れ音が出る。なる程ヒョーシャの叫び聲に似た音である。色々と口で加減して強弱をつけ、

シャー シャー シャー シャー ピーツ

遠い谷向ふで此音に應じたヒョーシャの聲がギアーと鳴く、その聲が何時の間にか近くに迫つて来て丁度頭上の椎の木に来てとまつた。續いて一羽、又一羽、と見てゐるうちに四、五羽のヒョーシャが集まるのを見た。

若し此内の一羽を捕へてギアーギアーと悲鳴を出さしたら此數倍の鳥が集まると、密獵の一法を思はず口にすべらしてゐた。

内地のカケスにも多少此習性はあるが、之程著しくはないやうだ。又山を歩いてゐてヒョーシャがギアツギアーとやかましく叫ぶときは必ずその近くに巢や、巢立した雛が居ると確定し得ると云ふ習性も解つた。兎に角他鳥より集團性に富む鳥だと云ふ一端が知れる。

アカヒゲ

ルリカケスは鳥を代表するだけの価値はあるが、今では多少持て餘された存在である。又此鳥は羽色に於いては中々立派な色であるがその聲に至つては決して美聲ではない。鳴きと云ふより寧ろ絶叫である。それで、若しこゝにルリカケス以外に此島に特産するアカヒゲが居なかつたらどれほど物足りなさを感じたであらうか。アカヒゲこそは潤葉樹茂る亞熱帯の山にふさはしい鳥なのだ。

コマドリに近い種類であり、習性も亦大體似たものである。形體はコマドリより稍大きく、頭部から脊、腰、尾羽迄オレンジレッド、顔、喉、胸は黒色、腹部から下は白色、この混濁の無い黒白の對照と、背部にまとふ炎えるやうな緋衣ひころもは決して調子外れの下卑た色調ではない。私は此鳥を見て、唯々造物主の技巧をのみ驚歎するのである。

囀りは又美しい。大體コマドリに似てゐるが、もう少し聲量があり、ヴァリエーションに富む。コマドリの鳴きのテーマであるところの、ピツ ツル……と云ふツリラは、アカヒゲでもやはりこれがテーマで、其他ルリビタキのやうに、ヒョル……といたいけな鳴き

を續けることもある。又、ジョリ……と云ふ鳴きはコルリを想はせる聲だ。ある木樵が口笛を吹きながら、手の指先で軽く頬のあたりをたゝいて、アカヒゲの聲を眞似たが中々巧みな模倣であつた。

アカヒゲは山を少し深く入らなければ見られない。それも谷間に面した場所、ヘゴノキや其他の羊齒類が重り合つて茂つてゐるやうなほの暗い所等には、必ずアカヒゲの美しい聲がきかれるのであつた。併しあれ程鮮やかな羽色であるが、慣れぬうちは茂みの中にアカヒゲの姿を見出すことは中々困難なことであらう。

産卵の時期は四月中旬から五月下旬迄、丁度私が行つたときは之からその時期に入るところだつたが、たうとうアカヒゲの巢は見られなかつた。ある日巢を探してゐる私に一人の木樵が、「アカヒゲの巢なら谷川を遡つて探すとよい」

と教へてくれた。溪流に面した崖等に營巢すると云ふのだが此習性はコマドリと全く同じところである。又ある一人は、

「枯れたヘゴノキの頂上には必ず在る」と云つた。

二米から三米程のヘゴノキが枯れて、梢に着いてゐた葉が落ちると幹だけが立ち残り、頂上は

丁度お椀型の凹みになつてゐてアカヒゲの営巢に恰好な場所となるのだ。

その他朽木の洞穴等が主に選ばれる営巢場所である。巢材は落葉、蘚苔類、繊維等、一腹に四、五箇を産卵し卵の色は標本で見ると淡い代赭色で餘り光艶がなく、土器のやうな感じである。

山の一夜

じめ／＼と降り續いてゐた雨が思ひきりよく止んだが、ぱつと光を投げた太陽は既に西の山の端にかゝつてゐた。それでも思ひきつて之から山へ入ることにした。カメラ、電気フラッシュのセット、電池、寝具、食料等一切を用意し徳さんと私と分割して脊に負ふ。今宵の宿は營林署の小屋か木樵の小屋、何れにしても木樵たちには厄介になる筈だからと泡盛あわもりの一罎を用意して行くことを忘れなかつた。

今日の目的は、数日前から見つけておいたアマミノクロウサギの穴を利用してウサギが夜間出て來るところをフラッシュで自動的に撮影するのである。之は先日から數回試みてある程度の收穫を得てゐた。それにもう一つ、是非山で夜を明かして確かめたいと思ふのは「ユシキョ」の聲である。それは先日聞いた「ユシキョ」の話。

昔一人の獵師が居た。ユシキョと云ふ名だつた。クロクチコと云ふ名の犬を連れてある日出獵したがその犬が行衛不明となる。然しそれはユシキョが家へ歸つてから初めて氣がついたので、ユシキョは周章はやてて外しかけた脚絆はきの一方を残した儘、クロを探しに出た。數日を探しあぐんだあげく、遂に自分も命絶え、後ユシキョと云ふ鳥に化したのである。脚絆の片方を残してゐたら此鳥は左右の脚の色は未だに黑白に異なり、夜に出でて悲しく鳴くと云ふ。

「大きさは？」と、私はある木樵に聞いた。「ヒヨドリ位の大ききかな」二三人の木樵が口を揃へて答へた。「脚の色は本當に白黒か？」重ねる問ひに、「此鳥の姿を見ると不幸があると云ふから未だ見ない」とうまく逃げた。「然しまあ聽いて見なさい、その鳴くのを、……ユシキョ、クロクチコ、カースツペとちやんとはつきり云ふから……」と附け足した。

その歌詞のユシキョとは獵師の名。クロクチコは犬、後のカースツペと云ふのは豆腐のオカラのことで、ユシキョは常にクロの好むカースツペを與へたものらしい。とにかく「ユシキョ、クロクチコ、カースツペ」と三聲に鳴くと云ふ夜鳥、大きさはヒヨドリ位と云ふ。その鳴きを遠くから聴くと「ポー、ポー、ポー、」の三聲に聴えると一人の木樵が云つた。

元來奄美大島に産する梟ふくろう類は今迄にアヲバツクとリウキウコノハツクの二種より採集されて

ゐない。非常に珍種とされるプライエルヅク(リウキウオホコノハヅク)は沖繩本島と八丈島にのみ産し、未だ奄美大島に棲息することは立證されてゐない。して見れば此ユシキョと云ふ鳥はど
うも、リウキウコノハヅクに該當するのではないかと私は推定した。然も三聲に鳴くと云ふので
益々意を強くする、と云ふのは、すなはちコノハヅクは此頃すつかり有名になつた佛法僧ぶつぽふそうの聲の
主なのである。

密林で叫ぶヒョーシャの聲、又ヘゴノキの茂みで鳴くアカヒゲの囀鳴に私たちは迎へられて、
夕暮の山路を辿り、小屋には思つたより早く着いた。谷のへりを下へ降りると溪流が激んで青淵
を成してゐて、その畔に小屋がある。

徳さんが水際で夕餉の支度をしてゐると、ギャ〜と木樵が四、五人山を下つて來た。そして
爐端に集まつた木樵たちは「今夜はおはんに佳い御馳走をしてやる」と云ふ。爐火に包まれた眞
黒な鍋の中から出された御馳走、獸の肉には違ひないが見たところどうも見當がつかない。兎と
も鶏ともつかぬ、然も至つて粗野な大味の物。何んだときいても木樵たちは唯ニヤ〜笑ふだけ
で中々その種は明さない。

泡盛あわもりに刺戟された食欲に私は、あたつて死ぬ筈もなからうと此山の珍味を貪り食べた。どうも

肉の正體は此邊に棲む巨大な鼠、ジウジロウネズミ(リウキウケナガネズミ)か或は兎かもしれな
い。然し兎…兎だとすればあのウサギより他には島に居る筈がない。……あッいけない……
之はとんだ物を食はされた。

又シト〜と雨は小屋の萱屋根に落ちる。今にユシキョが鳴き出すだらうと云ふのだが、中々
その聲は現はれない。雨を避けたのであらう。

夜が更けて爐火は豊かな煖あたたかになり、静まりかへつてゐる。と、頭上の崖上と思はれる所で鳴き
出したものがある。

グルスク、グルスク、グルスク……

其の一つ〜の喘ぎで、静かな空氣の振動をさへ感じられる程の幽寂な聲であるが、又見えぬ
力の潜んでゐる感がする。あれがユシキョかと間を置かず木樵に問へばあれはフクロウだと云
ふ。アヲバヅクに違ひない。その聲は雨の合ひ間に續いて夜は更けた。

爐火は既に絶え、漸く寒さを増して來る。遂にユシキョは鳴かなかつた。木樵たちは爐端へ枕
を集めて眠つてゐる。私も蚤に攻められながら、怪しげな小屋の屋根に雨の音を聴きつゝ、いつ
しか果てない夢路をたどつてゐた。枕元に置いた黒砂糖の塊りを狙つて集る家鼠に幾度か假睡を

破られながら、時々アラバツクの聲が耳に入った。

じつとり雨露に濡れた儘、夜は明けかゝる。屋外は未だ鉛色に暗く、溪流の音も寒々しい。この時私は意外な聲を耳にした。

キュルイックー キュルイッキー キュルイッツー。

各々四、五秒づつの間を置いてその聲は唳々と黎明の溪谷に響き渡る。

私は初めて富士山麓の須走の宿に寝たときのことを思ひ出した。未だ明けきれぬ早朝の空を、「ジウイチー、ジウイチー」と鋭く鳴いたあのジウイチの聲を聴いて、何とも形容し難い爽やかな感じがして我が身が山里に在る喜びをしみじみと思つたものである。今きく聲はジウイチにも似てゐるが、あれ程の悲壯さはない代りに、單調で明るさを持つマミジロの聲と、我れと我が唱ふ歌に喜悅して轉つてゐるやうに見えるクロツグミの聲のユウモアさを少し含んだものである。ユシキョの聲は遂に聴かれなかつたが、まさか之がユシキョの聲とは考へられない。あの物語から考へてもユシキョには之程の明朗さは無い筈だと、私は獨りで勝手にうなづきながら聲の跡を耳で追つた。

聲の主は川下から徐々と川上へ溪流をたどつてゆくらしい。その聲が細々と溪谷の奥へ消えて

しまつたころ、眼をこすり／＼起上つた一人の木樵にあの聲は何だらうと聞いて見た。「あれはツツと云ふ鳥でさあ、又ツツとも云ふ。姿は見たことはないがあの鳥は夜になつて川を下り、夜明けに川を溯るのだ」と説明してくれた。

私は豫て小林賢三氏の發表された採集紀行に出てゐたのを見てゐたから、此鳥が此島特産のオホトラツグミであることを直感した。しかし大きさこそ異なるが、陰氣な鳴きをする内地産のトラツグミに比べて餘りにも異なつた鳴きをすることは全く想像もつかないことである。ユシキョに代つて明朗な黎明の歌を聴かしてくれた珍しいツツに私は満ち足りて晴々とした気持ちであつた。

アマミヤマシギの巢

長雨に倦み、私はもうぢつとしてゐられなくなつて徳さんを促し見里へ行つた。徳さんも氣毒がつて、私をある見里の知合ひの家に待たしておいて村中を軒なみに「教へんシヨリイ（教へ候らへん）」と聴いて歩いた。

空は明るいのに何處ともなく空の一隅から降りしきる雨のあしは頗る長く到底止みさうに見え

ない。濕つたオブラートの様に翅粉の落ちた蝶が雨の中を飛んでゐた。子供等が雨の合ひ間にと壊れた箱車を繕ふのを、私がぼんやり見とれてゐると徳さんが勢よく馳け込んで来た。

「シーギア」の巢がありましたよと云ふ。未だ止まぬ雨の中を敢然と出て、見つけたと云ふ獵師に伴はれ山の密林を攀上つた。蒸々する温氣に雨具を着けた身は、耐らない程汗ばんで、急坂に呼吸切れがする。何處かでしきりにリウキウサンコウテウが「ヒッチャグイグイ」と轉り續けた。

此邊だつたと案内の獵師が眼を四方へ配つた所は、餘り成長しない椎の若木が、びつしりと生え揃ふ暗い斜面であつた。しとどに降る雨もその儘地上へ落さない程に密生した枝葉、その代り降つた雨は一週間も乾かぬ程に、地面は陰氣さと濕氣を充分にたゞへてゐる。斜面には落葉と羊齒が折敷き、木の間を洩れる淡い光と雨の水滴がかすかに動いてゐる。

ヤマシギの巢を發見したのは四日程前だつた。薪を採りに行つて、ある枯木を倒すと、その倒れ木の下からバタ／＼とヤマシギが飛び立つた。をかしいと思つて見ると、倒れ木の幹は丁度ヤマシギの巢に覆さつてゐた。樹木の中枝があいにく、抱卵中の卵を二つ程潰したが一卵はその儘にしておいた、と云ふがその残された一卵は手を觸れて見ぬまでも、雨露を受けてジツトリと濡

れ、もはや鳥は見捨たものと推察された。卵はヤマシギより大形で、クリーム色地に褐紫色の斑点を印し、巢は徑十八糎位、僅かに凹む巢底には椎の枯葉を敷き、軒状をした斜面に生える羊齒は恰好の日除け、雨除けを作つて巢を被ひ、全く之はコジイネストである。

雨滴の音と遠いサンコウテウの聲のみで、巢の主と思はれるシギの羽音さへ聴かれない。黙々と巢を撮影する側に、又黙々と二人の男は私を見まもつてゐる。雨に濡れた卵はわびしいものだと思つた。

丁度今頃が産卵期の最盛期で、もう十日もすればバフ色と茶色を混へたダウンの雛が落葉の上を駆け歩くと云ふ。

アヲバトの聲

島には三種の鳩が棲む。キジバトの亞種、リウキウキジバトはよく人里近くの畑や茂みで見ることがあり極く普通のものである。リウキウアヲバトは山林に多く、尺八を鳴らすやうないみじき聲で啼くのとき折梢に聴く。ある地方では此聲を非常に嫌つて、不吉なものとしてゐるが、私

は此鳥の啼きを聴いて何時も決して嫌な聲だとは考へられないのである。

鳴聲の音階に半音を含むところがあつて少し短調的な感が無いでもないが、あの音色は極めて和やかな明朗性を持つたものである。餘り好い聲なので一寸鳥と思へないところが却つて無気味さがあるのかも知れない。

リウキウアヲバトは内地産のアヲバトと習性上殆ど異なつた所は無い筈であるが、リウキウアヲバトの聲を聴いて私は氣のせぬか、又は聴いた場所が良かったのか非常に美聲に感じたのであつた。それに比べると寧ろウシバトと呼ばれるカラスバトこそが奇聲である。此鳥の聲はよく牧場等で晝下り、睡たさうに低い聲で鳴く牛の聲を想はせるものだ。

「モオオー モッオー」とも馴こえ、又、「ウッウー ウー」とも聴かれるが、尻下りで各音には多少の高低がある。之は聴いてゐて餘り陽氣な感じはしないやうだ。いづれにしても此二種の鳩は山林中では却々眼につき難いもので、殊に樹葉中にゐるアヲバトに於いては容易に其姿を指摘し得るものではない。

ある日、アマミノクロウサギの洞穴を探しに、溪谷の幾段にも重なる瀑のへりをつたひ攀ぢ登つてゐた。彼方の谷間と思はれる所で、突然「ピウー」と鋭い音がした。その音は丁度人が手の指

を口に入れて鳴らすホイッスルのやうな音で、何が鳴いたのだか唯一聲で後は續かなかつた。先を行く案内の木樵が、殆ど呟くやうに、「あ、またマムシが鳴く」と云ふ。それを聞きとがめて、ほんたうにマムシが鳴くのかと問ひ返へすと、「あれア、マムシですよ」と又無造作に答へる。私は今迄蛇類が發聲するとは聞かなかつた。而も之程の高音を何に依つて出せるものであらうか。

此島で「マムシ」と稱するのはハブとは又異なる種類で、島語で、「コハジャラク」ともよぶ蛇である。又「ヒヤン」と稱する蛇も居る。ヒヤンは琉球から此島一帯に分布する蛇で、天氣の悪い時に出て來ると云はれてゐる。その他ヒメハブと稱する種類は方言で「クハー」と呼ぶ、前記の「ヒヤン」も「クハー」も或は今聴いたマムシの聲と稱するものに關聯したものではなからうかと一寸氣がついたのだつた。

兎に角まさかとは思ひつゝも、幽邃な四邊の環境等が頗る效果的で、その「マムシの聲」なるものが何となく薄氣味悪く感じられたのである。その時、又一聲「ピュー」と、今度は直に頭上の喬木で聴えた。はつとして見上げる。隠々と茂る濶葉樹の葉裏に見えた一羽の鳥、之はたしかにリウキウアヲバトの姿である。「マムシの聲」も案外簡単に正體を掴み得て、一寸あつけなかつた。之はやはりアヲバトの警戒する鳴きであると私は信じてゐる。アヲバト以外ではシラコバ

トが抱卵時季に之に似た聲を出したのを私は知つてゐる。

「ヒョーシャ」の撮影

滞在既に十日近くとなつたが、今度の第一の目的とするルリカケスの寫眞が未だ撮れない。それに豫定の日數も迫つて來たので私は全く氣が氣でなかつた。

昨日峠の茶屋で聞いた椎茸山に在ると云ふ一巢を頼りに、又今日の晴天を喜びつゝ山へ入つたのであつた。

峠の茶屋の人にその巢の所在をきく。此茶屋では椎茸の栽培を本職にしてゐるのである。山の密林中の斜面に幾百と云ふ枯木を倒し、よく降る雨に枯木は朽ち、その濕りと手頃な日陰は椎茸のつづくのに好適な場所となる。丁度その時季と云ふのは三月を中心として、その前後の頃、又盛にヒョーシャの巢を營む時季でもある。もう此頃は漸く季節の終り、十日程前に採りに入つたのが今年の最後だつたと云ふ。

椎茸採りの若者が此山の奥に在る椎の木にヒョーシャの巢を見つけたのも、茸採りの最後の日で、その時は卵が四つ入つてゐたさうである。急斜面であり、薄暗いところだから寫眞を撮るの

はむづかしからうと注意してくれたが、今はもうそんな贅澤を云つてゐられないからと案内をたのんだ。

私たちを聲援するやうに「ヒツチャグイグイ」と鳴くゾナガの聲が茂みの奥に聽えた。山は深い、九折に山の縁を幾曲りかして暗い椎の密林に出た。山路の畔、一本の椎の古木の洞を若者は指して「これにも巢があつたので、先だつて穴に半纏を被せて親を捕らうとしたが、逃げられて後はもう來なかつた」と云ふ。こゝなら撮影には非常に樂であつたのに、惜しいことをしたものである。樹幹に攀ちて巢中を覗いて見た。

巢底は暗く卵のかけらさへ見られないが、巢材はその儘残つてゐた。入口は拳大で入口から巢底迄約一米程、又巢底から約三分の一を上つた所、之は到底拳は入らないが、鳥體ならば辛うじて出入出来る位の大きさの穴が一つある。やはり之は非常口の用をなすのであらう。若者が半纏を被せて親鳥に逃げられたのは當然のことで、今更ながら山の腕白者の智慧に驚く。

岨路を外れて山林の中を進むと、時折イタヅラツ子のやうな聲でシャーシャーとヒョーシャが鳴く。倒木が歩くのに頗る邪魔で、踏み越え潜り抜けることを嫌になる程續け、とある谷に面した急斜面へ出た。地面は倒木、空は枝を交叉して茂る樹木、如何にも幽邃な所と云ひたいが此暗さ

では寫眞は困難だなと考へた。之だつたら夜間撮影用のフラッシュセットを持つて來るのだつたとひそかに悔むとき、若者が一本の椎の腐木に攀ぢ始めた。遠からぬうちに之も倒木となつて椎茸の着き場になる筈の枯木、上部は既に折れて無く、三米程の高さで太い幹だけ残り、それに蔓植物が一面に巻き付いてゐる。丁度幹の折れ朽ちた所は空洞になつてゐて、一方谷に面して窓のやうな穴がヒョーシヤの巢の入口となつてゐる。

若者は樹幹にしがみ着いた儘、逆様になる様な恰好をしてその穴から覗いて、「あゝもう躰たちよる」と叫んだ。降りるはずみに朽木の脆さ、出入口の一方はバラ／＼と缺けて落ちた。

巢の入口が山の方を向いてゐれば、斜面の上から見下すやうにしてカメラを向けられるのであるが、それとは反對に、稍々下向きになつてゐるのでカメラを据ゑるのに實に困難である。他に豫備になる巢があればこんな悪いコンディションの所は、やらないのだがと不承不承にカメラの据ゑつけを工夫した。

倒木の一箇所にスタンドの足場になる穴をあけたり、斜面に沿つて長さの足りない一方の脚には樹枝を切つて接ぎ足したりした。それでも未だ不安定なので側の樹幹にカメラを紐で引張つたりして、漸く撮れるやうになる迄幾時間かを費した。

その間、餘り頻繁ではないが、親鳥らしいルリカスケが附近の枝に現はれて、ギアギアと鳴いたが、どうも巢に對して餘り愛着が無いやうに見えるので之が又一つの心配であつた。

兎に角待つて見ようと、カメラのシャッターから約十米程の紐を引き、とある茂みの中に私は徳さんと身をひそめた。どうも餘り明るくない。おまけに空が曇つて來た。レンズはF.A.S.の開放の儘にしてイソクロームのフィルムではやつと120—110でなければ感じぬ位、それも之上曇つたら到底撮影は望めぬと云ふ惨めな場所である。

二十分、三十分、一時間。ふと近くの梢に來て、しきりに鳴いてゐるリウキウサンセウクヒの聲の方を私が見上げてゐると、徳さんが「來たです」と小聲で言つて彼方のユスの樹を指示した。なる程居る、雌雄二羽、それがどうしたものか、一向騒ぐ様子もなく極めて用心深くこつちを覗きながら、低い聲でクイクイと鳴き合ふだけで中々巢へ入りさうにもない。

又二十分、眼の先でパツと何か動いたと思つたら、樹上の一羽はヒラリと身を繚へして落下する様に巢口へスポンと入つてしまつた。惜しいチャンス逃したものだ。併し此速さではシャッターを紐で引くだけの寸時さへも得難いものだと思つて私は益々氣が重くなるのだつた。しばらくすると今度は又一つ困つたことをやり出した。それは巢に飛び込んだ親鳥を追ひ出し

て、もう一度入つてもらつてその瞬間を撮る心算で次ぎを待つてゐた。ところが、鳥たちは折角レンズを向けてある巢の入口から入るのを避けて、全く反対の非常口から出入し出したのだ。之では何時迄待つたところで到底寫眞は撮れない。

「徳さん、あれだ、濟まないが何かであの非常口を塞いで見て呉れないか」

氣軽く徳さんは請合つて、樹枝を手折つて穴を塞いだ。

次ぎのチャンス、やはり駄目だ。此巢の非常口と云ふのは比較的大きな穴で、樹の枝などで塞いだ位では、鳥はわけもなく隙から潜り込むので、又修理。

今度は稍々堅固な遮断でヒョーシャもさすが當惑したらしい。何處かいゝ口はないものかと云ふやうに樹幹の方々を巡り出した。巡りながらも本當の入口の側迄來てゐながらそれに入らうともしないで他の口を探す意地悪さに、私もほとゝ閉口した。併し入口が見つからなければ入らない！と云ふわけにはゆかないだらう。そろゝ飢ゑて來た巢中の雛が幽かながらも「シリシリシリ」と鳴くの聴くと、親鳥はあわてた形で遂に我を折り下の入口から入りかけた。併し速い、パッと來てパッと姿を消す。出るときは更にすばやく、銃口を離れる彈丸のやうにはじき出て、到底私の手でシャッターの紐を引くチャンスと與へない。幾度か失敗を繰返し、つ

ひにはもう半分は自棄氣味に、ヒョーシャが彼方の枝をはなれると殆ど同時にシャッターの紐を引くと、彼方でカメラがガシャリと音がした時、丁度ヒョーシャが巢口へ入る瞬時に行き當るやうになつた。之はサーカスでやるブランコの空中飛び渡りのやうな曲藝的のもので、之も幾度か失敗を重ねたが、そのうち一度か二度は辛うじてキャッチし得たかと思はれた。それも光線不足であるから全く此の不安さは他に經驗したことが無かつた。

さつきから徳さんは退屈の餘りシバ笛でヒョーシャを呼ぶのだと言つてジャージャー吹き鳴らしてゐたが、之は鳥寄せでなく却つて鳥追ひになるので止めてもらつた。すつかり靜かになつたと思つて徳さんの居る方を見ると何時しか樹木の下で眠つてゐる。ヒョーシャの叫び聲以外には全く物音は無く、徳さんの體にも椎茸がたちさうな静けさである。

夕刻が迫るにつれ又空に怪しい雲が垂れて來た。もうどう見ても撮影可能の光線では無いので中止することにした。此時得たものは僅かに二枚のフィルム、半月に互る苦闘も此二枚のフィルムに在つたと想へば感慨又無量である。

(附記) 巢内の雛は孵化後約三、四日位の裸仔で、未だ開眼してゐなかつた。雛は大體内地産のカケスの雛によく似てゐて、口中は稍々黄色を帯びた紅色であつた。ルリカケスとしては比較的晩期の蕃殖であらう。

小笠原島の鳥

小笠原島紀行

午前十時芝罘丸は芝浦を出て、沼のやうに穏やかな東京灣を斜かひに横切り、午後一時横濱着。夕方迄碇泊し、八丈島に向けて出港したのは、既に夜に入らんとする時刻、ベッド側の丸窓から港の灯の動くのを見ながら眠る。(十二月二日)

朝の海、静かであるべき筈の海面は頗る騒がしい。ザワ／＼と鳴る波の音さへ丸窓の厚いガラスを透して寝ながら聽ける。大きい波は幾重にも小波を重ね波頭は白い。船の動揺が激しくなるにつれ、漸く気分悪くなりかけた頃、八丈の島影へ入り、船の動きはをさまつた。

午前十時半、大賀郷(八重根)着。アカコッコの被害調査の命があつたので直に上陸。丁度東京の三月頃の気分だ、ゆるやかに風が吹く。アカコッコ多し。夕刻船に歸り六時頃になつて出船、島影を外れると急に船はまた揺れ出した。(十二月三日)

終日気分が悪く三度の食事も辛つとである。船はしきりに揺れる。加ふるに私の室は艦の方だ